
マブラヴ ガノタの野望

スクナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラヴ ガノタの野望

【Nコード】

N1328U

【作者名】

スクナ

【あらすじ】

よくある話。

ガンダムゲームで遊んでいた一人のガノタが神様の争いのとばっちりを受けて元の世界での存在と記録を消され、同じく争いのとばっちりで因果律が狂ったマブラヴオルタの世界の一つに転移させられる。

その世界の地球人類を救ってほしいと頼まれてガンダムゲームとガ

ノタ知識を基にした力を神様から貰い受けて何とかやっていく。

そんなよくあるお話

1 ターン目（前書き）

拙い話ですよ？

残酷な描写も出てくるよ？

情報や設定が不正確な所や分からない所、作者の記憶が曖昧な所はオリジナル設定だよ？

ご都合主義で段々とちーとになってくよ？

作者は地球連邦軍バンザイ！だよ？

物語時間が中々進まないよ？

オリ主、転移モノだよ？

それでもよかつたら暇つぶしに読んで下さい。

1 ターン目

PSPでガンダムゲームをやったんだ…

うん。

そしたらいつの間にか船のブリッジらしきところに居た。

…なんで？

室内の真ん中に据えられた一段高い席に座りながら周りを見渡すと、ガンダムのマスケットキャラの八口が端末の前の席に鎮座してたり、室内をプカプカ浮いてた。

そっすいえば重力を感じない…

あれ？

足が地面から浮いてプカプカと…

そこで席の脇に付いたひじ掛けにメモが貼ってあるのに気づく。

メモの内容は…

“ 拝啓、突然の事で戸惑ってるだろうけど落ち着いて読んでほしい。

私は神だ。

実は此方のミスで、君の存在を君の世界から消してしまった。

すまない。 本当にすまない。

君が居た元の世界では君が居たという記憶も記録も全て消滅してしまい、君が元の世界で生きるのは不可能になった。

そのまま放置すれば君の魂までもが消滅してしまうので、緊急措置として別の平行世界に飛んでもらったのだが…

重ねてすまない。

君が転移可能な世界が一つしかなく、しかもその世界は危険に溢れた世界なのだ。

更には君が今居る世界は、世界律が狂った世界で本来の歩むべき道から逸れた枝の世界なのだ。

本来歩むべきこの世界の姿は、異世界人の君も知っている。”

そこまで読むと、急に激しい頭痛が起こり、様々な映像と知識が流れ込んできた…

地球外生命体

地球侵略

生存を掛けた戦争

BETA

戦術機

オルタネイティブ計画…

「マ…ブラヴ？ おる…た？」

えっ… 今居るのはゲームの世界…？

半ば茫然としながらも手紙の続きを読む。

“ 本来ならば、この世界も君がゲームとして知る歴史を辿るはずだったのだが、君がその場に居る原因ともなった我々、神が存在する高異次元世界の争いの余波で世界の因果律が狂ってしまった。

その結果、このまま歴史が進んでも、最終的にはこの世界の地球生命は人類も含めて滅んでしまう結末になってしまふのだ。

最早、細かな歴史修正ではどうにもならない現状で我々が下した決断は、歴史に大幅な介入を施し、本来は生存するはずの地球生命の

救済を行う事にしたのだ。

そこで勝手ながら、異世人たる君に我々の代行者として地球生命の為に戦って欲しいのだ。

代行者たる君には、制限付きながら必要な力を我々から贈らせて貰う。

君が此処に来る直前にやっていたゲームと、君の知識を元にした力を受け取って欲しい。

本来であれば我々が自ら行いたいのだが、我々が直接力を行使するとその不安定な世界が崩壊する恐れが有るため、君にしか頼めないのだ。

我々の失態に勝手に付き合わせて本当にすまない。

しかし、願わくばその世界の地球生命を助けてやって欲しい。

やり方は君に任せる。だから、どうか我々の頼みを聞いて欲しい。”

え〜… いきなり過ぎる。

なに、この超展開？

これは断れるのか？

ていうか、俺にそんな大それた事が出来んのか？

…現状は手紙と、さっきの知識の流れ込みで分かった。

俺本体は、見た目はそのままで能力はガンダムのエースパイロット、アムロ・レイと同等… なんて畏れ多い。

上着のポケットに入ったPSPを使って兵器の生産とか出来るらしい。因みに技術レベルがあつて、それによって生産可能な兵器と生産効率が左右される。レベルは何かを作ったり、開発してけば上がるのは、直前にやってたゲーム、ギレンの野望とちよつと違うな…

8

兵器の生産には資源を使わないが上限があり、拠点を増やせば生産上限は上がる。

「現在地は、マゼラン級戦艦に搭乗して6つの戦隊を率い、月と地球の間…ラグランジュポイントに位置するコロニーの周囲に待機中か…」

戦力は、マゼラン戦艦にサラミス巡洋艦と補給艦のコロンブス級。艦載機はセーバーフィッシュにトリアーエズとボール。

あとはオーブンタイプのコロニーが一基…

パイロットと艦の運営は高性能AIを入れた八口がやるので人間は俺一人…

微妙…技術レベルが1だし、これでやれと？

「はあ…断れないんだろうな…」

え〜と、現在の地球の時間は…

西暦1997年の1月3日か…

まだこの時期は日本は無事なのかな？

「え〜つと、八口？」

「八口！」

とりあえず地球の状況が知りたいので、八口に声を掛けるとプカプカ浮いていた八口の一つが、羽のようなカバーをパタパタさせてこつちを振り向いた。

「あのね？ 地球の世界情勢が知りたいんだけど…」

「八口！」

応えた八口が俺の席に近づき、口を開けてケーブルを伸ばすと椅子に備え付けられた端子に接続して、ひじ掛けから端末とディスプレイを展開させる。

モニターに浮かぶのはBETAに真っ赤に染められた世界地図に、
各国のメディア情報から機密情報まで…

希望が持てる情報が少ない…

現在の生産可能なMSは、ザク？、？…

原作通りに行っても救われない地球…

俺が何かをやらなきゃならない…

なんとというリアルムリゲー…！！？

駄目だ。 どうすりゃいいのかわからない。 orz

いつそ吊るか？

待て待て。 諦めたらそこで試合終了のお知らせだ。

まずは落ち着いて優先事項を考えよう。

… まずは戦力を整える事かな？

手持ちの戦力じゃ何も出来そうにないし、生産数を増やすために地球に降りて土地貸してもらって拠点を増やす… 無理だな。

いきなり土地を貸して下さいと言っても貸してくれそうもないし…

そこら辺の交渉とかややこしそうだな。

…暫くはコロニーに引き込もって、技術レベル上げたりして細々と戦力を蓄えるか。

うん！ そうしよう！ 先ずは戦力を整えつつ、情勢の正確な把握に努めよう！！

「ハロ！ 艦をコロニーの港に着けて。 あと、他の艦はコロニー周囲の警戒よろしく！」

『ハロ！』

俺の指示に従い、艦はゆっくりと向きを変える。 するとブリッジの横に円筒形の巨大な建造物、スペースコロニーの姿が流れ込んで来る。

「…シリンダーの中に街がある…か。 言えて妙だな…」
こんな状況じゃなきゃ、素直に感動出来るんだけどな」

異世界に一人で住むには大き過ぎる家だな。 狭くとも楽しい我が家が恋しい…

しっかり者の兄貴と姉が居るから父さんと母さんは大丈夫だろう。

俺の記憶が消滅したらしいから、悲しませないで済むのは幸いだ…

…幸いなのか？

やべっ。涙が滲んできた。

無重力だと、涙って周りに漂うんだ…

それすらも今は悲しいな…

『ハロ？ シンジ大丈夫か？ オ腹イタイか？』

「違うよハロ… 心配してくれてありがとう」

『シンジガンバレ！ シンジガンバレ！ ハロモガンバル！』

ハロに励まされた… 悪い気はしない。更に涙が零れそうになるがグッと我慢する。

見れば周りのハロ達も俺を心配してか、羽をパタパタさせながら『ハロ、ハロ』と合唱している。

「大丈夫だよ、みんな。…艦隊とコロニーに居る全てのハロに通信を開ける？」

『ハロ！ 出来ル、出来ル！』

これから一緒にやって行くんだから、挨拶はしとかないとね。

『繋がッタ、繋がッタ』

「ありがとう。…え、みんな初めまして。この度、みんなの指令長官？ になった藤枝慎治フジエタシンジです」

『ハロ、ハロ！』 『ハロ、初メマシテシンジ』 『テヤンデイ！』

通信スクリーンには他艦のブリッジに詰めるハロ、細いアームを伸ばして格納庫や機関室でメンテナンス作業を行っているハロに、食堂でキッチン帽を被ったハロが入れ替わり立ち替わり現れる。

一瞬、ライトグリーン色のハロ達の中に、ピンクのハロを見たのは気のせいだと思う。

「みんな宜しくね？ 此れから俺たちがどんな風に成るかはまだ分からないけど、なんとかやってみようと思う。だから皆で一緒に頑張ろう」

そう、頑張らなきゃいけない。

この世界で生きてく為には…

逃げ場なんて何処にも無いんだから…

1ター目(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

…今なら引き返せるよ？

2 ターン目

サイド1・ロンデニオン

宇宙世紀の初期に造られた歴史あるコロニー。

外観は他のコロニーと同じく、円筒形に採光用のミラーパネルが三枚付いたオーソドックスな形のコロニーなので、外から見た時には気付かなかった。

機動戦士ガンダム 逆襲のシャアの舞台の一つであるこのコロニーの街並みは、古い欧州の建築様式の建物が主流で、日本人の俺に異国情緒を感じさせる。

劇中では地球連邦政府の宇宙での政治的重要拠点の一つで、主人公アムロ・レイ大尉が所属するロンドベル隊の母港でもある。

車とコードを繋ぎ運転するハ口に連れてこられたのは、コロニーの中心部に建てられた一際豪華で大きな建物。

確かネオジオン総帥のシャアと連邦政府高官が裏取引をしようとした場所だと思う。

その玄関口に降ろされると、蝶ネクタイに髭を描いたハ口と、メイドさんのカチューシャを着けたハ口が出迎えてくれた。

『ハ口、ゴ主人シンジ』

「…こっこんには」

本当にハロしか居ないんだな…

ピョンピョンと跳ねながら進む執事ハロに通されたのは、如何にも貴族趣味的な執務室のような場所だった。

『座レ、座レゴ主人』

「…ありがとう」

広い部屋の奥に、窓を背にして置かれた高そうな机…そこに座れと言っのか？

恐る恐るこれまた高そうな椅子に腰掛けて、クッションのあまりの柔らかさに驚き腰を浮かしかける。

『才茶が入ッタゾ。 飲メ、飲メ！』

「どっどっも…」

球体からひよる長い手足を伸ばしたメイドハロが、ティーセットを乗せたカートを押してやって来てお茶を勧めてくれる。

手にした白磁に綺麗な模様の描かれたカップの中身は緑茶だった…

『美味イカ？ 美味イカ？』

「…美味しいけど、何で緑茶？」

『シンジ緑茶好き!』

…何で俺の好みを知ってるんだ?

…深く考えるのは止めよう…

「うん、そうだね。有り難う、美味しかったよ。次からはティ
ーカップじゃなくて湯呑みに淹れてくれると、もっと嬉しいかな」

『ワカッタ、ワカッタ! 任せろ!』

「お願い」と言つてそのままメイドハ口には下がってもらつた。
後に残るのは俺と執事ハ口。

溜め息を一つ吐いて改めて室内を見回す。

壁には掛けられたアンティーク時計がチクタクと刻を刻み、重厚な
本棚にはハードカバーの本が隙間なく整然と並べられている。目
線を下にやれば真っ赤な絨毯がフカフカと床を敷き詰め、部屋の中
央には高級品であろうソファとテーブルの応接セットが置かれて
いる。

部屋に自分が釣り合つてないが、此所がコロニーでの仕事場のよう
なのでパーカーのポケットからPSPを取り出して仕事を始める事
にした。

まずは戦力の把握から、現在6隻のマゼラン級戦艦と24隻のサラ

ミス級巡洋艦にコロンプス級補給艦が20隻ある。

機動兵器は、艦載機として作業用ポッドに最低限の武装を施したボ
ールに戦闘機のセーバフィッシュとトリアーエズ。

コロニーの直援にも同じ機動兵器が搭載されている。

生産可能な兵器は…

航空機に艦船、戦車か…

「…はっはっはっ。 どう考えても地上では戦術機の方が強そうだ」

戦闘機や爆撃機を飛ばしても、BETAの長射程、高精度を誇る光
線種の良いのだ。

海上艦は…使えない事もないが微妙。

後は61式戦車か… 戦力には数えられるかもしれないけど、この
世界の主力兵器、戦術機に比べたらね…

あっ！ ザク？と？は作れるんだ！

確認、確認。

…コストが高い。

あれだろうな。この能力のベースになったのが、シミュレーションゲーム・ギレンの野望の連地球邦軍データがベースになってるから敵軍のジオン公国軍の兵器は敵国技術なんでコストが掛かるんだろうな…

ザク？一機分のコストでボールが5機、戦車なら10両は作れる。

それだけのコストに見合う戦力かと言われれば首を捻らざるを得ない。空間性能には文句はないが、BETAとの戦闘は重力下の地上がメインだろうからザクのスペックだと戦術機の方に分があるように思う。

空間戦闘でも、たまに来るであろう宇宙からの飛来物、BETAの降下ユニットだか航行ユニットだかは、マゼランやサラミスに現艦載機で対応出来ると思う。

手が足りなければコストの安いセーバーフィッシュを増産すれば、コロニー防衛には充分だろう。

資源を使わなくても、生産出来る量には限りがある。PSPから発せられた生産指示は、コロニー内のファクトリーエリアでオートメイションで作られる。そして製造ラインには限りがあり、コスト⇨手間暇が掛かる物ほどにラインを占領してしまう。

先程のザク一機でボール五機と言ったのは、一つのラインで一日にザクなら一機、ボールなら五機出来ると言う意味だ。

今現在、コロニーの生産ライン数は10本有る。

この十本を効率的に使わなければならない。

「ボールだとフルにラインを使つて一日に50機。サーバーフィッシュと半々で作るか」

PSPの決定ボタンを押して生産を開始。

次にコロニー内の運営状況を見てみる。

ロンデニオンコロニーの総人口は、一人。各種ライフラインは正常に稼働中。食糧自給率は500万人まで養える生産量を誇り、今のところ一人だけなので余った食材は保存しているとの事。

「…食糧と引き換えに、土地貸してくれないかな？」

この世界の食糧事情は悪かつたはず。まともに三食食べられるのはお偉いさんと軍人さんだけで、食べられても人工食糧だかなんだかの合成食品の不味いので皆我慢してるんだよな…

天然物食品だから良いとは思うけど、それで土地を貸してくれるかはこれまた微妙だな。

そんな事を考えつつも、PSPを操作して現状の把握をしていく俺。

日用品は居住区の工場で、兵器の補給品はファクトリー区画の別ラインで在庫状況に合わせて生産されるのか…

後で視察がてら日用品を買いにいこう。

服装も部屋着のパーカーとジーンズから着替えないと、この部屋とミスマツチ過ぎる。

異常な状況に置かれても服装に気を配る余裕があるのは、元の性格故か適応性の高いニュータイプ能力を付加されたためか…

その後もコロニー内のマップや部隊配置等を確認していると、いつの間にか窓の外は暗闇に包まれていた。

2ターン目（後書き）

まだ今なら引き返せるよ？

3 ターン目

「お忙しい中、緊急の召集に集まって頂き有り難うございます。皆様の耳にも届いているとも思いますが、先ずは此方を御覧ください」

スーツ姿の男性がそう言って合図を送ると議場の明かりが落とされ、演台の後方に設置された巨大プロジェクターに映像が映し出される。漆黒の星の海に月をバックにして浮かぶ三枚羽の円筒形の建造物に、国際連盟議場に居る各国の要人達が静かに息を飲んだ。

「この映像は12時間前に、月と地球の中間地点、アメリカ宇宙軍と日本帝国宇宙軍の管轄境界線上に表れたものを両軍が撮影したものです」

遠方からの多角で撮られた映像がプロジェクターに映し流れて行く。映像が切り替わる度に日本帝国とアメリカ合衆国の国連大使を除く人々がどよめき騒ぐ。

そんな中、映像は静かに流れある場面で停止された。

それは最大望遠で写し出されたアップの映像。街並みの様な物が見える円筒形の内部と、それを背後に守るようにして砲口をカメラに向ける戦闘艦と思われる宇宙船。

議場に集まった人々は絶句した。

「……ご静粛に。この映像に映っている円筒形の巨大な建造物は、専門家が映像を検証して計測したところ全長約35km、直径が6km超の大きさであるとの見解が報告されました」

進行役のスーツ姿の男性の言葉に議場は再び騒然となり、皆が口々に「バカな!」「有り得ない!」と口にする。

「建造物と一緒に映っている戦闘艦とおぼしき宇宙船の方は二種類が確認され、緑色の大型艦が全長300m超。小型艦の方でも200m超だと推測されるそうです。映像から確認出来た数だけでも20隻を超える数が確認され、また艦船の間を行き交う噴射炎が多数確認されている事から艦載機を搭載している可能性も専門家から示唆されております」

もはや啞然として言葉を発する事が出来ない各国大使達。

その中でいち早く気を取り直した黒髪に焼けた肌の男が、洒落た仕事で手を軽く上げて発言を求めた。

「イタリア大使」

「有り難う。……年が明けたばかりでエイプリルフルにはまだ早いと思うのだが? 仮にこれが事実だとしても、その宙域を担当する偉大なるアメリカと誇り高い日本の優秀な兵士達は何故ここまで近づかれるまで気付かなかったんだい?」

名前を挙げられた二国の大使はその言葉に僅かに眉を動かしたが、それだけで今は納めた。

進行役の男はそれを目だけを動かして確認すると白い歯を見せるイタリア国連大使に向き直り説明する。

「数年前の天体観測記録から調べましたが、あの宙域に向かって進行する物体は何もありませんでした。日本とアメリカの宇宙軍が記録していた映像でも、あれが現れる一時間前には付近には異常はまったくみられません。あれはあの宙域に突然表れたのです」

「それであれば何者なのかね？ 何かしらの接触は？」

白いスーツを着た金髪の男性、フランス国連大使が優雅さを感じさせる口調で話に割り込む。

「今現在までに相手からのアクションはありません。何者なのかも… 人類なのかBETAなのか、それとも…」

「あれに関する対処は、我が軍とアメリカ政府が責任を持って対応するので任せてほしい」

進行役の言葉を遮ったのは今まで黙って座っていたアメリカ合衆国国連大使だった。

「ほう… それは何故ですか？」

アメリカ大使の言葉に返したのは、薄い笑みを崩さないフランス大

使。

「我々の管轄で起きた事だ。故に我々が対処する。それだけだ。…それに今はBETAへの対応で各国に余裕はあるまい？ ならば余力のある我が国がやるしかない」

「…ほうほう。貴方の国のお心遣いには痛み入りますな」

「待って下さい。あれの対応には我が日本帝国も参加させて頂きたい」

今度はアメリカと同じく、黙りを決め込んでいた日本帝国国連大使が話に割り込んで来た。

「…失礼だが、貴国にそれほどの余力が有るとは思えないのだが？」

「いえいえ、貴方の国ばかりに苦勞を掛けるのは心苦しいのですよ
アメリカ大使殿」

睨み合う日本、アメリカの両大使。そこに割り込むのは笑みを絶やささないフランス大使だった。

「宜しいのでは？ 合衆国のみ任せるのは他の国々も心苦しいでしょうし、ここは我々の代表として日本帝国にアメリカと一緒に動いて貰うと言うことで… 合衆国は単独でも行動出来ますので、日本帝国には我々フランスがEUを代表して支援させて頂くと言う事で…」

そこまで言うとはフランス大使は、イギリス、ドイツ等のEU加盟国の国連大使を見回し、頷きの肯定を得た。

この状況にアメリカ大使は齒噛みし、日本大使はなんとも言えない気分になった。

今回の国連緊急召集を掛けたのはアメリカ。彼の国は軍の撮影したとある映像を見て、正体不明の勢力との交渉をあわよくば独占するつもりだった。

既にある程度の情報が各国に流れてはいたが、その映像の情報は流れていない今ならば国連認定で交渉役として認めさせるチャンスを得ようとしたのだが、気になったのは日本帝国も同じ映像を軍から得ていないかだった。

杞憂は現実となり、揶揄込む日本と後押しするフランス。彼の国は良く聞く鼻で何かを嗅ぎ取り、ちゃっかり便乗してきた。EU諸国も、イギリス本土防衛強化並びにユーラシア大陸奪還の為の戦力増強で余力があまり無く、今のところはEU加盟国のフランスを潜り込ませておき後に益となるようであればフランスを足掛かりに入り込む腹積もりであった。

ソビエト連邦と中華人民共和国は地球上の最初のハイブ、オリジナルハイブの攻略戦において欲を出して失敗し、ハイブの定着と光線の出現を即す失態を犯した事と、国土を失い余力も無い事で今回の未知なる勢力との交渉は様子見する事にした。

あわよくは自分達に被害が出ない形でアメリカが交渉を失敗して、発言力が低下するのを望んではいたが…

未だに国土の大半を有するオーストラリアも今回は静観して益のある方へ付くつもりで水面下交渉に入ろうとしていた。

その他の国々には発言する力もなく静観する構えで事態を見守るしかなかった。

ロンデニオン・コロニー

「へぶしっ!」

くしゃみして目覚めた。

何か変な事が起きなきゃいいけど…

『ハロ! シンジ起キタ?』

「…おはようハロ。朝から元気だね…」

低血圧でぼーっとする頭を軽く掻きながら体を起こす。

執務室でPSPを弄り、腹が減ったのでコックハ口が切り盛りするハ口食堂でカツ丼を食べてシャワーを浴び、バスローブ姿で就寝した昨日を思いだし軽くため息を吐く。

安物の簡易ベッドから降りてスリッパを履き、目を醒ますために部屋の隅に据え付けられた洗面台へとソソソと歩く。

最初に寝る場所としてハ口に案内されたのは、天蓋付きの金持ちベツドのある部屋だったが、そこで眠る気になれずに一般職員の仮眠室らしき部屋に腰を落ち着けて眠った。

スチール机にテレビにパソコン、洗面台にシャワーとトイレが付いた10畳ほどの部屋の壁に収納出来る簡易ベッドの寝心地は中々のものだった。

少なくとも庶民の俺には溺れそうな柔らかさのあのベッドよりは此方のほうが落ち着く。

蛇口を捻り冷たい水を出して顔を洗う。水を顔から滴らせてポトと蛇口を見つめる。

(科学の粋を凝らして作られたコロニーなのに、蛇口のデザインが古くさいな。ああそうか。確か懐古趣味的なデザインが、真空と壁一枚隔てて生活するスペーススノイドに落ち着きをもたらす設定だったっけ?)

水が蛇口から流れて排水口に吸い込まれるのを眺めながら、今日の

朝食の事を考えた。

3ターン目（後書き）

まだ遅くないよ？ まだ引き返せるよ？

4 ターン目

「しかし何だね？ 我々の計画予定宙域にあのような物が現れるとは、どんな神の導きだろうね？」

星条旗が掲げられた部屋の執務机で、両手と足を組み白髪を撫で付けた初老の男性が青い目を細めて来訪者に語り掛ける。

「はっ、我々の計画にとって追い風になる存在である事を願います。さもなくば……」

制帽を脇に挟み、多数の勲章をぶら下げた軍服の男は姿勢を正し、踵を鳴らして目の前の白髪の男性に答える。

「物騒だね君は……？ それに“我々の”ではなく、あの計画は人類という種の為の計画だ。 故に“我々の”という言葉は不適切だよ……」

目を閉じた憂いを滲ませる顔を俯かせて白髪の男は軍服の男に語る。

「はっ！ 申し訳ありません大統領閣下」

「……大統領。 アメリカ合衆国大統領……。 私は先人達の偉業に泥を塗る最低の大統領として記憶されるのだろうか？ それだけじゃない、私は今現在 BETA と戦っている合衆国軍兵士……。 いや、世界中で人類の勝利の為に献身する人々を、この計画を進める事で裏切り続けている……」

「閣下…… その様な事はありません。 貴方は歴代のどの大統領に

も劣らない人物です。貴方以外の誰にこの計画の英断が下せたでしょうか？ 貴方以外に居りますまい。貴方は人類と言う種を後世に残すために、苦渋の決断を下した。貴方はガッツのある方です。後世に嘲られるべきは、事態に勝利の希望を見出だせない軍人たる私です閣下」

合衆国大統領と呼ばれた男は、古い友人の言葉に苦笑を洩らして和らいだ目を向ける。

「君は今も昔も最高に頼りになる私の大切な友人だよ將軍？ 私は君以上に勇敢で有能な軍人を知らない。私が保証する、だから誇つていい」

「はっ！ありがとうございます閣下」

「…お互いに年を取ったものだね… 君と一緒にファントムに乗って戦場を駆けずり回り、あのクソツタレBETAと戦っていた頃が懐かしいよ… あの頃も苦難の連続だったが、人類と祖国の勝利を微塵にも疑わなかった…」

「…はい」

在りし日の光景を細めた瞳で思い返し、懐かしくも悲しい思いに狂おしくなる二人。

「戦つて、戦つて… 戦い抜いた。しかし、長い戦いで若さとともに希望を失つていった… それでも諦めきれずに、より大きな力を求めて私達は上を目指した。地位を得て、より大きな力で戦いを挑んだ。… 持てるものも使えるものも全てを使った。だが、B

ETAはその悉くを嘲笑うかの様な物量で押し潰していった…」

「閣下…」

「神を信じ、国を国民を信じ、人類を信じたが… 光を私は見出だせなかった… 調査機関の計算では、人類に残された時間は最長で10年… 次代の大統領… 人類に望を掛けるには余りにも時間が無さ過ぎる。金持ち共が提案した地球脱出計画を各国の人間を平等に受け入れる事を条件に認めたら…」

「国連に第5予備計画として近々採決するご予定だと…」

「そうだ… 第4計画を推し進める国々とは揉めるだろう。しかし、人類を後世に残す為に打つ手は多い方が良い。仮に各国が丸となってBETAと戦い、それで勝って生き残る希望が僅かにでもあるならば私は協力を惜しまないつもりだ。しかし、第4計画は余りにも不確定要素が多過ぎる… それに人類の種としての命運を全て掛ける事は私には出来ない。私は少しでも可能性が高い方に賭ける」

大統領の握り締めた拳から血が滲み出し赤い絨毯に落ちて行く。

「たとえ新型爆弾を持ってしても地球上の人類の未来は… 永久に汚染された土地でどうやって復興しろと？ 汚染されていない土地だけでは地球上の全人類は養えない。口減らしか？ 戦争が起こって自滅するだけだ… 地球上のBETAを倒したとしてもそれで奴等との戦いが終わった訳ではない。むしろ今まで以上に苦しい戦いになるだろう… 食料を始めとした物資生産の不足、貪欲に犠

性を求める戦争で磨り減る人口……」

疲れ果てた老人は椅子に沈み込んで静かに目を閉じた。

「我々はダメだったが、新天地で生き残った新世代の人類がBET Aを……」

老人の小さな呟きは誰の耳にも届かず室内に消えた。

ロンデニオン・コロニー

V作戦。

それはジオン公国に追い込まれた地球連邦軍が発案した起死回生の一手。

連邦軍初のMSモビルスーツ開発計画。

朝定食（鮭の切り身）を食べた後に執務室でPSPを起動させたところ、画面の項目に昨日は無かった項目を見つける。

“特別”と言う見知った項目に期待を寄せながら開いてみると二つの作戦プランが……

“V作戦”

“ビンソン計画”

「ブホッ!？」

リアルで吹いた。

やべえー、キタコレ!

V作戦。平たく言えば、ガンダム開発計画。作戦発動することにより、戦闘機にしてMSのコックピットにもなるコアファイター、MSのガンタンク、ガンキャノン、ガンダムに、これらを運用する母艦pegasus級が開発される事になる。

また、ビンソン計画はマゼラン級とサラミス級にMSの運用能力を付けて、いっぱい作るうぜ! という計画だ。

ビンソン計画は一先ず置いておき、V作戦を発動させる。

「さて、ジャブローのモグラ共を説得するかな…」

「ハロ?」

「言ってみただけ」

作戦発動後に開発欄を見てみると、早速コアファイターとペガサスの開発プランが出ていた。

「コアファイターは明後日に、ペガサスは一週間後に完成って、はやっ！ ちょっばや！」

嬉しい誤算だ！ ワシヨーイ！

ついでにビンソン計画も発動してマゼランとサラミスの改良型を開発する。

マゼランは4日、サラミスは3日後に完成予定だ。

「よっしゃー！ 連邦宇宙軍再建するぞー！ 地球連邦軍ばんざーい！」

再建じゃなくて、新設だけどね。

「ふんふふーふーん　ふんふふーふーん　ふんふふーふーんガ
ンダム」　∴　そういえばハロ？　昨日は寝てる間に異常は無かった？」

昨日は疲れてぐっすりだったが、一度だけ嫌な予感がして目が覚めた事が気になっていた。

『ハロ！　デブリガーツコロニー二向カッテ来タカラ撃ち落トシタ』

「ふん。被害は出なかったの？」

『ナイ、被害ナイ』

スペースコロニーだからデブリ対策は万全か。

今日はボールとセーバーフィッシュの生産ラインを減らして、空いたラインでコロニー内の防衛用に61式戦車を少数生産しよう。

今日の昼食は何にしようかな？

4ター目（後書き）

投稿した事を少し後悔している俺がいる…

胸ドキドキのなんとも言えない羞恥心が心をえぐる…

俺が引き返したい。

5ターン目(前書き)

本当にいいの？

5 ターン目

星の海を渡る船があった。

船体に、白地に赤丸の国旗を描いたその船は、音の届かぬ真空の空を静かに進んでいた。

船の名前はアシガラ。 日本帝国宇宙軍に属するものだった…

「艦長、予定宙域に間もなく到着します。 タイムテーブルに遅れは有りません」

「…苦勞」

船内ではあるミッションを受けた宇宙服姿の兵士達がコンソールを見つめながら自が職務を全うし、あらゆる事態にも対応しようとしている。

「…アメリカ軍の宙域にリーダー反応有り、アメリカ宇宙軍の艦艇と推測。 …観測員も確認。 無線確認を行います。 こちら日本帝国…」

「やれやれ。 向こうさんもお早いお着きで」

口髭を蓄えた30第後半の男は、宇宙ヘルメットを外して被っていた制帽の位置を直してぼやく。

およそ18時間前に補充された新兵の慣熟を兼ねた警戒任務に就い

た彼らは、その任務の途上で日本帝国側で初めて“アレ”を目撃した部隊だった。

その後彼らは本来の任務から解かれ、新たな任務として“アレ”の監視を続けている。

半日ほど経ち、艦長が帰りの燃料等をそろそろ考えていた頃に、宇宙軍指令部からまた新しい任務が下される。

不明存在への接触である。

通信、出来れば直に会って少しでも相手の正体を探れと言う普通の軍人とは畑違いな任務を上層部に押し付けられ、命令を受理した時に艦長の顔は歪んでいたと言う。

「帰りには補給物質を満載した輸送艦を迎えに寄越すなんて、上も大盤振る舞いですね艦長？」

「帰ればな」

若い副官の言葉に苦笑を交えつつ答える艦長。

「少なくともBETAの様に問答無用で攻撃はしないと私は愚考します。我々が見た光学兵器の威力と射程なら…彼らにその気が有れば我々は既に蒸発しているでしょうから」

「…そうだな。年を取るとどうにも悲観的に見る癖が付くようだ。よし！彼等の気が変わらない内に挨拶と行くか」

「了解！ 全ての通信回線をオープンにして、アンノウン（所属不明）に通信を送れ！」

「先ほど照会のあった日本帝国宇宙軍所属のアシガラが、全方位回線でアンノウンに通信を送り始めました！」

薄暗い室内にベッドセットを着けた若い通信兵の声が響き渡る。

「ふむ、速きこと風の如しか…」

「艦長、何ですかそれは？」

「日本の過去の将軍が残した戦法の一つだよ」

「はあ。…向こうに先を越されてしまいました」

「我々も予定通りに…」

アシガラと目標も目的地も同じにして、同宙域を進むもう一つの艦影。

アメリカ合衆国宇宙軍に所属する宇宙艦“リバティープライム”。

宇宙軍指令長官から大統領直々のオーダーを受けた同艦は、進宙一年に満たない真新しい姿を漆黒の宇宙に輝かせていた。

サイズ的にはアシガラとさほど変わらないが、アシガラが6年前のロートル艦で、リバティーが最新鋭艦ということもあって、性能には格段の開きがあった。

もつとも、アシガラ乗組員はその差を技量で縮めようと切磋琢磨しているが…

そのリバティーのブリッジ、艦長席に座るのは、軍人としては珍しく金髪を背中の中ほどまで伸ばした30半ばの男性だった。

彼の隣には副官とおぼしき眼鏡の女性が立っていた。年は20代半ばと思われ、プラチナの髪をアップに纏め理知的な顔に細く切れ長な目が見るものに冷たい印象を与えている。

「了解しました艦長。オープン回線で此方からもアンノウンに向けて通信を送れ！ 各員は第二種警戒体制から第一種警戒体制に移行！ 不測の事態に備えろ！」

副官の指示に、俄に活気づくブリッジを見て艦長は満足気に頷いた。

ロンデニオン・コロニー

お昼ご飯を食べようと、執務室から八口食堂へ向かっている道中に、頭の中で閃光が疾った…

「おおっ… 嫌な予感とプレッシャーを感じる…」

思わず辺りを見回し異常が無い事を確認。　　どうやら見えないところで何か起きてるみたい…

『八口！ 緊急！ 緊急！』

「聞きたくない！」

そこに「ていへんだ！ ていへんだー！」と言わんばかりの雰囲気
の八口が飛び込んだので耳を塞いでしまった。

そんな事してもどうにも為らないので仕方なく八口に事情を聞くと、オープン回線で通信を送りながらコロニーに近づく二隻の艦…
アメリカ合衆国と日本帝国の軍艦が近付いて来ているとの事。

…わーお。　　うっかりしてたよ、そうだよね…こんなデカイもんが
地球と月の間に在ったらそりゃ…気付かない筈はないよね…

『艦隊警戒体制！シンジガ許可シタラ撃ち落トス！』

らめえー！えー！

撃ち落としちやダメー！！

なに喧嘩を売ろうとしてるんですかハ口さん！？

『喧嘩ハ気合イト先制パンチ！』

「喧嘩じゃねえ！ 戦争になるわ！ アンタ中身は本当にハ口か！
？」

『チエツ』

「かわいくねー！！」

恐いよハ口。 ん？ ピンクのハ口？

『ミトメタクナーイ！』

あつ逃げた…

何で種ハ口が混ざってるんだ？

…今はそれよりもお客さんの対応か。通信機能付きの執務机があるのを思いだし、踵を返して戻る事にした。

執務室へと戻り、椅子に腰掛けても直ぐには通信を開かずに、先ずは身嗜みを整える。

長めの癖毛を手櫛で撫で付け、朝方にハロが着替えとして用意してくれた一年戦争当時の連邦軍士官服（青）の皺を伸ばして深呼吸：

どう対応するか考えてはいないが、出ないわけにもいかない。こうなったら行き当たりばつたりの当たって砕けるだ！ いつかは接触しなきゃならん相手だ。

震える指でコールボタンを押して通信担当のハロを呼び出す。

『ハロ？』

「コロニーに近付いてるアメリカと日本の艦に通信を繋いでくれ、…待った！ 先ずは受信だけして相手の通信を聞かせてくれる？」

『ハロ！』

ザッザザ…

…れ々はアメリカ合衆国宇宙軍所属艦・リバティプライム。貴殿らはアメリカ合衆国の宙域を侵害している。まずは通信を開いて此方との話し合いに応じて欲しい。我々に敵対の意思は無いので信用して頂きたい。繰り返す…

ザツザツ…

…は日本帝国宇宙軍所属艦・アシガラ。貴方達は日本帝国の警戒宙域に入っている。事情聴取の為、まずは通信回線を開いて話し合いに応じて欲しい。また此方には敵対の意志が無い事を日本政府が保証する。賢明な判断を期待する。繰り返す…

「ポチつとな」

通信を一旦切って考える。

領宙侵犯してたか… こりゃ不味い。攻撃されても文句は言えないのに、両国とも話し合いで対応したいと言ってきたのは有難い。

確かコロニーには姿勢制御と移動用のバーニアが付いてたな？ よし！ 取り敢えず謝って直ぐに移動しよう。罰金とか罰則が発生するなら、コロニー銀行に保管されている金塊と保存してある天然食料で許して貰おう。ポチつと…

「ハロ。向こうと通信を繋いで」

『ハロ！』

「んっ、んっ！ …… 此方はロンドン・コロニー管理者です。
アメリカ合衆国並びに日本帝国の方々、応答願います」

5 ターン目（後書き）

ようこそ、ここは羞恥地獄の一丁目です。

6ターン目(前書き)

辛い戦いになりそうだな…

6 ターン目

通信回線をオープンにすると相手の画像がウィンドウ内に表示された。

ぶっちゃけそこら辺の規格が合うのに少し驚いたがそれは置いておこう。

ウィンドウ内の画像は2つ。アメリカと画面の隅に表示されている画像にはブロンド長髪の渋めの男性が、日本帝国と表示された画像には口髭がダンディズムを誘うナイスミドルな男性が映し出されていた。

「初めまして。私は当コロニー、ロンデニオンの管理者でシンジ・フジエダと申します。以後、宜しくお願い致します」

先ずは挨拶を。名乗りを逆にしたのはちょっとした誤魔化しだ。

これなら日本人のような日系人のようなで相手も判断がつけにくいだろう。

因みに会話は英語だ。

「初めまして、私はアメリカ合衆国宇宙軍所属、リバティプライムの艦長を勤めるジョン・イーストウッド大佐です。この度は通信に応じて頂き感謝致します」

えらく柔らかな物腰のアメリカ軍人さんが敬礼してくれる。

「自分は日本帝国宇宙軍所属、アシガラの艦長を勤めております坂田 弥彦大佐であります。通信に応じて頂き感謝します」

これまた実直そうな帝国軍人さんがビシッと敬礼してくれる。此方も敬礼を返さないと不味いかと思ったので敬礼してみる。

「お勤めご苦労様です。え、あなた方の宙域に私どもが入ってしまったというお話ですが？」

「…ああソーリー。あなた方…ロンデニオンコロニーでしたかな？」

「はい」

イーストウッド艦長が俺を少し驚いた表情で見っていたが直ぐに元に戻った。

「ロンデニオンコロニーはアメリカ合衆国の管理する宙域に侵入しております」

「失礼。日本帝国の宙域にもです。正確には両国の宙域境界線上を跨ぐ形でありますが…」

わーい。　　どんだけミラクルな領宙侵犯なんだよ…

「すみません。直ぐに移動しますんで攻撃は勘弁して下さい」

土下座したくなる気分を押さえて頭を下げ謝る。

すると二人の艦長は驚いたかのように目を見開き、俺を凝視している。

「ミスターフジエダ。頭を上げて下さい」

「そうです。我々が困ります」

「罰則ですか？ 罰金ですか？ ちゃんと払いますんで核ミサイルをぶち込むのは勘弁して下さい」

「いやいや、いやいや」

早くも俺の異世界人生終了か!?

「取り敢えず落ち着いて下さいフジエダさん。当艦にもアメリカさんにも攻撃の意思は有りませんから」

「そうですよミスターフジエダ」

おおぅ!？ 何て寛大な軍人さんなんだ。ゲームでは大半がピリピリした軍人さんばかりだったからミサイル撃たれるかと思ったよ!

「すみません、取り乱してしまって」

「いや？ 私は何も聞かなかったし見なかった。坂田艦長もそうですよね？」

「…ええ。私も知りませんか？」

人の情けが身に染みる…

「それで話を戻しますが、ミスターフジエダ？ 取り敢えず今回は我々が幾つか質問をしますのでお答え願いますか？」

「…答えられる事ならば」

「有難うございます。坂田艦長、申し訳ないが先に此方から質問させて頂きたい。回線はこのままオープンにしますので我々の質問と同じ内容以外の質問は此方が終わった後で…」

「…よろしいので？」

「どうせ似たり寄つたりの質問でしょうから。本格的な質問は後日、政府の役人が行うでしょうし…」

「…了解しました。その方が時間の節約になってフジエダさんの負担も少ないでしょうし」

ええ人達や。ええ人達すぎて安心したのか、腹が減ってきた。

「…そうだ。お二人は食事はお済みで？もしまだでしたら当コロシアムで一緒にどうです？質問はその後に…」

少しでも相手の心象を良くするために食事に招待しよう。いやさ、泊まっていつて貰おう。

…いや正直、だだっ広いコロシアムで独りで居るのも寂しいしね。ハロが居ても人肌が恋しいのよ、こっちに來たばかりだし。

「それは…有難い申し出だが…坂田艦長？」

「ええ、… よろしいのでは？ 本国も了承するでしょうし。 連絡は入れて置いた方が良いでしょうが」

イイ男二人がウィンドウ越しに顔を合わせて相談する姿は、そつち系の人が見たら喜びそうだな。 ていうか、来てくれないかな

「… 了解いたしました。 ご招待をお受けします」

「此方もお邪魔させていただきます」

やたー！

「それでは迎いの船を出しますのでそれに付いて港にお入り下さい。 大したおもてなしも出来ませんが、食材の量は豊富に有りますので宜しければ手の空いた方もお越し下さい」

「有難うございます。 それでは後ほど…」

「失礼します」

「ロンデニオンコロニーは皆様のご到着を御待ちしております」

そこで一旦通信を切り、各々が食事会の為に動き出す。

コミュニケーションは大事だね？ いずれはこの世界の人々とも交流しなきゃならないんだから、遅いか早いかの違いだ。 …でもちよっとだけ早まったかな？とは思う。

まだこの世界の詳しい情勢とか分かんないけどさ、もしかしたら招待した艦の人達に拘束されたりするかもしれないけど、俺一人じゃ何も出来ないから、この世界の人達と一緒にやってかないと生き残るなんて無理だし…

いかんいかん。ネガティブしたらポジティブに切り替えないとね。

「ハロ？ お客様の迎えにサラミスを二隻行かせて？ 後は…港に迎えの車も用意して…俺もお迎えするから玄関に車を廻しといて。ハロ食堂も綺麗に掃除しといてね？」

『ハロ！ 了解、任セロ！』

「宜しくね〜」

アメリカ合衆国宇宙軍・リバティプライム

「…皆様のお越しを御待ちしております」

通信モニターの映像が途切れてブリッジが静寂に包まれる。

今まで対応していたイーストウッド艦長は敬礼を解くと、息をゆっくりと吐き出しながら艦長席のシートに体を沈めた。

目を閉じて少し項垂れる形になって黙考する彼に、傍らに立った美しい副官は声を掛ける。

「よろしいので？」

彼は姿勢を変えることなく、口元だけを僅かに歪める。

「構わないよ。大統領からの指示は可能な限りの接触と情報収集だ。政府の役人達も俺達が先駆けとしてロンドンオニコロニー内部に入った前例があれば後々有利になるだろう。逆にここで断つて日本に一步先に行かれるのは不味いだろうしな？ もっとも日本もうちと同じだろうけど……」

そこで言葉を区切り、制服のポケットをゴソゴソと漁りストローの付いたチューブを取り出して口を付ける。

「…相変わらずこのチューブコーヒーは不味いな。だいたい、コーヒーの旨みの元である香りが楽しめないのはナンセンスだ」

顔を歪ませながら飲み干したチューブをクシャリと握り潰してポケットに突っ込む艦長を副官は呆れた表情で見ている。

「そんなにお嫌なら飲まなければよろしいのでは？」

「宇宙飲料でこれが俺にとって一番ましなんだよ」

先程までの冷静な態度とは打って代わり、子供の様に舌を出して悪態を付く艦長。

「…艦長。地が出ています」

「…ああー、向こうでは美味しいコーヒーが飲めるといいな。…
若い責任者だったな？」

「はい…」

「若くて大胆な奴なのか若くてバカなのか… どちらだと思っ？」

「今はどちらとも…」

「俺の勘では… 止めておこう。 外れたら恥ずかしいしな。 ク
リス、君も食事会には来るんだ」

艦長に愛称を呼ばれて咎めるように目を細める副官。 しかし艦長
はどこ吹く風と言わんばかりの表情をしている。

「…艦長、今は職務中です。 その呼び方はお止めください。 そ
れに艦長がお留守の間は副官の私が…」

「たまには良いじゃないか従妹殿。 留守は航海長に任せる。 食
事会なら花の一つもあつた方が良い」

「しかし…」

困惑する副官を意地の悪い顔で見やる艦長と、副官の珍しい表情を
静かに盗み見るブリッジクルー男性一同。

クルー達は心の中で艦長に賛辞を送った。

グッジョブ！ と

「これは艦長命令だから。 おっ？ エスコート役の到着らしい」
リバティの右側面をラベンダー色の船体を通りすぎ、後方でターンして並走する。

並走する艦、サラミス級は主砲のメガ粒子砲やミサイルランチャーの方向を上方一杯に上げて礼を示していた。

「これはご丁寧なエスコートでいたみいる。 …ん、何だ？」
サラミスのブリッジ付近にチカチカと発光しているものを見つけ疑問を浮かべる艦長。

「識別灯の点滅じゃない……？ ……の ……後に……れたし……。 当艦の後に続かれたし、か… 発光信号とはまた随分と古風な事を」

先行しだしたサラミスの後を追い、リバティプライムはロンデニオンコロニーへと進み出す。

7ターン目（前書き）

作者も辛い、読者も辛いのだ…

7ターン目

「これは…!?!」

日本帝国宇宙軍所属艦、アシガラ艦長の坂田は驚きに声を詰まらせた。

ブリッジの窓から見える光景は予想以上で、港の設備やアシガラを曳航する武装が施された丸型の作業ロボット、港の奥に係留された多数の艦船に戦闘機とおぼしきものまで。

その全てがとてつもなく高い技術によって作られているのが見るだけで彼は理解出来た：いや、理解出来なかった。

ブリッジ内の誰もが彼と同じ驚きで目を見開いている。

この世界でも宇宙開発は活発で、今は放棄されているがBETAが来襲する前から既に月面基地等があり、地球の衛星軌道にも国連の中継基地、ステーションがあるが、これ程のモノを宇宙で造り上げるのは彼らの技術では到底不可能であった。

坂田は考える。

もしも同規模、同レベルのモノが地球側に在るならば、各国の宇宙軍はどれ程に助かるだろうか？と。

そう坂田が思考の海に沈み込む間にも艦の係留作業は続き、港の奥に在る区画分けされた場所に運び込まれる。

アシガラの隣には同じく曳航されて来たアメリカ合衆国艦のリバテイプライムの姿も見えた。

ボールが二隻の係留作業を完了させると、それを待っていたように区画入り口が分厚いゲートに塞がれ、それを見た両艦のクルーが焦りを見せる。

「おい！ 後ろが…！？」

「閉じ込められた！？」

「落ち着け！ 別に取って食われやしない！」

騒ぐ者たちに飛ばされた艦長達の叱責に一応の落ち着きを見せるクルー達。

しかしそれとは裏腹に、叱責した艦長達の心には疑惑の波紋が広がる。

“ 嵌められたか？”

フジエダの一見無害そうな見かけは擬態で、友好的な招きは此方を油断させて捕らえる為の罠であったのか？と…

五分後… その疑惑は解消される。

何故ならば、当の本人が宇宙服も着ずに彼らの目の前、係留区画に現れたからだ。

良く言えば柔らかい、悪く言えば締まりの無い笑みを浮かべて宙を馴れた動きで漂いながら二隻に近付き、背後には横断幕を付けた緑色の球体を従えての登場にクルー達は二通りの反応を示す。

一つは脱力。

単身丸腰で笑みを浮かべ、背後には“ようこそ ウェルカム”と書かれた横断幕を見れば畏の可能性は無いと緊張を解かれた者。

もう一つは再度の驚愕…

宇宙艦二隻を収納してもまだ余裕のある広さの区画を、僅か5分程で空気が充たされたエアロック空間にするなど彼らの常識の範囲外だった。

「…そら恐ろしい程の技術力だな…」

坂田は艦長席で誰にもなく呟いた。

「…はい。あの光学兵器といい、この港湾設備といい我々の科学と技術を遙かに超えております。…彼等は何者なのでしょうか？」

呟きを聞いていた傍らの副長もまた、驚愕とも畏怖とも取れる感情に目を見張る。

「それはこれから追々と分かって行く事だろう…」

「向こうさんは話してくれますかね？」

「何となくだが、彼ならばある程度は話してくれると思う」

被っていた制帽を被り直しながら、なにかしら予感めいた感覚を坂田は覚えた。

「艦長の勘…ですか？」

「そうだな… 宇宙に上がってから私の勘も良く当たるようになってからバカにもできんぞ？ …副長もお招きに預かるか？」

「よろしいのですか？」

艦長からの思わぬ申し出に喜色を顔に滲ませる副長。

それを見て苦笑を浮かべ、若さを感じた艦長は頷きながら席を立った。

「ウエルカム」

いらはい、いらはいと何処から出したのか日の丸と星条旗の手旗を振り歓迎の意を身体中で表すフジエダを見て、彼女は頭痛を覚えた。

若くしてアメリカ合衆国宇宙軍 大尉を拝命した彼女、クリスティーナ・アンダーソンはこれ迄に様々な人物を見てきたが、彼は彼女が見る初めてタイプの人間だった。

背は175cmの自分と同じ程でブラウンの瞳、童顔に癖のある黒髪。それらの容姿とシンジ・フジエダと言う名前から日本人、もしくは日系人だと思われるのだが、彼女のイメージする日本人像に当てはまらない事に違和感を感じた。

確かに日本人らしい所作を感じるのだが、同時に日系人とは違うアメリカ人に近い感覚を覚えるのだ。

そんな風に彼女が違和感に気を取られていると、イーストウッド、坂田両艦長に挨拶を済ませた件の彼が彼女の目の前ににこやかな笑みで立ち止まった。

「はじめまして。 当コロニーの管理者をしておりますシンジ・フジエダと申します」

ペコリとお辞儀をする彼に釣られてぎこちなくお辞儀を返そうとした彼女は、はっとしてその場に直立不動になり鮮やかな敬礼をして見せる。

「失礼しました。 自分はリバティプライム副長のクリスティーナ・アンダーソン大尉であります」

彼女の動きに一瞬キョトンとした表情を浮かべた彼だが直ぐに笑顔

になって右手を差し出してきた。

「よろしくお願いします」

「は、はあ… よろしくお願いします…」

彼女の白い手を握りブンブンと降って満足して手を離すと、他のクルーにも同じように挨拶していくフジエダ。

一通り挨拶を済ませた彼は、スイッチの付いたT字型の物を皆に配り案内を始める。

「ではご案内しますので、私のあとに着いてきて下さい。先程お渡しした物はこう使います」

フジエダは人差し指と中指の間からT字の先端を出して、壁へと向けてるとスイッチを押した。

パシュツ。T字の先端から吸着盤の付いたワイヤーが射出されて壁に張り付いたのを確認すると、もう一度スイッチを押す。すると今度はワイヤーが巻き上げられて壁へと引き寄せられて行く。

単純な発想の道具だが無重力状態の方向転換と移動には役に立ちそうな物に、その場に居た者は軽い感嘆の息を洩らした。

(…このような物を当然に使いこなす… 宇宙での生活がかなり長いと推測できるけど… 本当に何者なの?)

増していく疑惑に目を細めて彼を見つめるクリス。

しかし、当の本人がその疑惑を聞けば何時の間にもやら身に付いた能力ゆえに苦笑しただろう。

一行は壁に設置された取手を掴んで牽引されるタイプのリフトを使用してフジエダの後を追う。途中何度も振り返りながら八口の紹介や設備の説明を行い一行を退屈させないようにする心遣いに、大半の者がとりあえずの好感を抱いた。

そうして一行は港から車が用意されて載せられている巨大なリフトに移り下へと降りて行った。

「皆さんすみません。本当は一般用のエレベーターがあるので、数回に分けてお乗り頂くのも面倒かとも思いましたので搬出用のリフトにお乗り頂きました」

「お気になさらずに。我々としても珍しい物を多くみられましたので」

「そういつて貰えると助かりますアンダーソン大尉。代わりに言うては何ですが、ロンデニオン一番の景色がもうすぐ見られますよ」

斜め下に滑り降りるリフトの下からゴウンゴウン！という重い音が鳴り出すと、周囲に設置された人口の照明とは違う自然光の明るさ

が下から漏れ出す。

リフトの側面と壁面との隙間から射す光は徐々に強くなり、やがてリフトの正面部分が下から開けてくる。差し込む光に目が眩み、手を翳して光に目が慣れるまで待つフジエダを除くリフトに乗った人々は、飛び込んできた景色に本日一番の驚きを見せた。

眼下には緑豊かな古い街並みが運河のようなモノに挟まれて真っ直ぐに続き先が霞んで見える。正面には白い雲が浮かび、白い鳥の群れが翼をはためかせている。そして上を見上げれば眼下と同じような街並みが左右の斜め上に二つ、奥へと続いていった。

クリスは普段の彼女からは想像出来ない表情： 目を見開き口を開けた惚けた表情を浮かべていた。

幸いにも彼女の間だらけの表情は誰の目にも留まる事は無かった。他の者も皆、彼女と同じような表情で呆けていたからだ。

「どうですか？ 良い景色でしょう？」

「…はっ！？ しっ失礼しました」

「私も最初（昨日）見た時には驚きと感動で暫く動けませんでしたが」

呆ける彼女にこやかな笑顔でそうフジエダが語ると、

「いやはや驚きましたよフジエダさん」

「真空の宇宙に大地が…世界があるとは…　すごいですよミスター
フジエダ」

坂田、イーストウッドは驚きがまだ残る顔で近づき感想を述べる。

そんな二人の艦長とフジエダが談笑する姿を見てようやく冷静さを
取り戻した彼女は、再び眼下の景色を眺める。　リフトと街並みの
間には緩やかな傾斜の地面に森と草原に湖の景色が広がり、野を走
る馬と湖で羽を休める白鳥の姿が見て取れる。

「このロンデニオンは、500万人の人が居住可能な古いコロニー
です。　…気に入って頂けましたか？」

とある人物のお言葉を流用したフジエダの言葉に振り返る事無く、
頷いて答えるクリス。　彼は彼女のそんな後姿を見て満足そうに頷
いた。

8ターン目（前書き）

読者の皆さんの反響に啞然とする俺。

8 ターン目

日本とアメリカの軍人さん達をお招きしての食事はつつがなく終了した。

食堂の料理とは言え天然食材100%の料理は、宇宙生活が長い方々に大変喜んで貰えたようだ。

そして今は食後のお茶を楽しみながら、お客様達の本題へと入ろうとしていた。

「うん：やはりコーヒはこうでなくては…。さて、それでは質問に入りたいのだが、よろしいかなミスターフジエダ？」

「ええ、いいですよ」

イーストウッド艦長が湯気の立つコーヒをテーブルに置き、俺も湯呑みに入った緑茶をテーブルに置いて姿勢を正した。

丸いテーブルにはイーストウッド艦長、アンダーソン大尉と坂田艦長に彼の副長の小林大尉が着いて、他の方々は別のテーブルにて飲み物片手に此方の様子を伺っていた。

「まあ、そう固くならないで…。それでは先ずは改めて氏名と年齢、所属組織と階級と役職を教えて貰えるだろうか？」

軽く頷き答える。

「シンジ・フジエダ。年は24才、所属は…ロンデニオン・コロニー。階級は今無し、役職は当コロニーの管理者と防衛部隊の司令を兼任しています」

「ではロンデニオン・コロニーは何処の国家、もしくは組織に属するのかな？」

「如何なる国家、組織にも属しておりません」

「…ロンデニオン・コロニーが当宙域に来た理由は？」

「BETAと地球人類との戦いに人類側として参加する為です」

その後も幾つかの質問に、答えられる範囲で答えを返して行く。

「…それでは私たちの方からの質問は以上です。後日、合衆国政府の担当の者がこちらにお伺いして改めてお話があると思いますので、その節にはよろしくお願い致します。…坂田艦長からの方がらは？」

その言葉に口髭を右の人指し指で一撫でして一瞬だけ思索する坂田艦長。

そして彼は姿勢を正して俺に向き直り正面から見詰めてきた。

「では我々からも…よろしいですか？」

「どうぞ」

「それでは…率直にお伺いします。貴方は本当に地球人類ですか？」

その言葉に周囲に居る誰かの息を飲む音が耳に届く。

「ええ。地球人類です。もっとも、地球上のどの国家にも戸籍や記録は在りませんが…」

少しだけ悲しさと寂しさが沸き上がる。

「しかし、これだけの技術とモノを個人所有する等とは…どちらも地球人のレベルとはかけ離れ過ぎていると思われませんが？」

「そうですね…しかし此方も参戦するにあたり、上から支給された物ですから何とも…」

「その“上”と言うのは明かしては頂けませんか？」

「申し訳ありませんが…」

坂田艦長に頭を下げながら断りを入れる。

俺自身が直接の面識が無い存在、神様の事を話せる訳がないし、聞

いた所でこの世界の人達はいい顔はしないだろう。

「頭を上げて下さい。どの組織にも機密の一つや二つは在りますよ」

「…ありがとうございます。少しでも話が逸れましたが、私は“人”です。お疑いが晴れないなら、私の細胞を採取して検査して頂いてもかまいませんよ?」

「…それではお言葉に甘えて後程。それでは次の質問を」

「はい」と答えて冷めた緑茶を少しだけ口に含み渴きを癒して質問に備える。

「このコロニーに入った時から気になっていたのですが、住人の方々はどちらに?」

「居ませんよ? このコロニーの住人は、私と八口だけです」

「!? 本当ですか?」

「はい」

坂田艦長を始め、皆が驚きの表情を見せる。

そりゃ驚くよね。こんなに大きなコロニーに一人しか住んでないんだから。

八口に皆の飲み物のおかわりを頼んで皆が落ち着くのを待つ。

程なくして飲み物が運ばれて来て、湯気と香り立つお茶を啜る。

やっぱ緑茶は落ち着くわ〜

「このロンデニオンに一人で…。よければ理由をお聞かせ願えませんか？」

「理由ですか…。いいですよ？」

頷き先を即す艦長から視線を逸らし、両手の中に遊ばせた湯飲みの中を見つめる。

「そうですね… 本来、上が直に介入しようとしたらしいのですが、無理だったので私が選ばれたという訳なんです… 私は事故に巻き込まれて、故郷も家族も失くしてしまいましたからちよ〜どいいと思っただけでしょうね。私が一人なのはこの事に関わる人間を最小限にしたかったのでしょうか。私は二度と戻る事は出来ませんが、帰る場所も待つ人もありませんから…」

真実をばかしながら淡々と答える。緑茶の表面に写る自分の顔がやけに歪んで見た。

「…言い辛い事をお聞きして申し訳ない」

頭を下げてきた坂田艦長に「いいんですよ」と答えて緑茶を啣る。

苦味が際立つ…

それにしてもこうして話してみると、改めてあまりに怪しすぎる自分の存在に自嘲の笑みが抑えられない。

「っ!？」

「ん？」

誰かの息遣いが耳に入り辺りを見渡すと、食堂に居る全員がかわいそうな人を見る目で俺を見ていた。

…なんぞ?　なんか居た堪れなくなったので、話を続ける。

「まあ、そういう訳です。　上はBETAが地球人類を滅ぼそうとするのを阻止するために私と八口をコロニーごとこちらに送り込んだという訳です。　よろしいですか？」

色々と疑問が残るだろうが、今の俺にはこれ以上は話せない。

「ありがとうございます。　それでは我々からの質問はこれで終わりにします。　後日また、こちらからも政府の者がお伺いします
がよろしくお願い致します」

「了解です。　…あの、それでコロニーを移動させなければならぬ
いのでしょうか？」

「いいえ。　上からは危険がなければ、政府の者が改めてお伺いするまではこの宙域に留まって頂きたいと。　なお他国との無用なトラブルを避けるために、周辺宙域に警備の艦を配置させて欲しいと

…」

「我々の方も合衆国政府より同じような指示を受けております。周辺警備の許可を頂きたいのですが？」

ふうむ。警備を建前とした監視だろうね。当然の処置だし、こちらとしては地球との窓口代わりに使わせてもらおう。

「了解しました。それで警備に就かれるのはもしかして…」

「はい合衆国からは我がリバティープライムが」

「日本帝国からはアシガラが警備に就かせて頂きます」

「分かりました。皆さん…改めてよろしくお願い致します」

席を立ち、周りを見渡してから頭を下げると、二人の艦長を始めとする両艦のクルーが席を立ち「こちらこそ」「はっ！」「等の声と共に敬礼が返ってきた。

しかし仕事とはいえ、こんな宇宙のど真ん中に勤務とは大変だな…

二隻とも結構大きい艦だけど、乗組員の人達も軍人とはいえ閉鎖空間に長時間居ればストレス溜まるだろうし…

…おお、ならば！

人的交流の一環として、

「どうでしょうか？ 此方の警備に就いて頂く間、ロンデニオンに滞在なされては？」

「はあ。それは嬉しい申し出ですが、よろしいのですかミスター？」

「ええ。空いている部屋や家は沢山ありますし、大したおもてなしは出来ませんが、滞在中の住居やお食事はこちらから提供させて戴きます」

「それは嬉しいのですが、そういう意味ではなくて……」

「イーストウッド艦長は他国の者をそんなに簡単に招き入れても良いのかと気にしておられるのですよフジエダさん」

「もちろん構いません。仮にあなた方が、本国からこのコロニーを制圧せよと命じられたらその時はその時で対処します」

「……ざつくばらんな方だ、貴方は」

その辺は考えればキリがない。疑念だけでは物事は進まないしそこからへんを見抜く力が海千山千の政治家さん達に勝てるとは思われない俺は、こつこつやり方しか出来ない。

慎重になりすぎて、各国と揉めている間にも地上では人が死んでいく。ならば、多少甘く見られようがこちらから出来るだけ歩み寄ろうと思う。

人間は俺一人だけの小さな勢力だ。　いかに八口が高性能で兵器の運用操作が出来てもそれだけでBETAに勝てるとは思えない。やはり人手が必要だ。

「ただ面倒くさいだけだと思っただけかもしれませんが……
お二方にはアメリカ、日本へのメッセージを1つ頼みたいのですが？」

「分かりました」

「お伝えします」

「……ロンデニオンに地球人類と敵対する意思はありません。その証拠にロンデニオンは地球各国からの求人と移住を考えております。軍人、民間人合わせて500万人を予定しています。詳細はまだ決まってはいませんが、難民の受け入れもこれに含めようと思えます。また、協力して頂く人や国家にはロンデニオンが持つ、技術や兵器を提供する計画です。詳細は出来次第にお知らせ致しますので、その節にはどうかご検討下さりますように」

さあ、新世界での俺の人生たたかいを始めよう。

9 ターン目（前書き）

もはや… 語るまい！

9 ターン目

新生活3日目。

そうこの世界に来てまだ三日しか経ってないが、俺の人生で一番濃い三日かもしれない。

昨日の話し合いの後に、お客さん達に泊まってもらう部屋を俺の住処である行政府近くのホテルへ八口に準備して貰い、案内を任せた。ついでにこれからの事を考えて、行政府内にアメリカと日本の出張所を八口に用意して貰った。

その間に執務室に戻った俺は、PSPの情報画面を見ながらこれらの対応や対策、移住の事などをコロナー内の維持管理を担当する八口に質問しながら夜遅くまで考えていた。

移住者の受け入れはなるべく平等に行いたいが、しばらくは地球との窓口になって貰う日本とアメリカには幾らかの融通は利かせたほうがいいだろう。

相手が望めばだが…

そう思ったが、それは杞憂だった。夜半に上層部との通信を終えたイーストウッド、坂田両艦長が時間差で尋ねて来て、本国から提案を前向きに検討するので両国からの使節の派遣と、移住者の受け入れ枠の融通を考えて欲しいとの知らせを受けた。

こちらも両国には色々頼む事があるので使節の受け入れは了承し、融通の方は前向きに検討すると少し曖昧に答えておいた。

その他にもアシガラとリバティの補給の為に近くの宙域に待機している補給艦2隻の入港とクルーの滞在許可を出し、両艦長に立ち入り禁止地域が記載されたデータマップを渡して、食堂に同じマップを用意するので各クルーはそれを受け取って欲しい旨を伝えた。

異世界に来て治らない低血圧で鈍る頭で昨日の事を思い出しながらも、洗顔と着替えを済ませて鏡に映る自分に今日も一日頑張ろうと語りかけた。

^{ハムパン}朝食を済ませて何時もの如く執務室でPSPを弄っていたのだが、本日の生産品を考えてファクトリーに行く事にした。何故かというと、昨日宣言した地球への兵器提供品で直ぐに使えるような物が61式戦車しかなく、コロニー内防衛用に実物が本日出来ているので実際に見てみようと思った訳だ。

八口に玄関に電気自動車の“エレカ”を廻して貰い乗り込むと、自らハンドルを取って車を走らせた。

コロニーはコロニー外壁の内側に三つに別れて大地がある。三つの大地は、行政府と商業地区をメインにした大地。居住区と自然

地区をメインにした大地。そして工業製品を初めとした様々な物を生産する工業地区メインの大地で三つに分類されている。

各大地は間に採光用のミラー運河で隔たれており、隣に行くには間に架けられた橋を渡る必要がある。

コロニー内の移動には電気自動車のエレカとバス、そしてコロニー外壁に沿って走るコロニー列車等が有り、ロンデニオンではハロが全て運行している。

目的地のファクトリーは工業地区の奥、アシガラとリバティーが停泊している通常の港湾部とは反対にある港に近い最奥に位置しているので、行政府からはかなり遠い。コロニーの全長が60kmを軽く超える大きさなので仕方のない事だ。

エレカに搭載されたナビに従いハロしか居ない無人の街を抜け、ミラー運河沿いの道に出て遠めに見えていた巨大なブリッジを渡る。

オープンカータイプのエレカで風を受けながら走り、ラジオでもつけたい所だが生憎と放送局が開局されていないので無駄だろうが…… 駄目元でスイッチを押すと意外な事に音楽が流れ始めた。

）
）
）

何故かは分からないが、聞きなれた俺のお気に入りの局がDJもCMも無しに延々と流れている。

「…まっいいか」

人差し指でハンドルをトントンと叩きながら拍子を取りつつ、工場が立ち並ぶ工業地区を抜け目的地を目指す。

1時間近くのドライブの末に辿り着いたのは、重厚な門扉と厳重な警戒監視のされたファクトリーゲート。警備員詰め所らしき建物からハ口が2つ転がり出てきて出迎えてくれた。

『ハ口、シンジハ口！』

「ご苦労様ハ口。 中に入れてくれる？」

『入レ、入レ』

ゲートを開けてもらいハ口の先導でゆつくりと中へ進む。コンクリート造りの大きな建物の前で車を降り、玄関を通って保管所のシヤッターを開けてもらい、漸くお目当ての61式戦車との対面となった。

「大きい…」

室内の照明に照らされたそれは想像以上の大きさだった…

地球連邦軍61式戦車。機動戦士ガンダム劇中の一年戦争、もしくはジオン独立戦争と呼ばれる戦いで、MSが開発されるまで連邦軍の地上戦力主力の一端を担った61式戦車。

この世界でも地上に配備されているであろう日本の戦車90式、アメリカのエイブラムスと比べると、大人と子供ほどの差がある巨大な車体でありながら、スピードや運動性は上であり155mmの強力な連装砲を装備し、他の戦車が乗員3〜4名なのに対して61式はたったの2名のハイテク戦車。

劇中ではそのハイテクが災いし、ミノフスキー粒子散布下での戦場で苦戦するが、対BETA戦では本来の実力で戦える筈だ…

戦えるといいな、うん…

今のところコレしか提供出来そうにないし、ファンファンはあんまり役に立たなそうだし… 量産型MS、GMジムの提供なら喜んで…くれるといいな…

…とりあえず乗ってみよう。連邦軍士官服一（青）を汚すのもなんなので、どこかにツナギでもないかと探してみる。幸いにも作業員用ロッカー室を発見し物色すると連邦軍パイロットが着ていたグレーのカーゴパンツと上着のセットを見つけたので着替えてみる。

地上のMSパイロットや戦車の搭乗員御用達だけあって、士官服よりも動きやすく着心地が良い。普段着代わりに使わせて貰おう

と、ロツカーから同サイズを幾つか拝借した。

念のために、同じくロツカーの中に有ったヘルメットとボディーアーマーベストも着込み61式の砲塔へ乗り込む。やはり戦闘用とあって狭い車内を見渡し、神様辺りが植え付けたのであろう知識と感覚を頼りに計器類を1つずつ確認して電源を入れる。

電気駆動ならではの静かさで砲塔部分が始動し、稼動可能状態になる。トリガーの付いた砲塔操作のステイックを使い砲塔の旋回、連装砲の仰角調整を行い滑らかな動作に問題がないことを確認した。スペック上は155mm連装砲でダイヤモンドを超える高硬度の外殻を持つBETAを撃ち抜く事に問題は無い。

速度も90式戦車やエイブラムス戦車の最高時速70km前後に対し、90kmを誇る。それでもBETA最速の突撃級よりは遅いが…

うん。運用面なんかの確認で専門家：実際にBETAと戦車で戦っている戦車兵や、あとは整備の人の意見も聞いてみたい。

補給なんかも考えなきゃダメだろうな…。 部品の規格が合わないかもしれないから用意して…消耗品関係はファクトリーが勝手に生産してくれるから、スペアの車両も含めて大量に生産。

あつ、輸送も考えなきゃ。 生産コストの安い大気圏突入、離脱が可能ならHLVロケットが生産可能だったな。 今後の事も考えて今から生産しても損はない筈。

色々と考えながら砲塔内から這い出て、戦車の上を操縦席へと歩き

ハッチを開ける。

操縦席へと潜り込むと砲塔内と同じように金属と機械油の匂いが充満していた。計器類見直し、フットペダルと左右の操縦桿の感触を確かめて駆動用モータに火を入れるべくスターターキーを回し込む。

(61式を動かす日がこようとは…)

あるガンダム作品を想い浮かべながら、電気駆動車特有のモーター音が狭い室内に響き微かな振動をシート越しに感じる。

ゆっくりと前進するするように操作しながら八口に頼んで保管所の大型扉を開けてもらい、動作試験用の演習場に案内してもらおう。

到着した演習場で、先ほど思い浮かべた作品の劇中での動きを真似て61式を思い切り走り走らせると…動く、動く！前に動画で見た自衛隊戦車の演習よりも凄く動いていると思う。

思っただが…

いかんせん、神様から与えられた身体能力と技量、知識に俺の意識が馴染んでないのか、いまいち実感が薄い。

やっぱり専門家に来てもらおう。 うん、そうしよう。

61式を保管所へと戻し、建物を出ようとすると空に黒い雲が出ている事に気付いた。エレカの後部座席に荷物を積み、ナビのコーコニー内天気予定情報を見ると、雨をもうすぐ降らす予定との事なので車体後部に収納された幌屋根を出してから車を走らせた。

帰り道は居住区を経由して帰り、無人の家々の状態を軽く見て回る。どの家も状態良く維持管理がされているので、移住者が何時来ても直ぐに住めるようだ。

走り抜ける居住区は区画事に建物の様式が違い目を楽しませる。レトロな欧州風に、近代的でスタンダードな家にマンション。区画事の雰囲気を楽しみつつ降りだした雨の中で車を走らせる。

やがて車は居住区の町並みを抜けて、コロニー居住者の憩いと癒しの土地である人口湖や植林された森のある自然区画に入る。

10ター目(前書)

10ター目

人工の空から降る雨に、翼を畳んで湖に身を寄せ会う白鳥の姿に様々なシーンが浮かんでは消えていく。

森の木陰には放牧された馬や牛が雨宿りをし、足下の草を食む。

とても真空と壁一枚を隔てた世界とは思えない光景だ…

ちよつとした感動を覚えながらぬかるんだ道を走らせていると目の前に木陰に佇む一頭のサラブレッドと、それに寄り添うように一人の人物が目に見る。

無重力状態に合わせたパンツルックではなく、地上勤務で着るのであるうタイトなスカート姿のアメリカ軍制服とプラチナの髪を雨で濡らした女性がサラブレッドの首筋を優しく撫でている。

馬を驚かせたり、泥を跳ねないようにゆっくりとエレカを走らせて近づくと、此方に気付いたのか 女性と馬が同時に顔を上げて此方を見る。

（綺麗な人だ…）

雨足の弱まった小雨の中で、フロントガラス越しに見る彼女は綺麗だった。

近づく車に最初は警戒の気配を漂わせた彼女だが、手を上げて挨拶

する此方の姿を車の中に確認すると、冷静な表情を崩すことなく警戒を解き敬礼を返してきた。

ゆっくりと彼女の横へエレカを近付けて、ウィンドウを下げてアンダーソン大尉に声を掛ける。

「こんにちは、お困りですか？」

「はっ、いえ。大丈夫ですからお構い無く」

「この雨は夕方まで降る予定ですから、宿舎に帰られるなら乗せていきますよ？ 丁度私も戻るところですからご遠慮無く」

「…。 それでは御言葉に甘えて…」

こちらの提案を了承した彼女は一度馬の方に振り返り、その首筋を整った指先の手でそつと人撫でしてから「失礼します」と告げながら助手席に乗り込んだ。

助手席の彼女に視線をやれば、綺麗な髪が雨を含んで少し雫を落とし、隙無く着込まれた制服が身体に張り付き、女性の身体のラインを浮き立たせている。

「ちょっと待って下さいね？ ……これを」

後部座席に積んだ荷物からタオルとグレーの上着を取り出して、彼女に差し出す。

「…ありがとうございます」

「では行きますね？」

慎重にアクセルを踏み、ゆっくりとした加速で車を走らせる。

走り出した車内ではおろした髪をタオルで拭く音だけがしていた。

何となく居心地が悪い気がして、音を絞っていたラジオの音を元に戻し音楽を車内に流す。

「ありがとうございます。これはどちらに？」

「…ああ。ダッシュボードの上にも置いてて下さい」

下ろした髪を左肩から前へと流した姿で、綺麗に畳んだタオルを軽く掲げて聞く彼女。右ハンドルの車なので彼女を見れば細いうなじが目に入り、慌てて目を逸らして前を向き直した。

「…？ どうかありませんか？」

「いえっ、なんでもありません。…それよりどうしてあんな所に？ 宿泊先のホテルからも結構離れていますし、歩いて来られたんですか？」

「はい。今日はローテーションで休日でしたので、部屋にいるの

も勿体なく思いまして… 最初に此処へ来た時に湖と馬が見えたので散歩がてらに歩いてきました。…あの、いけませんでしたか？ お受け取りしたマップに記載された立ち入り禁止区域に此処は入ってはいいようでしたが…」

「いえいえ、大丈夫ですよ。 それよりよく歩いて来られましたね」
ここからホテルまで5km程は離れている。 車無しで来れない事もないが… あっ

「この程度の距離であれば問題ありません。 …それにしても驚きました。 雨が降るなんて…」

「申し訳ありません。 私のミスです。 事前に कोरोニーの天候情報をお伝えするべきでした。 それに皆さんが滞在中のプライベート時間に車が使えるように気を使うべきでした」

कोरोニー内のエレカは、俺以外の人が使用するためにはIDカードが必要になる。 कोरोニーに滞在するアシガラとリバティーにはゲスト用の数台のエレカを専用として提供してある。

しかし、休暇のクルーの事を考えていなかった。 提供したエレカは仕事で使われるために、休暇中のクルーには足にするものが無い。 一応、バスと कोरोニー外壁を伝う列車が運行はしているが来たばかりで使い方が分かり難いだろうし。

クルー全員のIDカードを発行して配布するべきだった。 エレカの数は十分に有ってもこれでは使えない。

「その程度の事、お気になさる必要はありません。 長い宇宙勤務

で地上を離れた我々がこうして地につけて雨に触れる事が出来る休暇を頂けるのですから、クルー達は感謝しております」

「そう言っただけで頂くと助かります。車や交通機関に関しては早急に対応させていただきます」

そう運転をしながら軽く頭を下げる。帰ったら直ぐにでもIDカードの発行を考えよう。ちらりと横を見ると頬にかかった髪を指先でかき上げながら、こちらを見る彼女と目が合う。

「？ あの…」

「はい！」

その仕草の艶やかさに目を奪われたところで声を掛けられて、思わず声が上がらず。

恥ずかしい…

「あの、前を…」

「はっはい、ぬお!？」

危うく道をそれて木に激突するところでした。

「大丈夫ですか？」

「はい… 面目ない」

俺が謝ると、彼女は手を口元に当ててクスクスと忍び笑いを漏らす。
恥ずかしさで顔が熱い…

どこの中坊だよ、情けない。

「色々と本当に面目ない…」

「クスクス。 フジエダさんは面白い方ですね？ 最初の印象と大分違うように感じられます」

「…ちなみに最初の印象とは？」

「そうですね… 失礼かとも思いますが怪しくて胡散臭い…油断ならない人」

「ですよ〜 自分でも怪しさ爆発だと思います。 それにしても絵になる人だな…いまだに口元を隠しながらクスクスと笑う姿に見惚れてしまいそうになる。」

…いかにいかに。 運転に集中！

「そつそついえば… 馬がお好きなんですか？ 扱いにも馴れていらっしやるようですよ」

我ながら苦しい話題転換。 だけど馬の扱いが馴れていると感じたのは本当だ。 馬は臆病な生き物だから、大人しそうな外見とは裏腹に繊細な扱いをようすると聞いた事がある。

「ええ。母方の実家が牧場を経営しておりまして、…父と母は忙しい人達でしたから子供の頃はそこで過ごす事が多かったので自然と…」

意外だな、カウボーイならぬカウガールか。クラシカルなスタイルで馬に乗って、牛を追いかける彼女を想像してみるとやはり絵になる。

「そうですか。素敵ですね」

「ありがとうございます」

礼を言いながら浮かべた柔らかな微笑に少しだけ彼女の素顔を見たような気がした。けれど何故だろう？ その笑顔に一瞬、驕りを見たのは…

その後も他愛も無い会話を続けホテルの前に着くと、丁度玄関を潜ろうとしたイーストウッド艦長と出くわす事になる。

「おや？ ミスターフジエダ。それにクリスマスも…ふむ、以外に積極的ですね」

「何がですか？ 私はアンダーソン大尉を送っただけですよ」

「？ 何を仰っているんですか艦長？ それと人前でその呼び方はお止めください」

ん？ ひょっとして二人はそういう関係？

「はは、何を想像しているのかは分かりませんがご安心を。彼女は従妹なのですよ」

「あつ、そうなんですか。 けど…いえ何でもないです」

「あまり似てない…ですか？ まあ従妹ですから」

「すみません。 失礼を」

「何が安心なんですか艦長？」

アメリカ人らしい率直な笑顔を見せる艦長は、男の俺から見ても力ツコイイ。 さぞやモテる事だろう、羨ましいかぎりだ。

「ははは、ご覧のとおり彼女はこうやって幾人もの戦士達を倒してきた猛者だ。 がんばれ、ミスター」

「いったい何の話をしているんですか艦長？ 申し訳ありませんフジエダさん。 艦長は時折錯乱して訳の分からぬ狂言を口にするのです」

「…クリス、それはちょっと酷くないか？」

「アンダーソン大尉です、艦長？」

いいコンビだなこの二人。　そうだ折角だからイーストウッド艦長に戦車の事で伝言を頼んでおこう。

「イーストウッド艦長。　今お時間空いてますか？」

「ん？　ああ今日はもう予定は無いが」

「それでは……」

その後、運良くホテルのロビーで寛いでいた坂田艦長も見つけて、戦車兵と整備員の派遣して貰うための話し合いをするために場所を移そうとしたが……

「私も一緒にしても宜しいでしょうか？」

「いいですよ……と言いたいところですが、部屋に戻られて体を温めた方がいいですよ？　濡れたままでは風邪をひいちゃうかも？」

「……分かりました。　……あの上着を……」

羽織っていた上着を返そうとした彼女に手を振り止める。

「今度会ったときにでも返して頂ければ結構です。それでは」

軽く会釈をして二人の艦長とともにその場を去ろうとすると、敬礼で見送る彼女の实直さに少しだけ素直な笑みが浮かんだ。

11ター目(前書き)

反響が予想以上で怖い…

11ターニング目

「それでもむこうは戦車兵とその整備員の派遣を望んでいるのだな？」

「はい。戦車兵に関しては最低でも二名は派遣してほしいとの事」

日本帝国東京某所。現在の帝国の首都は京都であるが、朝鮮半島の戦線が日々悪化している影響を受けて、日増しに増すBETAの脅威に備えて着々と遷都の準備が行われている最中、先に移転した政府中枢の責任者達は軍部からの報告を受けるために一同に会していた。

報告を受けるのは現日本帝国総理大臣たる榊 是親を始めとする政府の要職に就く者達。報告するのは日本帝国軍宇宙軍を始めとする陸海の長官と参謀達。

この豪勢な顔ぶれ達の話の中心人物は、遠く虚空に浮かぶ未知なる勢力…いや、実質一人の男であった。

突然現れた謎の存在。彼から採取された細胞のデータは、国連宇宙ステーションに送られて人類のものである事は確認されている。さてはいるが、彼の持つコロニーを始めとした技術力は現在の地球のどの国家よりもずば抜けている。

幸いにもこの事をより正確に掴んでいるのは日本とアメリカのみ、両国の担当宙域ギリギリの境界線に現れたのは幸運だったと、この場に居る誰もが思った。

「それで見返りはなんと？」

「…それが、現在建造中か建造予定の宇宙戦艦、もしくは巡洋艦を条件付きで、各国に先駆けて優先的に提供すると…」

提示された条件にその場に居た多くの者が目を見開いた。

今のところ口約束と条件付きという言葉が付いているとしても、数人の派遣で新造の宇宙戦艦を提供するのは剩りにも気前が良すぎる。

たとえ話し半分だとしても美味すぎる話だ。　胡散臭過ぎて躊躇してしまう。

躊躇してしまうが…

「…陸軍長官、派遣は可能かね？」

「はっ。　宇宙軍の船を使わせて頂けるのであれば、陸軍に問題はありません。　既に人員の選定に入っております」

「宇宙軍長官？」

「こちらに異存はありません。　…ただ、出来れば一週間後に予定している外務省の方々を運ぶ際に一緒に乗って下されば此方としても助かります」

たとえ胡散臭い話に相手だったとしても、今の日本はそれに乗るしかなかった。

朝鮮半島を抜かれれば、次は日本…

準備はしてはいるものの、し過ぎて困ることは無い。

軍が撮影した高威力の光学兵器。もしもあれが地上でも使用可能でBETA襲来前に配備可能だとしたら？

一定の効果を期待する為には一つでも多く数を揃えなくてはならない。しかしあの兵器は、専門家達の意見では国産化するのにはかなりの時間を要するであろうと一致しており、短期間で数を揃えるには向こうからの提供に期待するしかない。日本と同じくあの技術を欲するアメリカと違い、時間は切迫している。

このままでは朝鮮半島が抜かれるまで約一年。 専門家はそう言った…

ならば僅かな望みに掛けようではないか！ 何をやる気かは知らないが戦車兵と整備兵を送り出すだけの安い出費だ。 今や戦場の主役は戦術機、戦車兵の数人なぞ痛くも痒くもない！
アメリカに出し抜かれてなるものか！

政治家達も軍人達も皆、そう決断して戦車兵達を送り出す算段をつけはじめた。

「ちっ……」

ベルトで体を座席に固定しても、足の裏と尻が浮く環境に馴れる事ができずに男は舌打ちした。

年の頃は40前後。日焼けした肌に黒い髪、顎髭を生やした精悍な顔には傷が有り、顎を斜めに走る白い傷痕とがっしりとした体つきは、町を歩けば多くの者が道を譲りそうな風体は不機嫌そうな表情と相まって近づき難いオーラを放っていた。

シャトルに同乗したスマートな外務省の職員達は、そんな彼と目を合わせないようにしきりに持ち込んだ資料に目を通したり、仲間内で小声で話し合っていた。

どこからどう見ても場違いな自分の状況に、再び舌打ちしようとした彼に話し掛ける猛者が居た。

「宇喜田大尉、何で自分ら此所に居るんでしょうね？」

対面に座る体格はがっしりとしているが、気弱そうな表情を浮かべている20半ばの男を見て宇喜田と言う男は顔を歪ませて言い放つ。

「知るか！俺が聞きたいわ！」

怒声を上げた宇喜田に、話し掛けた男はヒッ！と首をすくませて座席に身を沈ませる。

「狭い所で怒鳴るな宇喜田。耳に堪える」

そう静かに、しかし有無を言わせぬ圧力で嗜めるのは、サングラスを掛けた50代の繋ぎ姿の男。少し痩けた頬と、白いものが混じる髪と口髭、顔に刻まれた皺が彼の歩んで来た人生の重みを見る者に感じさせた。

「…すみません、おやっさん」

宇喜田はおやっさんと呼んだ男に身を縮こませて素直に頭を下げた。

「訳の分からない状況に苛つくのは分かるが、上官として人の上に立つもんが易々とそれを表に出しちゃなんねえ。俺だって苛ついてんだ。おまけにこの年で宇宙は流石に堪えるぜ…」

座席で腕を胸の前で組んだ姿勢のまま、首を回してコキコキと骨を鳴らす姿を、どこの親分だと外務省職員が内心でつつこんだ。

もう一度、すみませんと頭を下げた宇喜田は何故このような状況に置かれているのか、シートに体を沈み込ませてムツツリとした表情で思い出していた。

BETAが地球上に現れる前、自分は帝国陸軍第一師団戦車隊に所属していた。精鋭を集めた第一師団で、戦車に乗せれば自分の右に出る者は居ないという自負もあった、まだ若さの残る自分は自信に満ち溢れ、上官とぶつかる事も多々有り、上層部に煙たがられている事は分かっていた。

BETAが地上を荒らし始めた頃、自国の兵器と兵士を使ったBETAとの実戦データを得るために大陸への軍の派遣が決まった時に、真つ先に戦車兵として名前が上がった事は体のいい厄介払いだとは分かっていが、当時の自分は実戦で己の実力を見せ付けるチャンスとして嬉々としていた。

この時はまだ、たとえ世界が恐れるBETAであろうとも、己の力ならば人類を勝利に導けると過信し己が幻想に酔っていた…

中国方面とヨーロッパ方面に分けられた大陸派兵で、ヨーロッパに派遣される部隊に組み込まれた自分の指揮する第二中隊はフランスを拠点とし、様々な戦地を転戦することになる。

おやっさんとはこの時に出会い長い付き合いとなる。

派遣当時74式戦車の配備が間に合わず、古強者の61式戦車を駆って人類の敵たるBETA相手に初陣を飾ったのだが…

…今でも目を瞑ればその時の場景が寸分も忘れることなく思い出せる。

燃える欧州の古い町並み… 民間人の悲鳴、兵士たちの怒号… 爆
発と閃光に… 奴等が響かせる地鳴りの音。

栄光に満ちた帝国陸軍戦車隊はその日、泥にまみれた…

いや、帝国陸軍だけではない。 数多の精強なる陸軍を要する欧州
各国の戦士達が故郷の大地を、愛する者達を守れずに虚しく屍を晒
した…

61式よりも高性能な欧州戦車が時速160kmで突進する突撃級
を避けきれず跳ね飛ばされ踏み潰される。サソリのような姿の要撃
級に硬い前腕で叩き潰され挽肉ミンチにされ無残な姿になる。

無線越しに響いた戦友の声に視線を向ければ、一台の61式戦車が
同じ名を冠するBETA、戦車級に集られて乗員ごと食い散らかさ
れた…

数多の怒号や悲鳴を聞きながら無我夢中で主砲を撃ちまくった。
銃身が焼け、弾が尽きるまで目に入ったBETAを殺し続けた。

それでも目の前の状況は、何一つ変わらない… どうやって生き
残ったのか自分でも分からない…

気づいたら砲塔内でおやつさんに殴られていた。

その日。日本帝国陸軍欧州派遣部隊の先遣隊は初陣で3分の1にまで撃ち減らされ、俺の指揮する中隊は俺の乗る戦車を残して壊滅した。

生き残った俺は志願してそのまま欧州へと残り、新しく支給された74式戦車と共にあの日の悪夢を祓うために戦い続けた…

欧州が落ちた後も朝鮮半島防衛戦に参加し戦い続けた。

たとえ戦場の主役を戦術機に下ろされ、第二線に追いやられようと戦車と共に戦い続けた。

そして俺の最後の戦いとなった戦闘…

一線を張る戦術機部隊が壊滅し、戦線維持の為に救援の部隊到着までの時間稼ぎを任されて再び会い見えた怨敵。最新鋭の戦車90式をもって挑んだ戦い…

防衛線は守られた。

救援に訪れた戦術機の部隊のお陰で…

時間稼ぎの戦車隊は壊滅。 俺の乗る90式は砲手と俺の右足と共に戦車級に齧られて大破。

部隊と片足を失った俺と、目の前に座る操縦手の楠田は後送されて本土の戦車兵の教官として配置換えされた…

終わったと思った。

ひよつこどもを鍛え上げて、一人前にする教官職も悪くはないと思っただ。

しかし、時折夢で見る戦いの場景が頭に焼き付いて離れない。

心の中で誰かが囁く…

（まだ戦える）

（まだ負けてない、決着はまだ付いちゃいない！）

胸の中で何かが燻り続け、その熱は日増しに熱くなる…

そんな時だった。上官から戦車戦のアドバイザーとして出向する話が来たのは。

「気分転換になるかとはいはいと来てみりゃあ、なんで宇宙くんだりまで来なきゃならん？ なにかあ？ 上の奴等は宇宙で戦車でも走らせるつもりかあ？」

「大尉。折角だから楽しませようよ？ 宇宙に出るなんて滅多に経験出来るもんじゃないんですから？ ほら、地球が見えますよ！ 綺麗だ…な……」

「…くそっ！」

小さな窓から見えた地球の姿に、場を和ませようとした楠田は絶句し、宇喜田は悪態を付く。

眼下に見える青き地球はその肌に荒涼たる茶色の大地の傷跡を見せ、それを見た人々の胸を締め付けた。

（お前はこのままでいいのか？ あの大地の姿を見て何も感じないのか！？）

「っ！？」

無残な地球を見た瞬間、宇喜田の心のささやきが強くなる。

（戦え！ 打ち勝て！ お前の誇りを取り戻せ！！）

と…

12ター目(前書き)

マブラヴ・アンリミテッドのその後の世界が酷い有様で、
あらすじ
だけで泣けてきた。

12 ターン目

「それではフジエダさんのご予定もあるようですし、今日はこれまでとしましょう。明日は9時にお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「はい、問題ありません」

「それでは明日朝9時にお伺いします。ウイルソン外交官もそれです？」

「ああ問題ない。フジエダさん、よければ今夜ディナーをご一緒に……」

「申し訳ありません。今日は急ぎの予定が詰まっております……明日の夜は時間が空いているのでよろしければ？ 蒲田外交官もご一緒にどうですか？」

こちらに来てもうすぐ一ヶ月が経とうかとした頃、ロンデニオンにアメリカと日本の外務官が来訪した。

両国の大使はにこやかな表情で友好的に接してくれてはいるが、裏で何を考えているか分からない人種なので俗人、凡人の俺としてはあまり関わりたくない。正直、誰かに代わって欲しいが八口に任せる訳にもいかず、笑顔で自ら対応している。

付加された知識のお陰か、外交官の専門的な言葉は理解出来るが会話を完璧に理解するには至らないので、不明な点はその都度に聞い

て確認している。

なめられて困るプライドはそんなにないので、実も蓋も無く序でに底もなしという某提督の言葉を借りて慣れない事やってみている。

「ええ、ご一緒させていただきます」

「…わかりました。 それではディナーは明日に」

爽やかな笑みを浮かべてディナーの同伴を了承する七三オールバツクに、紺の上品なスーツを着こなす白髭の蒲田外交官。

そして俺とマンツーマンでディナーがしたい、金髪を短く刈り上げて茶色の豪華なスーツを着たウィルソン外交官。

様々な思惑があるであろう両国の外交団には、軽く観察したただけ分かる共通する一点があった。

両外交官の補佐官に美人さんがいらっしやる事だ。俺も男ですから良い目の保養です。

やっぱり国の顔となる外交官だから美人さんを連れてるんだろうね
く羨ましいかぎりだ。 …「良いではないか、良いではないか」
とか想像しちゃいそう…

…それは置いて。 コロニー時間の朝8時ごろに港に到着した一行を、アシガラ、リバティークールが宿泊するホテルへと案内し

てホテル内の会議室で改めて顔見せしたんだが、そのまま会談前哨戦に突入し昼食会を挟みながら今現在は午後の4時になるうとしていた。

外交団とは別に、こちらから要請して来てもらった戦車関係の方々を思いのほか長く待たせた事に内心焦っていた。

外交団と分かれて、ホテル内で待ってもらった戦車関係の人々を館内放送で別の会議室に集まって貰うように連絡し、一足先に会議室にて八口の淹れてくれた緑茶を啜っていると流石に軍人と言うべきか、放送から五分も掛からずに関係者全員が集まった。

黙々と目の前で整列されては座ったままというのも失礼なのでこちらも立って待つ事にする。

ギイ、ギイ…

微かに聞こえた何かが擦れる音。その音の方角に視線を向けると、日本帝国軍の制服を着た一人の男が僅かに右足を引き摺りながら歩いている。

「気をーつけー！」 「アテンション！」

バツ！

全員が整列すると先ほどの足を引き摺った男と額に横一文字の傷があるアメリカ軍制服を着た男が声を張り上げ、あまりの迫力に俺の背筋も伸ばされる。

「「敬礼！」」

ザツ！

会議室に居る10名の人間が一斉に俺に向かって敬礼を送り、釣られて俺も敬礼を返してしまう。

「「……」」

「ん？ ……あ、楽しんで下さい」

「「休め！」」

バツ！

「ああ、座って下さい」

「「はっ！」」

まあしょうがない。だって軍人さんだもの…

「遠路をお越しいただき、ありがとうございます」

「はっ！ 労いのお言葉ありがとうございます閣下！」

「は？」

閣下？ えっ？ 何？ 何それ？

「あの…その閣下つてのは…？」

「？ はっ！ 外交官殿から技術准将殿であるとお伺いしておりますが？」

えっ？ そんな口裏合わせ聞いてないよ？

「…ちよつと待ってくださいね？」

「はっ！」

壁際に備え付けられたインターフォンを通じて蒲田外交官とウィルソン外交官に繋いでもらう。

…

…

…

何時の間にもやら技術准将なるものにされてしまっていた…

なんでも、これからは外部の人間と接する機会も多くなるであろうから、対外的な肩書きが必要になるであろうと配慮したそう。

いきなり現れた人物が個人で新勢力を宣言したとしても各国が信用するのは難しく、今の情勢下では世界に更なる混乱を招いかねない

事で、暫くはこのコロニーはアメリカと日本が共同で作ったコロニーとして、そして俺はそれの開発と管理を任された国連軍技術准将として各国に紹介して徐々に信用を勝ち取った上で改めて真実を発表した方が良く、日本帝国政府とアメリカ政府の間で意見の一致を見たそうさ。

なお、唯の技術准将だけではなく、俺は日本帝国軍技術准将とアメリカ合衆国統合本部付きの技術准将でもあり、両国からの出向扱いとして国連軍技術准将の地位も用意中でもあるそうさ。将官の地位は他国に容易に手を出させないため、権限やらなんやらの無い名誉だけのお飾りの階級で、こちらの反応を探ってるのかな？ 地位としては向こうが出せる最大限の物なんだろうけど。

「なんとという三足の草鞋…」

いや、本来のコロニーの管理者としての肩書きを加えると四足…俺は四足動物か？

なお、表向きは俺に対する命令権は日本帝国皇帝と征夷大將軍、アメリカ合衆国大統領のみに有り、他の將校や政治役人には一切命令権は無いそうさ。それに皇帝と大統領の命令権にしても表向きの建前だけで、勿論従わなくても良いし此方を尊重しているので命令する気もないとの事。但し、両政府からの要請はあるかもしれないからその時はよろしくとも言っていた…

正直、やられた！とは思ったが、両国の保護下に入れば表向きの面倒な事は任せられる部分は大きいので助かるといえば助かる。あとは悪い方向へ利用されないように十分に気をつけて、この世界に

根付ければいい。

長いものには巻かれよう。

とりあえず了承し、詳しい話を明日聞いて正式に回答する事を両外交官に告げた。 正式な辞令や書類、制服などは明日手渡すとの事。

「…あの、制服は今のままがいいんですけど…」

保管所で発見した連邦軍服が思いのほか着心地が良く、出来ればこのままでいたいと要望すると、そのくらいならと了承してくれた。

これまた但し、公的な場では帝国軍、アメリカ軍、国連軍の制服をお渡しするので、出来るだけこちらの要望に沿って欲しいと事。

今の制服はこのコロナー関係者用に小數作られた物と口裏を合わせるようにとの事でお互いに了承した。

ぼんぼんと言葉の出る外交官二人に半ば感心しつつ受話器を置き振り返ると、微動だにせず椅子に座って待っている方々が…

「重ね重ねお待たせしてすみません。 どうぞ楽にして下さい」

「はっ！ ありがとうございます！」

…しょうがないもの、だって軍人さんなんだもの。 そして俺も軍人さん… しょうがないよな… うん、しょうがない… これもこ

の世界で生きてく為だ。

「え、そんなに硬くならないで。 准将とは言っても実戦も経験してないし、まともな将校教育も受けていない技術将校だから気楽に……って言うても軍人だから無理か。 とにかく楽にして下さい、お願いがあつて来て貰ったのはこっちですから。 あっ、自己紹介が遅れましたが私は当コロニー、ロンデニオンの管理者でシンジ・フジエダ……技術准将です。 どうぞよろしく」

「はっ！ 自分は帝国陸軍大尉、宇喜田 英彦であります！」

「私はアメリカ合衆国陸軍、機甲師団所属のエリック・カービン
ソン大尉であります。 お会いできて光栄です閣下」

閣下…… しょうがない。 しょうがないんだ……

「閣下じゃなくてフジエダで……准将をお願いします」

「了解しましたフジエダ准将」

准将の方がまだまし……かな？

「それでは自己紹介も済んだので本題に入りたいと思います。先ずは此方を御覧ください」

右手に掲げるのはA4サイズの61式戦車マニュアル。席についた全員の目の前、コの字形に設置された机の上に同じものが置かれている。

全員がそれを手にした事を確認して話を続ける。

「これはロンデニオンで生産予定の戦車、61式のマニュアルです。皆さんに来ていただいたのは、実戦経験のある戦車戦のエキスパートとそれを支える整備兵の方に61式を評価してもらい、現場の目で意見をして欲しいのです」

その言葉に大尉二人を始めとした数人の目が細まり、見極めるように俺を見据えた。

13 ターン目

「やあ、こんな格好で失礼するよジョージ」

「構わないよ、久しぶりだなメラニー。体の具合はどうだ？」

アメリカ北部に在るとある屋敷で 二人の人物が顔を合わせていた。

一人はガウン姿でベッドに身を起こすを老人で、長い時の中で色の抜け落ちた長い白髪に皺に埋もれた顔から穏やかではあるが隙の無い視線を来訪者に向けている。

訪れた来訪者、アメリカ合衆国大統領ジョージ・エデンは古い友人に労わりの視線を向けるとベッド脇に置かれた椅子に静かに腰を下ろす。

「変わり無くだ… それよりも“こんな”忙しい時期にどうしたのだ？」

古い友人、メラニー・カーマインの言葉に苦笑を浮かべるエデン。

目の前に居る人物がただの老人ではなく、やせ細った体から発するオーラのようなモノが未だに現役である事を教えて少しだけ嬉しく彼は思った。

軍を退役して政治家であったエデンの父の人脈を受け継ぎ、目の前に居る老人を紹介されてそのサポートをうけて政財界へと入った。

今のエデン、大統領の地位に就けたのは彼のお陰だった。

「“こんな”時だからこそ尋ねたのさ。政財界の重鎮である君をね」

「こんなベッドに横たわる老人にか？」

「表向きは息子のケビンに職を譲ってはいても、実権は君が握ったままなのだからしょうがない」

「あれはまだ未熟よ…あの驕りと傲慢をコントロール出来ぬ内はまだまだ…」

二人要人による密談は深夜にまで及んだ…

二両の獅子が土煙を上げて疾走し、二本の長大な牙を持つ頭を互いに巡らせて噛み付く隙を伺っている。

「楠田ー！ 進路そのまま！ 限界まで走らせるー！！」

「たつ大尉ー！ 悪路で安定がー！？」

「言い訳はいい！ このじゃじゃ馬を乗りこなしてみせろー！！」

「ヘンリーー！ 左45度ターンー！！」

「イエッサーー！」

地球をモチーフにした地球連邦軍マーク、今ではロンデニオンの御旗代わりになっているマークが入った二両の61式戦車を駆り、コロニー内の演習場を駆け回るのは日本帝国陸軍の宇喜田大尉が戦車長、楠田曹長が操縦手の日本チームと、アメリカ合衆国陸軍のカービンソン大尉が戦車長、ヘンリー少尉が操縦手のアメリカチームだ。

61式の評価試験を頼んで1週間。マニュアルを渡された翌日にはそれを読破して、そのままファクトリーへと直行し実物と対面。

その翌日にはファクトリー内のシミュレーターに、日米仲良く一日中引きこもり基本操作をほぼマスター。ロンデニオン滞在4日目には演習場で実機を乗り回し始め、今ではレーザー照準を用いた模擬戦を体力の続く限り行っている始末だ。

「決着が付いたようだぜ准将」

少し皺枯れた声に横を向くと、ツナギ姿にサングラスを掛けた初老の男性、日本帝国陸軍で整備班の1つを任されているという後藤整備班長が61式に視線を向けながら隣に立っていた。

「くそおー！ また連勝できなかったー！ 楠田ー！ー！」

「えー！ー!? 俺のせいですかー！ー!?」

「ははっ、そう簡単に連勝はさせんよウキタ」

「次はこちらが連勝にチェック（王手）ですね大尉？」

動きを止めた二両の61式から無線越しの声に少しげんなりする。

…皆さん、元気ですね…

宇喜田さん達と日本、アメリカ外交官が来て状況が少しだけ加速した。三つの技術准将の辞令と、日本帝国とアメリカ合衆国の戸籍を受け取り、とりあえずの公の身分を手に入れた。日本帝国国民 藤枝 慎治と、アメリカ合衆国国民 シンジ・フジエダの誕生だ。しかも漢字表記が合ってるし… ぶっちゃんけ両国とも俺を取り込みにきている…

だいたい階級が同じとはいえ、三つの軍属は異常だ。多分、日本とアメリカの利害が一致した結果なんだろうな。日本籍とアメリカ籍は自国との繋がりや他国に見せ付けての牽制で、日本籍をアメリカが認めたのは、下手に揉めて時間をかけるより認めることではばらくの間二カ国だけの秘密とする事で、各国に先駆けて取り込みと有利な条件を引き出すための時間を作り出す方が無難といったところか？ 国連准将は他国に対する表向きの建前で、コロナーはアメリカと日本の物ですがコロナー管理者は国連の軍籍も持つてますよ、いずれは人類のために貢献しますよなパフォーマンスと国連での発言権強化の為。あとは、例の計画に公に参加させるためかな？

外交官の話では各国が国連の場でコロナーに何がしかの命令をしようとするれば、日本とアメリカが大金かけて独自に開発したものだからと拒否って、両国に個別に接触しても共同開発だからもう片方の同意がなければ無理！ これでロンデニオンに命令できる国はありません！ どやっ!？

と、いった話だったが… お決まりでウチからの要請は宜しくね！も付け加えていたな…

日本とアメリカに雁字搦めにされてる気がする… 今のところ武力行使などでコロナー制圧に来ないのは上の存在が押さえになっているからなんだろう。未知の技術を持つ存在… されどその上層部は今だ把握できないから慎重融和策と搦め手で着てるんだろうな。

本当は他の国とも交流を持ちたいが手が回りそうにない。とりあえず現状維持で、まずは日本とアメリカから交流を深めてそれを足場にしよう。

よらば大樹の影とも言っし。

コロニー移住者の件も任せて見ようかな？ 都市運営は複雑だから専門家に任せた方がいいだろうし。コロニーでこちらが抑えるべきはファクトリーと港部分にしてと…

「眉間に皺寄せてどうした准将？」

「…色々考える事が多いんですよ、おやっさん」

「しょうがあるめえ？ なんせ准将閣下だからな」

異世界で神様に使われ、こんどは両国に使われるのかもしれない俺の人生って…

「はあ… おやっさん。 61式はどうです？」

気分を変えるために此所に来た本来の目的を溜め息混じりに訪ねる。

「ああ。 レポートでも出してるが、今の所は大きな問題は出てねえな。 部品関係は国際規準に合ってるからサイズは合う物が多い、専用パーツ以外は他のから流用が利くだろうよ。 但し、材質の関係で強度にバラつきが出るかもしれんからそこら辺は現場の整備員のさじ加減だな」

「稼働に問題は無いんですね？」

「ああ。現場から見たら許容範囲だ、整備でコントロール出来る。急に動かなくなる事はない。良く出来てるよコイツは」

一見、冷静沈着に見えるおやつさんだが、宇喜多大尉達と同じく1日でマニュアルを読破して翌日には整備マニュアル片手に61式を分解して見せるほどの熱中ぶりだった。

「そうですね… あとは補給品の流通をしつかりすれば…」

「それとバッテリーだな。このご時世で化石燃料を使わない電気駆動は画期的だが、その辺の環境も整えないと戦場で立ち往生しちまうぞ?」

61式はガソリンや軽油を使わない大容量バッテリー使用の電気駆動車だ。故にこの世界では貴重な化石燃料を消費しないで済むメリットが有るが、代わりに充電設備が必要になる。

専用の充電器具はコロニー内で量産出来るし、時間は掛かるがこの世界の発電機を使って充電する事も可能だ。

対策としては61式と一緒に大量の充電器具を提供して普及させるぐらいしかない。

「准将！ コイツは何時、実戦配備されるのでありますか!？」

「まだ早いですよ宇喜田さん。」

「実際に使われる立場としては、61式は合格なんですか宇喜田大尉、カービンソン大尉？」

「スペックは問題ありません准将。性能面ではエイブラムス戦車を全て上回っています」

「ああ。90式も良い戦車だったが、コイツは段違いだ！しかも名前が61式というのも帝国戦車乗りとしては馴染み深い」

宇宙世紀の技術で作られた連邦軍正式戦車は伊達じゃない…か。想像以上の好感触だな。

「それじゃあ問題はないんですか？」

「…あ。いえ、准将。1つだけ問題になりそうな事が…」

「…そうですね。国土に余裕のある我が国はともかく、帝国では…」

難しい顔をする大尉2人。カービンソン大尉の言葉、国土の広さで連想される問題は…

「サイズ…ですか？」

「そのとおりです准将。国土が広く平地の多い我が国や、それに近い土地なら問題は無いと思われませんが…」

顎に手をやり思案顔のカービンソン大尉の言葉を軽く手を上げて遮り、後を繋ぐ宇喜田大尉。

「帝国の領土内：国土に敷かれた道の幅と強度が61（ろくいち）に耐えられる物はかなり限られるかと…」

狭い国土と起伏の多い日本では大型車が通れる道は限られてくる。

前に呼んだ本に、日本の戦車はその辺りの制限が他国に比べて厳しいと呼んだことがある。

61式は90式やエイブラムスより一回り以上に大きく、その分重量が嵩む。下手な道路を通ればアスファルトが砕けて、道が陥没してしまい他の車両が使用できなくなってしまう。

「道を破壊しながら進軍するのは、まずいですよね…」

「はあ。BETA襲来に備えて戦術機を載せた輸送車の展開の為に、帝国でも交通道の整備が進められてはいるんですけどがあまり進展は無いと小耳に挟んだことがあります。…しかし、それを差し引いてもコイツは欲しいんですよ准将。他の冷や飯食らいの戦車兵も同意見だと思考します」

戦場の主役の座を戦術機に取られた者同士、宇喜田大尉とカービンソン大尉が視線を交わして頷きあっている。

ていうか仲良いですね二人とも。外交官さん達も一緒に会談する時は口裏合わせたように息が合っているし…

ああ、そうか。オルタネイティブ第5計画をアメリカがまだ発表していないし、BETAも日本に上陸してないので在日米軍も引き上げてないから決定的溝が出来てないからか。

このまま友好的な状態でいてくれると人類にとっては良いと思うん

だけどな〜

…今はそれを考えても詮無いか…

ロンデニオン時間深夜

当直の兵士などのごく一部を除き静まりかえったコロニーに1つの動きがあった。

日本とアメリカの滞在者が使用している港とは反対に位置するもう一つの港…

今のところコロニー管理者以外の人間が立ち入る事ができないファクトリーとも繋がる港の一面で、一つのゲートがゆっくりと静かに開いていく。

姿を現すのは白い木馬にも似た形の艦を背にした黒色の機体。

人の形を模したそれは、背面に備えられたバックパックのバーニアを軽く吹かしてゆっくりと港を進んで行く。

やがて、照明が殆ど落とされた港から出たそれは、月明かりに照らされて宇宙へと踊りだした。

流星のようなバーニアの軌跡を残し、恐るべきスピードで疾駆する機体。

そのコックピットに座ったシンジは、襲い来るGに耐えながら白いヘルメットの奥でこう呟いた。

「これがガンダムか…」と…

その眩きに答えるように機体の頭部に付いたデュアルアイが力強く煌いた。

14ターン目(前書き)

信じられるかい？ 書き溜め分が30ターン目を超えてるのに未だにBETAと戦ってないんだぜ？

14 ターン目

アメリカ合衆国の象徴的建物であるホワイトハウス。

アメリカという国の舵は議会場ではなく、この場で決まると言っても過言ではない。

厳しい訓練を受けたスーツ姿のSPが入り口に立ち、厳重な防諜対策が施された室内には、アメリカの頭脳とも言つべき人々が密かに集まっていた。

閣僚の代表とも言つべき各大臣達、各軍の責任者達に諜報部門の黒幕。更には異例として大手企業の資産家たちまで集まる豪勢な顔ぶれだった。

そしてそれを束ねるアメリカ国民の代行者たる合衆国大統領ジョージ・エデンは瞼を閉じ、静かに報告を聞いていた。

「…諜報員は無事にロンデニオンへと潜入いたしました。なにぶんにも閉鎖された空間での活動とされますので成果を得るには時間が掛かるものと思われます。なお、現地にて日本側の諜報員の姿が確認されたとの情報も入っておりますがオーダーに変更は？」

50代後半の丸眼鏡を掛けた頭髪の薄い男性は、人の好い微笑を顔に湛えながら現状の報告を済ませるとエデンへ確認を取る。

一見するとそこら辺に普通に居る善良そうな人物なのだが、祖国の為ならば如何なる汚れ仕事をも引き受けて忠義を尽くすCIA（中央情報局）を束ねる人物だ。

微笑の奥に隠れる細められた瞳の奥に、氷土すらも生温い冷徹さを見た者の大半は凍りついたように動けなくなるだろう。

「オーダーに変更は無い。慎重に、相手を刺激しない程度に進めてくれ給え。得たいの知れない相手だ。日本も今は強硬手段は取れまい… いや、あの国に強行手段は取れないだろう」

「そうでしょうか… 此方としては日本が強硬手段を取ってくれた方が大儀名聞が得られるのですが、あの国には無理でしょう」

CIA長官の瞳を見据えながらのエデンの見解に、彼は同意を示した。その瞳に心に日本に対する侮りも嘲りも無い。ただ冷徹に得られた情報から導き出された見解を述べるだけ…

「随分と消極的ではありませんか大統領？ 相手は一人なのでしよう？」

大統領の言葉に異を唱える人物。

年は40前半に見える参加者の中で最も年若い、財界の代表者の一人として参加するケビン・カーマインは豪華なスーツ姿にブロンドの巻き毛を揺らしながら若干の嘲りの表情を浮かべている。

「そうです大統領！　コロニー内は重力が有り地球と変わりない環境とか？　我が軍が誇る特殊部隊の精鋭を既に待機させております。ご命令頂ければ直ぐにでも制圧してみせましょう！」

ケビンに同調するのはアメリカ陸軍長官たるガードナー大将。

G弾推進派の急先鋒でケビン・カーマインの腰巾着とも言われる彼は、雄牛のような巨体を震わせて席から立ち上がり体を前のめりにさせながら大統領に具申する。

「罪状は適当に付けねばいいのです。CIA長官がお得意でしょう？　コロニーとその技術を我が国が独占すれば、戦後の我が国は優位に立てます！　そして我が国こそが…！」

妙に芝居がかった所作で舞台俳優のように悦に入るケビン。

「我が企業がでしょう？」

そんな彼にCIA長官は微笑を湛えたままに水を差す。

ケビンとガードナーの癒着は彼にとって周知の事実。勿論、大統領も知っている。

カーマイン財団は第五計画の有力な支持者であり、表向きは引退しているが財団の実権を握るメラニーは移民船建造推進派として財団に援助させているが、息子のケ빈はG弾推進派で秘密裏に資金などの援助を行い戦後の世界に実権を得ようと考えている。

そんな彼らに行動を起こさないのは今のところは必要が無いだけの事。必要があれば…

気分を害されたケ빈はキツとCIA長官を睨みつけるが、微笑を湛えたままの彼の瞳の奥を覗き込んで慌てて目を逸らした。

「ロンデニオンへの対応に変更は無い。人間は一人だが相手の情報が少ない。まずは相手を見極める事を重視する」

成り行きを黙して見ていたエデンは静かに宣言する。

「しかし！」

「これは君のお父上、メラニー氏とも見解は一致している」

尚も食い下がるケ빈だが、父の名前を出されると唇を噛み僅かに俯いて浮き掛けた腰を椅子へと戻した。

その瞳には冥い炎が燻り一瞬だけ肩を震わせる。

そしてそんな彼をCIA長官は冷ややかな瞳で見ている…

人が増え、営みというものが見え始めた街並みを眺めながら運ばれてきたばかりのお茶を啜る。

日本から来た京都出身だという軍属の店主が淹れてくれた緑茶と、店主手作りのコロニー産食材を使った茶菓子を味わうのが最近の俺の癒しのトップだ。

こちらに来て2ヶ月が過ぎ、俺の周りは目まぐるしく変わっていく…

アメリカと日本の大使館がロンデニオンに置かれたのを機に、両陣営が協力して運営するのを条件にコロニーの街の一部を貸し出して一万人分の移住と滞在の許可を出してその運営を任せた。

これには両国の外交団と政府もびっくり！なんせ協力運営と賃貸料以外の条件を俺が提示しなかったからだ。

敷金ゼロ、家賃格安の貸し出し。なんといい好物件！

その事を何度も確認して迫る外交官の顔が近いこと近いこと。コロニー建造物事態の管理は八口のおかげで問題ないが、移住者の事

は餅は餅屋で任せた。

もうちょっと要求出来そうだったので、代わりに幾つかの要請を出してみた。

戦車兵と整備員の追加派遣。 自走砲と迫撃砲の扱いに長けた兵士の派遣に、戦術機のパイロットの派遣。 61式の地上での運用試験許可と試験部隊の設立の為に今出向して貰っている宇喜田さん達と追加の人員をそのまま借り受けたい事。

コロニーに滞在しているアシガラ、リバティーのクルー達もロンドンオンに出向という形で借りたい事を告げた。

61関係は、地上で好評だったら61式の図面を始めとした全てのデータを渡すので格安のライセンス料で自国生産しても構わない事で手を打ってもらった。 これで地上の戦車メーカーも少しは納得してくれるだろう。

クルーの件は最初は難色を見せたが、提供予定の宇宙戦艦運用のための教導隊として操作、運用を学んでもらう為だと言ったら、検討の結果了承を得た。

これで戦車関係と、クルーの指揮権を得る事が出来た。

ついでに技術者を受け入れての技術交流もしたい旨を伝えると外交官は大喜びで、後日高そうな茶菓子を美人補佐官の手で贈ってきた。

補佐官のケイト・フィルシャーさんはセミロングのブロンドに欧米人らしいメリハリのあるスタイルを持つ美人さんで、その日は何時も以上に艶やかな雰囲気でした…

危うく蜜の香りに誘われそうになりましたが、明らかに危険な感じがしたので理性を総動員して死守。まあ相手もお仕事なのでそのまま帰すと上司に何か言われるのか複雑な表情をしてましたので、かわいそうと思い一緒にお茶はしましたが…

美人とお茶出来るのはいいものです。

頂いたお茶菓子もおいしかったです。

次の日に来た日本の補佐官である葉山 節子さんもケイトさんに負けず劣らずの美人さんで、日本人らしいスレンダーでありながら柔らかなスタイルに綺麗な黒髪と、慎ましくも艶やかな笑顔が…

勿論、理性全力で死守！ 生殺しという言葉の意味をしみじみ実感しました…

節子さんとも一緒にお茶をしてお別れしました。 役得です！

え？ 何で二人ともファーストネームで呼んでるかって？

そう呼んでくれと二人に頼まれたからに決まってるでしょう！

後日、今度はイケメンな日米補佐官がやって来てまたお菓子を置い

ていった。

即行で送り返したかったが、大人気ないので一緒にお茶して世間話をして帰ってもらった。

俺にその気は無い！ だから… そんな目で俺を見ないでくれ…

そんな日常の中でコロニー移住者の第一陣200名が来たのは一週間前、内半分は軍人と技術者で残りはその家族や軍属の方に企業の偉いさんなんかも潜り込んでいる。

勿論、その中には諜報関係者も紛れ込んでいるが好きにさせておく。

大事な情報はハ口とコロニーのメイン管理コンピューター・ZEP H Y Rが管理してるから大丈夫だろう。

何せ一度興味を持って調べてみたら、ハ口もZEP H Y Rも高次元存在さまに一部ブラックボックス化されてるから、この世界の技術とは文字通り次元が違う。

人があれを解析するのにどれ程の時を要するのが検討もつかない。

だからスパイの方々にはファクトリーと第二港以外は好きに嗅ぎ回ってもらっている。

そして今日の前で一緒にお茶しているのも、そんなスパイさんの一人だ。

「ん」 宇宙で飲む緑茶も中々に乙なものですな。そう言えば知ってますかな？ 緑茶に含まれるポリフェノール成分ですが……」

一見するとスーツを着たサラリーマンのようだが日本帝国の凄腕諜報員、鎧衣 左近その人だ。

「……と言っわけで学会では……聞いてますか？」

「全然。私には心を読むなんて器用な事は出来ませんから、そんな事をしなくてもいいですよ？」

お茶ウメエー！

「……私の事をよくご存知のようだ」

「お噂はかねがね。 あっ、お茶の御代わりお願いします」

「それはそれは。 高名なフジエダ准将に見知りおいて頂くとは光栄ですな。 あっ、私にもお茶の御代わりを」

ふう…… 何でこの人が此所に居るんだ？

今のところはオルタネイティブ計画には関わってないんだが…

「何故私が此所に居るのか疑問に思っておられますね？」

「そりゃねえ？ 敏腕諜報員がコロニーまで来て、しかもそのコロニーの管理者に堂々と会いに来るんですから。これは此方のセキユリティーに喧嘩を売るつもりなのかと…？」

軽く睨みつけてみるが、実際よく潜り込めたと感心するよ本当。

コロニーに入ってきた人間は港に居る八口にチエックされて、衛星経由でハッキングして得たデータに照会。 諜報関係者や重要人物が入って来た時点で連絡が来るのに、よく潜り抜けたなこの人。

閉鎖空間のコロニーで此所まで気づかれなくて来るんだから大したもんだ。

「はっはっは、怖い怖い。 そんな気は毛頭にありませんよ？ これはもう職業病の一種と思って大目に見ては頂けませんかな准将？」

涼しげな顔の彼を見て、夕呼先生の気持ちがいさだけ分かった。

「で？ 誰の差し金で目的は何です？ 帝国政府？」

「いえいえ、もっと個人的な頼みと私自身の興味ですよ」

「？ どういう事です？」

「おや？ 聡明なる准将閣下にもお分かりにならない？」

少しだけムカツと来た。

いかんいかん。相手のペースに乗せられるな。

「凡人なので。申し訳ありませんね？」

「おや？お気を悪くされたなら謝りますが、准将もガードが固いですな〜」

気を抜くと尻の毛まで持ってかれそうだからね！

「個人的な…ねえ。 香月博士…とか？」

「ほう…？ 良くご存知で。 けど違いますよ。 博士には良い土産話になりますが、今回来たのは別の方からのご依頼です」

かまをかけたが違ったか… 誰の差し金なんだ？

「それにもうすぐ此処は騒動の中心になりそうですからね。一度見ておこうと思ったのですよ。 香月博士をご存知なら第4もご存知でしょう？ 近々それを揺るがす事態が起こり、此処はその重要なポイントになる。…そう私は予測するのですが…」

ふ〜ん。 いよいよ第五計画をアメリカが国連で採決するのかな？
しかし、カフェですの話じゃないよね〜… 重要ポイントっていうのは、もともとの近くの宙域で地球脱出用の方舟を作る予定だったからか… ハッキングで得たアメリカの機密情報で知った時には何で日本との境界線近くにな？ と思っただけど、第四計画の本拠地である日本に間近で見せつけてプレッシャーをかけて第四計画推進派に揺さぶりかけるつもりみたい。

そんな宙域に方舟建造の拠点に使えるようなコロニーが1つ… そこには今のところは友好的な第四の日本帝国と第五のアメリカ合衆国間に挟まれそうなロンデニオン… いや、挟まれるだろうな〜

「後学の為にお聞きしたいのですが、フジエダ准将は第四ですか？
それとも…第五で？」

涼しげな顔して鎧衣さんが半端ないプレッシャーを掛けてきた。
それをサラリと受け流しつつどう答えようか考える。

「あ〜お茶が美味しい。 …どっちも。 じゃあ駄目ですか？」

「日和見ですか？」

「どうしても取って頂いて構いませんよ？ 第四は成功すれば得るものが大きいでしょう。 人類の勝利の確立を上げることが出来るでしょうが絶対ではない…。 第五はG弾の集中使用は最低の悪手ですが、種の保存を担う方舟は間違っではないでしょう？ G弾を使用した肉を切らせての戦法だって現状では人類側で最も成功率の高い戦法の一つだということのも事実ですし、最悪でも箱舟に望みを託して新天地にBETAが達するのを少しでも遅らせて一矢報いる

…とも取れる。大戦末期の敗色濃厚な状況を戦った日本人なら少しは心境を理解できるのでは？」

メタ情報でG弾すらも無効化されるのを俺は知っている。知っているからこそG弾の使用は避けて欲しいが、この世界の人は知らない。俺だって元からこの世界の人間でメタ情報が無ければG弾の使用に賛成していたかも知れない程に世界は、人類は切迫している。

メタ情報を知っているからと言って、G弾推進派を軽々しく批判は出来ない。彼らだって必死なんだろうし…

アメリカは自分の国の事しか考えていないとよく言われるが、自分の国の事を第一に考えるのはどの国も普通ではないだろうか？

他国との協調は大事だが、それをさせる余裕をBETAが奪ってしまふ… BETAの脅威が、恐怖が人から余裕を無くし狂わせていく。

土地を奪われ生産力が低下して行き、日々の戦闘行為や難民への物資供給で大量に物資を消費していく人類…

アメリカが広大な国土を持っていたとしても人類全てを支えるのに限界があり、限界を超えればその先にあるのは自滅。それもあるからこそG弾推進派は早々に決着を付けたいのではないだろうか？

戦後の世界で覇権を握る？ 荒廃した世界で？ 覇権を握れば他国に対する義務も生まれるのではないだろうか？

地球からBETAを追い出したとして、残されるものは？ BETAに食い荒らされ、核爆発と大砲の弾頭に使用されている大量の劣

化ウラン弾等に汚染された土地に、また人が住めるのにどれだけの年月が必要になるのだろうか？

戦後の復興を支えるのもやはりアメリカだ。どちらにしろアメリカは世界にとってなくてはならない国なのだ。

この世界ではまだ分からないが、第四計画が成功する可能性があるのを俺は知っている。俺が知らなければ、特殊な力が無いこの世界の人間ならば第四と第五のどちらが現実的と判断してどちらを支持する？

誇りは大事だ。だが、それだけで人のお腹は膨らまない。

人はパンのみに生きるに非ず。しかし民衆にはパンを…

今なら厳しい戦後を乗り越えて、食事に不自由することなく誇りやプライドを語ることが出来るあの世界の有難味がしみじみと分かる。

厳しい戦後を先人達が乗り越え、毎日の食事にありつけるからこそ平和や自由について声高に言えたあの国…

欠点はいっぱい有る。けれど自分の国が好きだ。遠く離れてしまっても思いは募る。

ああ…メタ情報があっても中々考えが纏まらない。どうしたら一番良いんだろうか…？

「…知り合いの女史が聞いたら、敗北主義だと罵りそうな話ですなあ」

「第五から見たら第四は楽観的に見えるのかもかもしれませんよ？ 情報を手に入れてそれを生かすだけの力が、人口と領域を半分近くに減らされようとしている人類に残されているのか…？ 勝ち続けられればいいですが、息切れして負けてしまった時には？ 最善を目指す第四、最悪を想定する第五… 鎧衣さんはどちらが正しいと思いますか？」

ゲームのストーリーでは第四で勝ったと思わせる雰囲気だったが、戦いは続いていき最終的に地球を取り戻せたかは分からない。原作のラストで香月博士も言ったが、第四とオリジナルハイブを攻略した事で人類は10年の時間を稼ぐ事が出来たと言った。人類は勝ったとは言っていない… もしかしたらな未来も有るかもしれないし、おまけにこの世界は因果律から外れて狂ってしまった世界だ。神様の話だとこのままでは地球上の人類と生命は滅ぶ運命で、それを防ぐファクターとして俺が送りこまれた訳だが絶対ではない。

「…私には日本帝国の人間です」

「…私は日本帝国の人間です」

「それでいいと思いますよ？ 日本人として生きて良いと思います。第四は第四で、第五は第五でやっていけばいい。人類に二つの

計画の推進が困難だといふなら微力ですがロンドンデニオンが協力します」

結局、今はこれしかやり方が思いつかないんだよね」

15ターン目

土煙を上げ大地を揺らし横隊で驀進する異形の集団。

強力な120mm戦車砲をも跳ね返す外殻を纏いながらも、時速160kmで走る突撃級と呼ばれるBETAは地球上に現れてから数多の人類側の戦線をその足と体で蹴散らし打ち破ってきた。

200を数える突撃級が形成した横隊の前方10kmに佇む一つの機影。

黒と灰色のツートーンに赤のアクセントが入ったその機体は、額に付けられたV字のブレードアンテナの下のデュアルアイで突撃級の集団を捕らえると双眸を光らせ、右手に握られたライフルを突き出すように構えると集団の中央に狙いを定めた。

ライフルの銃口付近が帯電して放電現象が起きると、ビシューンツ！という独特の発射音を響かせてピンク色の光弾が打ち出される。

音速を超える速度で打ち出された光弾はピンク色の軌跡を僅かに残しながら直進し、一体の突撃級の中心を捕らえるとダイヤモンドを遥かに超える高度の外殻を易々と貫きそのまま後方に連なっていた7体の突撃級をも貫いて後方へと奔って大気の中へ消えていった。

一瞬にして8体の仲間を失ってもその足を緩める事をしない集団にコックピットでターゲットインクスコープを覗き込んでいたシンジは軽く舌打ちして再度トリガーを引いた。

続けざまに放たれる光弾は横隊を引き裂きその数を撃ち減らしてい

くが、突撃級は意に介さずに黒い機体との距離を詰めてきた。

シンジはスコープを後ろに押しやりながら、3 kmにまで距離を縮められた機体に銃身が加熱して陽炎を揺らすライフルを躊躇なく投げ捨てさせ、腰の後ろにマウントされていたバズーカを持たせると構えさせて再び撃ち始める。

バズーカの巨大な弾頭が炸裂した突撃級は外殻を粉微塵に砕かれて衝撃にグラリと傾き、後ろから来た別の突撃級が勢いを殺すことも方向を転ずる事も出来ずにそのまま激突して共に大地へと沈んでいく。

「はあはあ…。この!？」

パイロットがバズーカの照準と残弾確認に気を取られた際に、一体の突撃級が機体へと突進を掛ける。

寸で気づいたパイロットは機体の左手に装備された黄色い十字飾りの入った赤い盾でそれを受け止めると、フットペダルを踏み込み押し返そうとする。

この世界の戦術機パイロット、衛士が見たら我が目を疑った事だろう。

時速160 kmで突進してきた巨体を正面から受け止めて、今まさに押し返そうとしているのだから。

踏み込まれたフットペダルに呼応して背部のバーニアが火を吹き、凄まじいパワーと強度を誇る四肢が伸び上がり突撃級を押し返した！

その隙にバズーカを捨て背部の上左右に突き出した二本の棒の右を引き抜くと、ピンクの軌跡を描きながら縦に一閃し、棒の先に現れた光の刃で突撃級を切り捨てる。

「はあはあ。ゲームやアニメみたいには上手く行かないか…」

「よう准将。こんな時間にシミュレーター室で何やってんだ？」

「ああ、お疲れ様ですおやっさん。ちょっと61式のシミュレーションデータの確認を…。おやっさんこそ、こんな時間までどうしたんですか？」

もうすぐ日付が変わる人気の無い時間帯のファクトリーで、室内から出た俺は日本帝国整備兵・後藤清一大尉、通称“おやっさん”に出くわした。

少し前までは俺か、俺の同伴無しでは入れなかったファクトリーだが、61式の評価試験を期に一部の施設内への立ち入り許可証を6

1式関係者に配布したので、俺以外の人間の出入りが行えるようになっていた。

「ん〜？ ああ、こいつを読んでたらいつの間にか時間が経っちゃまっててな。今から上がりだ」

そう言っておやっさんが右手で上げて見せたのは、先日渡した青い表紙にRX75と書かれた一冊のマニュアル。

「私も今から帰る所ですから、良かったら乗って行きますか？」

「おう、そいつは助かるな。この年になると帰りの運転も疲れちゃうんでな」

少し肩を竦めながらサングラスの奥の瞳を緩めて同乗を受けたおやっさんと連れ立って玄関前に止めてあるエレカへと向かう。

世間話をしつつ廊下を歩き、警備に就く八口に挨拶をして車に乗り込むと寢床のある商業区へと走らせる。

街灯に照らされた道を音楽を流しつつ走らせ、次に来る移住者に放送局関係者が含まれていて手始めにラジオ放送を開始するなんて事を話していたのだが、不意に会話が途切れてしまう。

原因は先程からおやっさんが何やら考え込んでいるからだ。

考え事の邪魔をしちゃ悪いと思いつく口を閉じたのだが、暫くすると意を決したような雰囲気纏わせておやっさんが口を開いた。

「なあ准将。俺達技術屋つてえのは、不明なモノをそのままにとけねえ性分だな。俺達が整備した物に兵士達は命を預けて戦う。だからこそ、扱う物にミスが無いように隅々まで把握する必要がある。自分でもよく分からない物を戦ってる奴等に渡したくはねえし、ウチの若けえ奴等に扱わせたくもねえ。そつちにも事情があるだろうが、敢えて聞かせてもらおう。コイツの、RX75・ガンタンクの動力源はなんだ？」

サングラスを取り、目を細めながらジェネレーター部分の項目が抜け落ちたマニュアルを掲げて見せるおやつさん。

「提示されている出力が桁違い過ぎる。61式のバッテリーも戦術機並みの出力だったが、コイツは比較にならない出力だ。いったいコイツは何だ？」

車のスピードをゆっくりと落とし路肩に止め、おやつさんの方を見ないようにして考える。

「…もう少し、秘密にしときたかつたんですけど…。整備班には先に知っておいてもらった方が良いでしょうね…。おやつさん、俺が良いと言うまで秘密は守れますか？宇喜多さん達は勿論、帝国にも秘密に…」

俺の言葉におやつさんが黙って頷いたのを確認すると、車をＵターンさせてファクトリーへ戻った。

そよ風が草原を抜け、金糸のようなクリスの前髪を優しく遊ぶ。

馬に寄り添い、その逞しい首筋を優しく撫でながらここが宇宙そいつに居ることを忘れてしまいそうな光景に心を奪われていた。

アメリカ合衆国航空宇宙軍大尉として宇宙戦艦リバティープライムの副長の任に就き、今はロンデニオンに出向して新型艦サラミス級の試験運用に携わる忙しい日常の中でこの場所に来ることは、彼女のささやかな楽しみの一つだった。

草原を見渡せばの放逐された馬や牛が水を求めて人口湖に集い、畔には栈橋が作られており日本帝国軍の坂田艦長とアメリカ合衆国軍のイーストウッド艦長がラフな私服姿で竿を並べて釣りを楽しんでいた。

一見すると地上に居るかの如く錯覚するが、空を見上げれば薄い雲の先に二つの大地が見えることから、此処がスペースコロニーの内
部である事を彼女に認識させてくれる。

ヒヒンッ

軽い嘶きを隣から聞いた彼女は、もう一度そつと首筋を撫でるとジーンズのポケットから包み紙に巻かれた小さな四角い物体を取り出した。

「本当はあんまりあげないように八口から言われてるんだけどね？」

普段の彼女からは想像できない悪戯な笑みで包みを解くと、白い角砂糖を馬の口元へ差し出す。

『マタアゲテル！ マタアゲテル！ クリス、甘ヤカシチャダメ！』

いつの間に来たのか一体の八口が地面を転がりクリスの背後に来て抗議の声をあげる。

「ふふっ、ごめんなさいね八口？」

この自然ブロックを管理維持する八口達と、暇を見ては訪れて馬や牛の世話を手伝うクリスは、コロニーに訪れた人間の中で一番八口と良好な関係を築いた人間かもしれない。

「ふむ。 クリスも此所に来てよく笑うようになったな…」

「覗きが趣味とは感心しませんな、イーストウッド艦長？」

湖の栈橋にて釣りをしている筈が、竿ではなく双眼鏡を手にして遠目にクリスを伺っていたイーストウッドは口許を弛めて呟き、それを坂田が水面に浮かぶオレンジの浮きを見ながらたしなめる。

「ミスター坂田。 ジョンでいい。 軍服を脱いでまで艦長と呼ばれるのは肩が凝る」

「…では私も弥彦で、ジョン？」

ジョンは了承の言葉代わりに、持参したクーラーボックスから冷えた缶ビールを2つ取り出すと軽く振って見せて1つを弥彦へと投げ渡した。

二人の男はプルタブを開けて軽く缶を当てて一息に煽る。

「くはぁー！ 宇宙で飲むビールは最高だな！」

「ぶはあっ！ 確かに、無重力ではビールの気が抜けて呑めたものではないのがこうして飲める」

一気にビールを飲み干したジョンは、栈橋の上に手足を放り出して寝転び人工の空を見上げた。

弥彦も年甲斐もなくそれに倣い寝転ぶと、空を見上げてゲップする。

「…いい所だ… 静かで天気良くてビールが美味しい」

「ええ、本当に… 地上に居る家族にも見せてやりたい…」

「？ 弥彦は家族を此所に呼ばないのか？」

首だけを廻らせて、隣に寝転ぶ弥彦にジヨンは静かに問う。

「…このコロニーは多分、今現在の地球圏で一番安全な場所でしょう。…私は軍人です。 国を、人々を守る職に就いています。」

今、日本本土はBETAの脅威が近づき、誰もが不安に怯えている… なのに軍人の私の家族だけが安全なコロニーに…」

そこまで言い身を起こすと、缶に残っていたビールを一息に煽る弥彦。

そんな彼を憂いの表情で見つめるジヨンは、静かに言葉を紡ぐ。

「…貴方は高潔な人だ弥彦。 しかし、敢えて言わせて欲しい。」

「…大事な人とは出来る限り一緒に居た方が良いと思う。 こんな世の中だ… お互いに何時死ぬかも分からない… だからこそ、生きてる間に愛する人と出来るだけ一緒に居たい、愛する家族に一つでも多くの思い出を残したいと私は思うよ… この思いがあるから…」

「…戦える。 ですか？ …ジヨン。 貴方は良い父親のようだ」

「そうでもないさ。何時も家に居なくて、妻や娘達に淋しい思いをさせている。ロンデニオンに正式に出向になって、家族を呼べば一緒に居る時間が増える…少しは家族に対する償いになるだろう。…弥彦、生きているからこそ触れあえるんだ。お互いにどんなに後悔しても、死んでしまつたら愛する人に触れる事は出来ないし、思い出も作れない…」

ジヨンはふと、馬に寄り添い、八口を抱き上げて微笑を浮かべるクリスへと視線を向けた。

「…少し…考えてみます…」

ジヨンは弥彦の言葉に再びビールを投げ渡す事で返し、煽ったビールには先程よりも苦味を感じた。

16ター目(前書き)

暑い季節になりました。お互いに体に気をつけてユルユル頑張り
ましよう。

ちよつと早い暑中お見舞い申し上げます。

16ター目

ロンデニオン行政府内にある会議室で俺は険悪な雰囲気挟まれていた…

そう。挟まれていたのだ…

円卓に座った俺の右側には、蒲田外交官を始めとした日本帝国外交団がずらり。

俺の左側にはウィルソン外交官を始めとしたアメリカ合衆国外交団がずらり。

お集まりの皆さんは表面上は笑顔を取り繕っているが、発せられるプレッシャーが酷いことになっており、その内の半分は俺に来ているので正直この場から逃げ出したい…

乾いた喉を潤そうと目の前にある冷めた緑茶に手を伸ばそうとするが…

「フジエダ准将。我がアメリカ合衆国はロンデニオンを高く買っておりです。貴方が望むのであれば合衆国は最大限の援助をする準備があります。…合衆国の友人として我々の手を取って頂けませんかな？」

「藤枝准将。 恐れ多きも皇帝陛下と煌武院 悠陽殿下より、“よしなに”との御言葉を賜わっております。 何卒、善き御返答を…」

…お茶すら飲まして貰えない。

まあ事の始まりは昨夜の事だ。 国連会議の場でロンデニオンの事をアメリカ、日本の共同発表という事で公表したらしいのだが、その場でアメリカがオルタネイティブ5。 所謂、第5計画の採決をしちゃって、オマケにロンデニオンと日本帝国に相談無くロンデニオンコロニーが第5計画の拠点として機能する予定だとか言っちゃったらしいんだな、これが。

当然、国連会議は紛糾して大騒ぎの大混乱、それに乗じて採択を取って第5計画を正式に認めさせたのだからやり手だよね。

俺の知ってる第5計画は予備の名前が付いていた筈なのに、正式に認められた理由はロンデニオンの存在だろう。

とある地上の情報筋に依ると、第4と第5に距離を置いて静観していた自称・中立派の一部が、表向きはロンデニオンコロニーを作り出したと言うアメリカの技術力に第5計画の成功率の高さを見て靡いたのが原因らしい。

正式に認められた第5計画は、当初は予備案として採決を取り、アメリカが予算や資源を殆ど独自に行う予定だったのが、第4計画と同じ位に他国への協力要請優先権を持つちゃって国連予算を崩壊と、

各国の財政もえらい事になる危機に…

只でさえ人類のお財布の危機なのに、どっちも自分の方が正しいと信じてるから全力で各国のお財布を絞りそうで…

いや、するな。きっと… うん。

メタ情報でそこまで搾り取らなくても、どっちも4年後には達成出来るのは知ってる身としては止めたい。

そんな状況でアメリカは事後承諾とはなるが、ロンデニオンに正式な協力要請を。日本帝国はロンデニオンが第5計画に協力しなければアメリカの国際信用はがた落ちになり、もしかしたら計画撤廃となる糸口になるやも？ いや、いっそのこと第4計画にロンデニオンを参加させちゃえ！ 第5に取られたら状況がどこまで悪くなるか分かったもんじゃない！ でっ、第4への協力要請と第5への協力拒否要請を出してきた。

…どちらかに肩入れし過ぎると、相手への競争意識が暴走して両計画が各国の資源や資金を調達すると、前線で戦う兵隊さん達にも影響を及ぼして前線崩壊したら手の打ちようがない…

伏せていたカードを捲るか…

「あのですね…」

「何かなフジエダ准将!？」

「何ですか藤枝准将!？」

食いつきが凄いです。

「あゝ、そのですね？ 取り敢えずお二人とも落ち着いて私の話を聞いてほしいんですが… ロンデニオンとしては第5計画の移民船建造に協力するのは各かではないんですが…」

その言葉に喜色満面の笑みを浮かべるアメリカの外交団。 反対にこの世の終わりのような絶望した表情の日本帝国外交団。

「但し、条件が有ります。 移民船の建造の為に港の使用許可と関係者のコロニー滞在、…工業地区の工場の一部も貸し出して物質の方もささやかですが提供しましょう…」

「おお！ ありがとうございます！」

「代わりに第5計画の第4計画への出来る限りの協力を要請します」

「は…?」

「…へっ?」

笑顔が固まるウィルソン外交官と、失意に肩を落としていた蒲田外交官が、まの抜けた声を出す。

「具体的には、資金や資源…第4に必要であろうG元素や技術データの提供を融通してあげて欲しいのです」

「…」 「…」

「ロンデニオンが移民船の建造拠点になれば、かなりの資金や資源が浮きますよね？ ああそうだ！ ついでに移民船の資材やら人員を宇宙そらに上げるのに、ウチのHLEVロケットを使われては？ そろそろ地球に定期便でも出そうかと考えていたもので… いや、行きは61式や食料なんかを積んで帰りはどうしようかと思つてたんですが丁度よかつた！ これでまた予算の節約になりますね！？」

「せつ節約にはなりますが…」

「ふつ藤枝准将…？」

「あつ！ 勿論、ロンデニオンは第4計画へも出来うる限りの協力をさせて頂きます。見返りは第4の第5への技術協力で…。第4には優秀な博士が居られると聞いておりますから、移民船建造にプラスになるでしょう」

啞然とする二人の外交官だが、やがてウイルソン外交官が肩を震わせて、蒲田外交官は信じられないといった表情で各々の感情を示し出す。

「フジエダ准将… 貴方はからかつておられるのですかな…？」

地の底から響くようなウイルソン外交官の声。

怖くて震えそうです。

「アメリカ合衆国は貴方に最大限の敬意を払ってきたつもりです。それに対する答えがこれとは……これはあまりにもナンセンスだ！」

「どの辺りがナンセンスだと言うのですウイルソン外交官？」

「全てだ！ 全てに決まっている！！ 第4計画と第5計画は相反するモノだ！ それを互いに協力しろですと！？ これ以上のナンセンスがありますか！？ 人類の為には第5計画こそが唯一の……！」

「希望？ 別に良いじゃないですか、希望が2つ在っても？ 余裕が有れば2つ同時でも私は良いと思えますよ？ その余裕を作るために、ロンデニオンは協力を申し入れるんですし……」

「たとえ第4計画が成功して情報を得ても人類が地球上で勝利する保証が何処にあるというのです！？ そんな不確かなモノに人類に残された僅かな力を注ぐよりも、確実に人類という種を残すための第5計画こそが正しい道だとは思わないのですか！？」

「それは第5計画も同じでしょう？ 探査機が発見した移住可能な星が本物だとしても、そこまで行けるのか？ そこで人類は生活出来るのか？ BETAがその星に来ないのか？ 不安要素だらけで保証なんて無い。だったら……！」

「2つ同時に仲良く進めると？ 今の人類にそんな余裕は……！？ 失礼だが、それをどうにかする程の力がロンデニオンに有ると思えない。ロンデニオンの技術力が高いのは認めましょう。しかし、たかだか一コロニーだ。我が国がその気に為れば……」

脅しが入ってきたか。蒲田外交官は黙って成り行きを見ているし、会議室のドアの向こうでは2つ集団が緊迫と困惑が内混ぜになった感情で室内の様子を伺っている。

片方は強行手段としてウィルソン外交官が用意したアメリカ軍人さんの集いで、もう片方はその抑えを目的に蒲田外交官が呼んだ帝国軍人さん達だろう。

今までコロニーで仲良くやってきた人達が、こうも対立する様を見ると悲しくなる。

「…最後の言葉は聞かなかった事にしておきますね？」

「我々は本気です！」

「やりたいなら、やってもいいですけど… まあ、確かに大国であるアメリカ合衆国を動かすのに“今”のロンデニオンは影響力が小さいのかもしれない。」

ですから、手の内を一枚お見せしましょう」

「何を今さら！ あなた方の艦に搭載されている荷電粒子砲なら我が国でも研究が進んで…」

「核、融合、炉」

印象付ける為に言葉を句切りながら話す。

アメリカと日本帝国はロンデニオンの技術力を低く見積もったんだろが、どっこい地道にコツコツと活動し技術を段階的に提供しようとした方策が今この時に吉になった！

いきなり安定した性能の核融合炉を持つてます！ではなく。技術公表出来る下地を作って、段階的に発表と提供し、なるべく穏便にしようとしたので、教えてない、もしくは正確に伝えてないモノや技術がわんさかある。

何せ宇宙世紀のトンでも技術なので、いっぺんに全部公表したら世界が大混乱！ 問い合わせや対応に俺が対処出来ないと思ってる行動がこうして…裏目に出た？

提供しても大丈夫か確認しながらの一步一步活動が相手に低く見られる原因になったか…

開けっ広げに見えて締めるところは締めたつもりだったんだが…いや、なんかおかしい。 何かが引っ掛かる… でも今は、

「核融合炉！」

大事な事なので二回言います。

「っ…！？」

「…ふっ 藤枝准将。 かつ確認しますが、貴方は…ロンデニオンは核融合を…」

「持ってます。 作れます。 現物はコロニーの発電施設とマゼラ

ン、サラミスの機関に使われています」

「バカな！？ フジエダ准将、君はコロニーと戦艦の動力源は原子炉だと言ったではないか!？」

「あゝすいません。嘘です。折りを見て真実を話そうと思ったのですが… このような形で話す事になったのは本当に遺憾です」

「くっ、ならばなおの事!」

「やめた方が良いと思いますよ？ 何かあつたらコロニーのメインコンピューターが情報も現物も全部消去するように、上からプログラムされてるみたいですから」

これは前にメインコンピューターを調べたところ、ZEPHYRに教えてもらった事だ。

上（神様）がどういふつもりでプログラムしたかは分からないが…

「話し合いをしましょうよ。ねっ？ 私は両国とも友好的にやっつて行きたいんですから…取り敢えずこのままじゃ話が進まないから、選手交代をお願いします。今から一時間後に大統領閣下と煌武院殿下のホットライン回線へハッキン… げふんげふん。…連絡しますので、平和的な話し合いに応じて下さる意志がありなら出て頂きたいです。両者共にお出にならないなら、今後一切両計画に関わりませんから… いっそ、ご迷惑なら月の陰にでも隠れますからとお伝え下さい。それじゃ〜」

有無を言わず、ささっと退室。

あつ、兵士の皆さま御苦労様です。

17ターニング

「それで…私に話が回って来たのかね？」

現アメリカ大統領、ジョージ・エデンは読んでいた本から顔を上げると、眼鏡をずらして報告に来た秘書官の顔を見詰めた。

「はい閣下。 40分後にはロンデニオンから連絡が入るかもしれませんが」

「かもとは？」

「ホットラインに侵入出来ればという事です閣下」

少しだけ笑みを見せた秘書官に釣られて大統領もまた苦笑する。

「外務省を始めとしたロンデニオン担当の者達が集まっており、至急閣下とお話したいと…」

「さてさて、どんな話をしたいのやら？」

本を閉じてテーブルに置いた大統領は席を立つと、脱いでいた上着を秘書官から受け取りロンデニオン担当者が集まる会議室へと向かった。

その途中…

「意外にあっさりと尻尾を出したものだ…」

「この話、どう思いますか榊？」

「話に応じる… いえ、受けるしかないかと思われませ殿下」

場所は変わって京都府、御所内に在る征夷大將軍謁見の間。

上座に座するは征夷大將軍の位を賜ってまだ日が浅く、幼いと評して良いほどの年の紫髪の少女・煌武院 悠陽。その傍らには緑の長い髪に眼鏡を掛けた赤い衣装の女性が控え、下座に跪くスーツ姿の壮年の男性は、日本帝国総理大臣 榊 是近。

「ロンデニオンの申し出を受ける… それで良いのですね？」

「殿下…。それは皇帝陛下より全権を賜った殿下がお決めになる事。言を臣下に聞かれましても、臣下には是非を問うてはなりません」

「…そう、ですね…」

「…殿下、出過ぎた言葉を申した事お詫び申し上げます…。されど殿下は日本帝国の執政全権を司るお方。迷う姿を臣下に見せて

はなりません。殿下が迷えば臣下が、民が、国が迷うのです。自信をお持ち下され殿下。貴女は帝国の代表者、紛う事なき征夷大將軍なので… その証拠にロンデニオンはアメリカのジョージ・エデン大統領を指名し、日本帝国からは殿下を指名してきました。貴女こそが日本の代表者なのです、殿下のお気持ちのままにお決め下さい。非才の身なれど我等臣下一同は殿下の御意思に従い、それに沿うように力を尽くす所存です」

未だ幼き主君に敬意をこめて深々と頭を垂れる榊。しかしその心中は、娘と変わらぬ年の少女に日本の命運を背負わせなければならぬ事への苦惱で満ちていた。

「ありがとうございます、榊… 苦勞を掛けますね…」

「身に余る御言葉です… 殿下、これより私の私見を述べさせて頂きますがあくまでも参考意見の1つです。殿下ご自身がお考えなさり、お決めになられますように」

「くどいぞ、榊殿！」

「よいのです月詠。榊、聞かせてください」

隣に控えていた女性、月詠の激昂を落ち着いた声で抑えて榊に話を即す悠陽。月詠の悠陽に対する忠誠心を知っている榊は彼女に軽く一礼して話を続けた。

「日本帝国を始めとする第四計画派はその殆どが国土の大半を失った国々が、アメリカの推奨するG弾使用によるBETA殲滅に反対して集まっております。対して第五計画派は国土の殆どを維持した比較的余裕のある国々… アメリカを支持する集まりとも言ってい

いでしよう。ご存知の通りG弾は使用後の重力障害により植物すらも育たない不毛の土地と化します。それゆえに国土奪還を夢見る国々は永久的に汚染されるG弾の使用には反対しておりましたが、第四計画派の主要国の内、EU、大東亜連合、ソビエト…国際社会では強い発言力を持つておりますが、国土と多くの国民、財産を失ったせいで国連の…アメリカの援助無しでは運営出来ないほどに疲弊しております。

残る第四計画派の主要国はカナダ、オーストラリア、そして我が国日本帝国。しかし我が国も朝鮮半島の情勢如何ではBETAとの戦いの最前線になるやもしれません。そうなれば国力が磨り減り、在日米軍をあてにする我が国も…そうなればもはや第四計画を進める事が困難になるでしょう。

事前に入手していた情報では、予備計画としてアメリカは採決するという話でしたが…直前でロンデニオンの存在を利用して正式計画として提案し、混乱に乗じて認めさせました。

第5が予備計画であつたなら、国連を通じての各国からの資金や資源提供に対し正式計画のこちらが優先権を持つておりましたが今となってはそれも失い、より発言権の強いアメリカの…第五計画への提供が優先されるでしょう。

しかし望みはあります。ロンデニオンが出した第五計画協力への条件、第五計画の第四計画への協力要請。これに望みを賭けるしかありません。たとえロンデニオンの真意が不明で第四から第五への技術協力を提供しなくてはならなくとも、第四計画と日本帝国はこれに賭けるしかないでしょう…」

榊の言葉に幼い顔を俯かせて思案に耽る悠陽。この小さく細い肩に並々ならぬ重責を乗せている事に齒噛みし、いたたまれない表情の榊と月詠。そして二人のそんな表情には気づかず顔を上げて悠陽は小さく可憐な唇を開いた。

「…それしかなさそうですね。気になるのはやはりロンデニオンの真意とアメリカがロンデニオンの条件を飲むかどうか…」

「一時間前であれば、アメリカもそのような条件は飲まなかったでしょう。しかし藤枝准将の発言、核融合炉保有をアメリカは無視できないでしょう。真実で在るならば是が非でもそれを欲する筈です。光学兵器とそれを搭載した宇宙戦艦、500万人が生活可能なスペースコロニー。まだ何か有るとは思っておりましたが、よもや核融合炉とは驚きました。その技術が世界に公表されれば確実に世界の流れが変わります。仮にアメリカがこの提案を蹴ったとしても我が国がロンデニオンからの協力を得られれば、第四計画も巻き返せる可能性が出てきます。ロンデニオンの真意に関しては我々も掴みかねておりますが、故に今回の会談で殿下ご自身の目で彼の者を御見極め下さいませ。その結果に出された殿下の御意思に我等は従う所存です。どうか殿下の御意思のままに…」

頭を垂れた榊の言葉に、幼き顔に決意を滲ませて悠陽はしっかりと頷いた。

二つの国の重要人物達が一時間という短い時間に追われ対策を練るなか提議人のシンジはと言うと、行政府をさっさと抜け出しコロニー外壁を走る高速電車に乗り込みファクトリーへと訪れていた。

外の事態など知った事かと整備に没頭する整備兵達に軽く挨拶をして、幾つものセキュリティゲートを抜け辿り着いたのは天井までの高さが30m以上はありそうな巨大な空間だった。

コロニー外へ出るルートもあるこの空間の中央に歩み寄ったシンジは顔を上げて部屋の主へと挨拶をする。

「よっ！ 調子はどう？」

『ノープロブレム。…それより君は、もう少しその場当たりの対応はどうかならないのかい？ 見ていると危なっかしくてしょうがないよ』

シンジが顔を上げた先には一機の白いMSが片ひざを着いた姿勢で鎮座して黄色の双眼を点滅させて彼を見下ろしている。

「向いてないんだよ。ゼファー（ZEPHYR）が代わってよ、君のほうが頭が良いんだからさ？」

『私が出て行けば余計に話が混乱する事になる。不用意に私は出ない方がいい。それにシンジがこのコロニーの管理者で代表者だ、私はただコロニーの維持管理をするだけのサポート役だ』

無数のケーブルに繋がれたゼファアと呼ばれる存在は、白を基調に青、赤で彩られたトリコロールカラーのRX78-2ガンダムによく似た姿ではあるが、細部に違いがあるのが見て取れる。

「ロンデニオン最強存在が何言ってるんだか。…けどいいよ、ゼファアを人同士のゴタゴタに巻き込みたくないから」

『優しいな君は』

「優しいというのは男には褒め言葉にならないとAIに記憶してて」

ゼファアはシンジの言葉にコクンと頭部を動かすと通信システムを立ち上げて、コロニーから衛星へ、衛星から地上へと深く潜り始める。

数多の嚴重なプロテクトを破り、目的の場所に辿り着いてルートを繋ぎ何時でも相手にコールを送れる状態にする。

『何時でも通信を繋げられるよ』

「ありがとう。相変わらず見事なお手並みで… ねえゼファア、俺は… いや、何でもない」

『君は君の道を行けばいい。我々に出来るのはそれだけ、あとは後世の話だ…』

言い淀むシンジに、機械音声で優しくゼファアはそう囁いた。

18ター目（前書き）

やあ皆さん、お元気ですか？

ここで改めて確認です。

此処まで読んで主人公の性格や、行動にイライラしたりストレス溜めている方は、精神衛生上大変よろしくないと思いますので読むのを止めるのを慎んでお勧め致します。

何分にも作者は未熟な為に、この後の展開を考えると変更するのは無理なものですから。

暇潰しや気分転換に読んでストレスを溜めるのもなんですし…

此処が阻止限界地点です。

ストレスを溜めてる方は此処で引き返す事を再度お勧めします。

こんな作品に無理に付き合っ必要は無いですよ？

18ター目

「ハローこんにちは。お忙しい所を失礼いたします。こちらはロンデニオン管理者のフジエダ准将であります。アメリカ合衆国大統領ジョージ・エデン閣下と日本帝国の征夷大將軍 煌武院 悠陽殿下は居られますか？ 居られませんでしたら後日、月の影から連絡し直します。それではまた後日： えっ？ 月の影からは通信が通らない？…」

「…待ちたまえ」

「お待ちゆっ！？ …下さい…」

日本とアメリカのホットラインに本当に割り込んで来て、とても国家元首に話し掛ける態度ではない事にダブルショックを受けた二人だが、そこは流石は国を担う者。直ぐに気を取り直して通話ボタンを押して、モニター付きの通信機を起動させた。

落ち着き払ったエデン大統領とは对象的に、征夷大將軍の悠陽は初めて自分に任された大任に勢い込んで、緊張と焦りで言葉を噛んでしまった。

モニターに真っ赤な顔を映す若干14才の悠陽を、敢えてスルーする事で大人の優しさを魅せるエデン大統領とシンジ。

悠陽側のモニターの向こうでは警護の月詠がオロオロと、モニターに映らないように同席した榊は居たたまれなくなっていた。

「…あう…」

かーわーいーいー！

赤い顔を俯かせて言葉を漏らす悠陽に、それを見た一同は心を一つにした。

余談だが、この映像をシンジと共に見ていたゼファアのAIに初めて可愛い、愛でるといった感情らしきものが芽生え、この時の映像を自身の記憶領域に永久保存したとか。

「…………あゝ、ごきげんようジェネラル悠陽、フジエダ准将。　こうやって話せる事を嬉しく思うよ」

「…ごきげんようエデン大統領、藤枝准将。　エデン大統領とは昨年の征夷大將軍任官の儀以来でしたか。　その節は御参列頂き有難うございました」

先程の事は無かった事にして話を進めたのは最年長者のエデン大統領。　悠陽も気を取り直して、先ずは当たり前障りのない挨拶と会話から入る。

「ははっ、日本とアメリカは善き友人にして隣人。その日本の代表者就任式なのですから参加するのは当然の事、願わくは両国の友好が未長く続いて欲しいものですなジェネラル悠陽？」

「はい。本当に未長く善き関係が続く事を願います」

祖父と孫娘ほどの年の離れた二人の国家元首が表向きは笑顔で談笑しているのに、裏では緊張感漂う状況に参加するべきかどうかシンジは迷ったが、どう考えても土俵が違う気がしてそのまま自分の土俵に乗ったまま行動に出た。

「ご歓談中に失礼しますお二方。早速ですが本題に入りたいのですが？」

シンジの言葉にモニターに映るエデンと悠陽の目が細くなる。

「わかった…ジェネラル悠陽？」

「私もよろしいです」

「では… お聞きお呼びでしょうがこの度の第五計画への協力の件は外交官殿に申し上げた通り、第五計画派の第四計画への協力が条件です。なお第四計画派へも第五計画の移民船建造への技術協力をお願いしたいのですが…？ もし、両計画派がこちらの提案を受け入れて下さるならこちらが保有している核融合炉、その関連技術を各国に提供する準備があります。なお、こちらの提案が受け入れられなくとも、前もってお約束していた宇宙戦艦は核融合炉ごと提供いたしますので」

「ふむ、随分と自信が有るようだ。我が国が核融合技術を解析できないという確信があるのかね？」

試すような表情でシンジに問うエデンは深い青の瞳を細めながら見詰めてくる。

対して問われたシンジは、エデン大統領のプレッシャーをどこ吹く風と開き直った表情で癖のある黒髪を撫で付けて気負う事無く答える。

「多分無理だと思います。そちらには無い物理学で出来たシロモノですから……出来るとしても基礎理論無しではどれ程の時間を費やすか……ばらすなら自己責任でどうぞ？」

「……止めておこう。ものがものだけに危険すぎる。しかし、仮に核融合炉保持が事実だとしても君の出した提案を通すのは難しいぞ？」

「難しいという事は不可能ではないのですね？ エデン大統領、難しいのを承知でお願いしたいのです。このまま両計画が意地を張り続ければ、計画成就の前に共倒れとも為りかねません。それは不本意でしょう？ 両計画が協力しあえば4年程で実行可能になるとこちらは予測しているのです。ならば共倒れの危険を避ける為にも……」

「言いたい事は分かる。しかし、軍のG弾推進派が強く反対するだろうね。確かに核融合技術は魅力的だ。移民派閥と民間企業はその技術を手に入れられるならばとりあえずは納得するかもしれないが、軍はG弾があればBETAに勝てると直ぐにでも撃ちたがっ

ている…」

「軍は勝てると思ったがっているのでしょうか？ 妄信と言ってもいい。ユーラシアでの人類の敗走と、カナダでの降下ユニット迎撃で頼みの核ミサイルを大量につき込んでようやく仕留めた事による核兵器への不信。BETAの恐怖に耐えられないから直ぐにでも使って実証して安心したいのかな？ BETAが見せた航空兵器への対応能力とてG弾には… とか？

アメリカ軍は優秀だ。BETAの対応能力の脅威は十分に分かっている筈、だからこそBETAがアメリカ本土に辿り着く前にG弾の有効性に確証を得たい。けど無効化されたら… 怖い、恐怖に耐えられない今直ぐに撃ちたい試したい。G弾なら大丈夫、大丈夫な筈…

政府や企業も生産力の限界を超えて国民を飢えさせる前に早く決着を付けたい。しかし大統領は勝てると思っておられるのですか？ よしんば勝ったとして、その後の人類に平穏が訪れると？ 違うでしょう、YF22がいい証拠だ」

「手厳しいな… G弾を使い地球上でBETAに勝つても、その後に来るのは平穏ではなく人類同士の汚染されていない土地を巡った戦いになる可能性は高い… そして地球上のBETAが居なくなっても、BETAは再び飛来する。人と人、そして再び飛来したBETAとの三つ巴となった時にその先にあるのは…」

「そこまで分かっておられても止められないのですか、エデン大統領…」

「無理だな… 彼らにもプライドがあるし、BETAに対する恐怖

もある。 ジェネラル悠陽、お若い貴女にはまだお分かりにならないだろうが、特にユーラシアに派遣されて戦った将官が多くG弾に傾倒している。 それほどなのだよ、BETAの脅威とは…」

もの憂う悠陽の目に映るエデン大統領の疲れきった表情は、未だ対峙した事のないBETAの凄まじさを幼い彼女に感じさせた。

「ようは軍部を黙らせるモノが有ればいいんですね？」

「並大抵のモノでは納得しないぞ、フジエダ准将」

「大統領も人が悪いですね？ そうやって此方のカードを捲らせて行くんですから… まあ、別にいいんですけどね？ ご期待に答えてカードをもう一枚見せましょう。 ゼファー、V作戦のファイルをお二方に送って。 それと稼動試験の映像も用意しといて？」

ゼファーが予め整理し用意しておいたデータをエデンと悠陽の端末に送ると、内容を読んだ二人は驚愕した。

「V作戦… ロンデニオンが密かに進めていた計画の一つです」

「…フジエダ准将。 私が言うのもなんだが、君の方が人が悪いと思うのだが？」

「ロンデニオンは本当にこの計画を…？」

悠陽の言葉に答える為にシンジが「映像を」とゼファーに合図すると、モニター内にサブウィンドウが開き、ロンデニオンから送られた映像が流れ始める。

シミュレーター空間内で、キャタピラタンクに人型の上半身を付けた戦車モドキが両肩に備え付けた長大なキャノン砲でBETA集団を砲撃するシーンや、赤い色のキャノン付きの戦術機が両肩のキャノンで突撃級の外殻を正面から粉碎しているシーンが流れ、三日月の機体が映し出され始める。

灰色と黒のツートンに所々に赤が入ったカラーリング。V字型のブレードアンテナを額に付け、デュアルアイの瞳を持つ特徴的な顔の頭部を持った機体は、右手に持つライフルをBETAに向けてとピンク色の閃光を撃ち放ち、斜線上に密集して居たBETAを種類の区別無く焼き貫き1キロ以上に渡って撃ち抜いた。しかもそれを短い間隔で連射し、次のシーンでは強固な前腕を持つ要撃級をその前腕ごとピンク色の光の剣で切り裂き、周囲に居た他の要撃級の鋭い追撃を驚くべき運動性能で避けつつ返す刀で切り捨てていく。

黒い機体が要撃級を切り捨てていく映像を、悠陽の傍らで見ている月詠は戦慄を覚えた。戦術機による格闘戦を好む帝国軍にあつて、一際その傾向が強いこのえ斯衛に属する彼女だからこそ黒い機体の驚くべき運動性と手にした光剣の威力の凄まじさが分かったのだ。

まず戦術機に比べて流麗さに欠ける無骨な姿に反して動きに淀みが無く、人体と同じように機体の各部分がスムーズに動き行動と行動の間に隙が無い。

戦術機で同じ動きをトレースすれば行動と行動の間に隙ができ、動作が終了するまでに倍以上の時間が掛かってしまう。いや、それどころか戦術機で再現出来るか分からないモーションまであの機体

は易々とこなしている。

正に人の動きだ。これに比べたら戦術機の動きなど操り人形のよ
うなものだ。

次に要撃級の前腕を易々と切り裂いた光剣。戦術機で同じことを
やろうとすれば、切れ味の落ちていないスーパーカーボン製の長刀
を用いて重心を乗せた渾身の一撃を与えねばならず、斯衛ならば両
断は出来るであろうがどうしても次の行動に大きな隙を作ってしま
う。

それなのに黒い機体は軽やかに光剣を振るだけで容易く両断し、そ
の運動性と相まって隙の無い恐るべき格闘戦能力を披露している。

惜しむらくはこの映像がシミュレーターの仮想映像だという事だろ
う。そう思った矢先に場面が替わり、星の海をバツクに飛翔する
黒い機体が…

「ご覧のとおり、実機も既に完成しております。最初に出てきた
タンクタイプの機体がRX75 ガンタンク。こちらは既に整備
班に一部資料をお渡ししておりますからご存知かもしれませんが、
資料では伏せてあった動力源は核融合炉です。主に長距離支援を
目的とした機体で、戦車兵の方々にご意見を聞いて自走砲に近い運
用法を検討しております。」

次に出ていた両肩にキャノンが付いた赤い機体、RX77 ガンキ

ヤノン。両肩の武装を240mmキャノンかスプレーミサイルランチャーに選択可能で、前線の近接支援を目的とした中距離支援機体です。こちらはまだ具体的な運用法を検討中ですので衛士の方のご意見を聞きたいところです。

そして最後に出てきた機体…RX78-1ガンダム。現在の持てる技術を全て注ぎ込んだコスト度外視で白兵戦を主体に開発された機体で、高い運動性能とご覧のとおり戦艦に搭載されていたメガ粒子砲…、そちらでいう荷電粒子砲に近い物を戦術機サイズの機体に携行出来るようにしたビームライフルと、メガ粒子をフィールド固定した白兵戦用のビームサーベルを装備しております。

ビームライフルにビームサーベル、どちらも現在確認されているBETAの外殻を破壊できる威力を持っております。

ちなみに我々はこの機体群を戦術機ではなく、モビルスーツMSと呼んでおります。もちろんどの機体も核融合炉を搭載しております。

あとは…映像には出ませんでした。これらのMSを運用する母艦としてペガサス級艦と合わせた開発計画が、V作戦の前半と言ったところでしょうか」

19ター目

通信で繋がれた三つの異なる場所は異様な静けさに包まれていた…

ロンデニオンから明かされた情報に言葉を発する事が出来ずに、皆が一様に喉の渴きを覚えた。エデン大統領もその一人で、襟元に指を入れて少し緩めていると目の前に水が入ったコップが差し出され、差し出した秘書官に「ありがとうございます」と礼を言ってそれを飲み干す事であろうやく一息ついた。

この静けさを生み出した暴露人のシンジはというと何時の間にか用意した緑茶を湯飲みで啜りつつ、ポケットから煎餅を一枚取り出すと、手のひらの上で軽く叩いて割ると一欠けら口に放り込んでいる。

「…」

「なんですか、エデン大統領？ お煎餅が欲しいんですか？ クッキーのように甘くはないですよ？ それでもいいのなら、今度お煎餅送りますね？」

「あの藤枝准将…」

「なんですか殿下？ あつ、殿下もお煎餅が欲しいんですか？ じゃあエデン大統領と一緒に送っておきますね？」

「あつ有難うございます… いえ、違うのです」

「えっ？ クッキーの方が良いですか？ …冗談はさて置いて、なんでしょうか殿下？」

危うくシンジのペースに飲まれそうになった悠陽であったが、なんと踏みとどまり会談を続ける。

「藤枝准将。 貴方の持つモノが素晴らしいのは分かります。 では、それらを提供した事に対して貴方は…ロンデニオンは何を望むのですか？」

「？ ……両計画が協力体制を取って頂く事ですが…？ あとは核融合炉やMS等を世界に広める為の協力を…」

「そうではなく、もっと実質的な見返りです。 金銭や物資、人員を要求等…あなた方の益の事です」

「あゝなるほど…金銭や物資は今のところは不足してませんから、ほら自給自足出来ますし。 お金も滞在する人たちが落としていつてくれる分で十分です、使い道もないですしね。 人員は両国からお借りできますし、下手にロンデニオンに縛られると本国との軋轢が出るでしょうから現状で十分です」

「それだけですか？ 地位は？ 名誉は？」

「ロンデニオン管理者で三つの組織の准将でお腹一杯です」

シンジの言葉に納得出来ないのか、美しい愁眉を僅かに歪ませて悠陽は更に言い募る。

「それでは貴方は善意で行っている…!?」

「それも違います。 あゝあのですね？ ……ただBETAを放つて

置いたら大勢の人が亡くなるでしょ？ そしたら隣に誰も居なくて寂しいと言っか… 何言ってるんでしょね俺？」

語気が強くなった悠陽に、敬語も忘れて自分の言いたい事を表現しようとするが上手くいかず、頭を掻きながら「うんうん」唸るシンジ。

その二人の様子を呆れた顔で見っていたエデン大統領は何故か可笑しくなって笑い出してしまふ。

「はははははっ、くくっ！ しっ失礼。 フジエダ准将、君はウィルソン外交官が言った通り交渉甲斐の無い人物だ。 つくく、ジエナル悠陽。 彼は我々政治家とは違う。 可能性は持っているかもしれないが良くも悪くも俗人なのだよ、それもとびきりの力と底の知れないバックを持った。 だからこそ彼は我々には理解し難い存在なのだよ。 なんて彼を交渉役として任命したのか彼の上司に聞いてみたいものだ」

「そこに丁度居たからでしょうね。 俗人ですから政治交渉とか苦手なんですよ。 だからこそ、地球を二分する計画のそれぞれの筆頭たる両国に協力して欲しいですし、その為には両国には協力体制を取って頂きたいんですよBETAを倒すために。 BETAと戦う理由は、戦うしか道がない訳で… 自分が死ぬのは嫌ですが周りの人が死んでいって寂しくなるのも同じくらいに嫌なんですよ。 金銭なんかを求めないのは、今のところ必要としてないだけで必要になったら कोरोニー で作った物売ろうかなんて考えてますのでその時はよろしくお願いします。 これでは駄目でしょうか殿下…？」

「…理解…出来かねます…」

どこか寂しげな笑みを浮かべるシンジの瞳に、空虚さを感じる悠陽。何故かそれが自分に重なってしまい、幼き頃に離れてしまった大切な妹の事を思い出してしまう。

(冥夜…)

生き別れの妹を思い瞳を翳らせる悠陽… そこへ…

(いつか会える時が来ますよ…)

「えっ…?」

耳ではなく頭に響いたような声に俯き勝ちだった顔を上げると、モニターには先程までの笑みの代わりに労わるような穏やかな笑みを湛えたシンジの姿が目に入った。

「どうかなさいましたか、殿下?」

「っ! なっ何でもありません! …我が帝国はロンデニオンの申し出を受けようと思いません。宜しいか、藤枝准将?」(悪い感じはしない… 寧ろ安心を感じるのはなぜ?)

「有難うございます殿下。 …アメリカはどうなされますか?」

話を振られたエデン大統領は笑みを納めると、余裕のある表情を見せながら口を開く。

「そうだな… 個人的には受け入れてもいいと私は思っている。ロンドンニオンが保有するモノは確かに魅力的だし、それを餌にすれば多くの支持を受けられるだろう。しかし、軍を早急に納得させるには後一押し欲しいところだな」

「…それでは一ヶ月後に61式やMS等のお披露目はいかがでしょう？ 場所は日本の…富士の演習場で」

「なるほどな。 実機を見せ付けつつ、日本帝国のお膝元でやることで日本の一人勝ちに対する不安を煽るか… お願いできますかな、ジェネラル悠陽？」

シンジとエデン大統領に見つめられた少女は、決意を宿した瞳で強く確りと頷き返した。

それを確認すると、次にエデンはシンジへと視線を向け…

「准将、一つ聞きたいのだが… もし我々が断ったら宣言通りに隠れるつもりだったのかね？」

「一先ず身を隠して様子を見るつもりでした」

「ふむ… では我々がロンドンニオンを制圧しようとしたら？」

「エデン大統領、それは…」

エデンの問い掛けに思わず悠陽も口を挟む。 ロンドンニオンの制圧

： それは日本帝国内でも出た意見だ。　しかし、それを悠陽を始めとする要人達が否定する。

悠陽と少数の良識者達は人としての良心から、政治家や軍人達は制圧はともかくその後の維持が不可能であろうとの現実的な問題からロンデニオン制圧を反対した。

いつ帝国本土にBETAの魔の手が迫るか分からない状況で、はるか宇宙の空に浮かぶロンデニオンコロニーにまで手を伸ばす為の余力が無かったからだ。

だからこそ友好関係を築き、技術面を始めとした助力を請う。それが日本帝国の外交方針だった。

しかしアメリカは違う。

各地に兵を派遣してはいるが、未だに無傷で広大な国土を持つアメリカならば制圧とその後の維持も可能な国力を持つ。

緊迫した雰囲気になるかと思われたが、当事者のシンジはそんなものに構う事無くのたまう。

「コロニーを放棄して逃げます」

彼の言葉に啞然とする二人。　仮にもコロニーを持つ勢力の代表者とは思えない言葉だったからだ。

「…？ お二方とも幾つか勘違いしてませんか？ 私達はBETAと戦いに来たわけであって、人類と戦いに来た訳ではありません。

コロニーを放棄してアメリカが制圧しても多かれ少なかれ地球の役に立つ訳ですし、それならそれで構わないんですよ。コロニーに居るのは私と八口達だけですし、地球は助力無しで自力の戦いを望むのであれば、その意思を尊重して以後、私たちはこの場を去って手を出さずに見守る事にします。地球への対応は私に全て任されておりますので、これがロンデニオンの総意になりますね」

「…そうになると我々は僅かなテクノロジーを得てそれ以上のモノを得る機会を失う、か。しかしその物言いだと思えば戦えるとも聞こえるが？」

鋭い目をしたエデンの言葉に苦笑するシンジ。 対照的な二人の視線が交差して一時の静寂を作る。

「…その気は無いですよ」

「なぜ戦わない？ 国土を戦わずして手放して臆病者の誹りを受けてもいいのかね？」

「だから勘違いしてますって、今のロンデニオンは地球の勢力圏に間借りしている租借地の浮きドックみたいなもんですよ。コロニーだって上から支給されて自由にして良いって言われていますが、私のポケットには大きすぎます。移住を受け入れているのだから、私一人の玩具にするよりも地球の人に住んで貰った方が後々の為に良いと思ったからです。何れはロンデニオンを起点に、この世界の人間がコロニーを作るようになればコロニー移住という選択肢が人類に出来る可能性も… そちら流に言えば、第六計画と言った

所でしょうか？」

「第六計画ですか……？」

我に返った悠陽が彼の言葉に、第六計画という言葉に反応して口を挟む。

悠陽に尋ねられ、第六計画と口の中で転がしながら何故か妙に心へと響く言葉に「それもありかも？」と呟く。

「言葉のあやですよ殿下。 ロンデニオンだけでは出来ませんし……」

そう言いながらもこの世界がコロニー建設に沸くのを想像し、少しだけこの世界に来て初めて楽しいと思うシンジであった。

「……という訳で一カ月後には皆さんに地球と一緒に降りてもらいます」

ロンデニオン行政府内の会議室に集められた戦艦のクルーと戦車兵、整備兵達は、「何が、という訳なんだ？」と内心思いつつも黙ってシンジの言葉に耳を傾けた。

「簡単に言えばお披露目会です。　ロンデニオンで3ヶ月間培ったモノを保護しや…じゃなかった。　上層部の方々に見て貰いましょう。　場所は日本帝国の富士演習場になります」と思います」

「准将。宜しいでしょうか？」

シンジの言葉に疑問を持ったイーストウッド艦長が拳手で発言を求めた。

「どうぞ」

「ありがとうございます。　お披露目と申されましたが、我々は宇宙戦艦のクルーですから地上で出来ることは無いと思われませんが？」

日米のクルー達は同じ疑問を持って二人のやり取りを見守っている。その視線に答えてシンジは自分の席に備えられた端末を操作すると、背後の巨大ディスプレイを起動させてある画像を映し出した。

室内に居た一部の整備兵を除く者たちは、それが何なのか分からずに首を傾げた。映し出されたそれは強いて言えば木馬とも言えない形をしている。

前部に突出した二本の前足のようなもの、中央に聳える馬の頭部のような建造物にその横に広がる翼のようなバインダー。　後部にも

突き出した二本の後ろ足のようなものがあり、そこに目を留めたイーストウッド艦長は確信が持てないながらも言葉を発した。

「…後ろに付いたものがエンジンブロックなら… 准将、もしかしてこれは宇宙船ですか？」

言っでは見たものの、イーストウッド艦長は「まさかな…」と思っていた。しかし、そう考えると中央に聳える物が艦橋に見え、前足の部分が甲板にバインダーが放熱板と見えなくもない。

「正解です」

あっさりと肯定されてイーストウッド艦長は当惑した。自分で言っておいてなんだが、とても艦船とは思えない形をしていたからだ。そんな彼を無視してシンジは話を続ける。

「ペガサス級 強襲揚陸艦一番艦 ペガサス。 機動兵器・MSの運用を重視して開発された艦フネです。 機動兵器射出用のカタパルトデッキを二基装備して、強力な52cm砲とメガ粒子連装砲2基の主砲に多数の機銃やランチャーを装備した強力な打撃力に、単独での大気圏離脱と突入が可能なエンジン出力。 さらにミノフスキーラフトシステムによる大気圏内での浮遊航行を可能にした新型艦です」

告げられた話の内容に室内は騒然となり、次々に質問が飛び交う。

MSとは？ メガ粒子砲とは？ 本当に単独での大気圏離脱と突入が可能なのか？ 大気圏内での浮遊を可能にしたミノフスキークラフトシステムとは？

これらの質問にシンジは出来る限り丁寧に答えていき、先に情報開示されて既にMSやペガサスの整備に携わっていた一部の整備兵も質問のフォローに廻り、ようやく場が収まったのを見計らいシンジは改めて宣言する。

「我々はクルーの操艦するペガサスにて地球に降り、今まで培ってきたものを見せつけてやりましょう！ 61式担当の皆さん、期待しています！」

「聞いておきますが准将？ 我々がMSってえのの晴れ舞台を食っちゃっても怒らないで下さいよ？」

シンジの言葉に不適に不敬に笑って見せる宇喜多に「期待しています！」と力強く返すシンジであった。

20ターンの(前書き)

書き続けよう…

そう思った。

20ター

「ふう…」

静かな室内に溜め息が零れた。

畳敷きの上に赤い絨毯が敷かれ、その上に黒檀の重厚な机が有り。

その椅子には、重厚な机とは不釣り合いな少女が座っている。

ポニーテイルのように髪を高く結び、白い衣に薄い紫の上衣を羽織った少女は、机に積み上げられた書類に熱心に目を通しては署名していたが疲れが出てきたようだ。

日米ロンの三者会談から2週間余りが過ぎ、少女：日本帝国征夷大將軍 煌武院 悠陽はいつも以上の政務に追われていた。

積み上げられた書類の殆どがロンデニオンのお披露目に関するもので、演習場の使用許可やロンデニオンの滞在日程、アメリカ力を始めとした賓客達の席順などが担当部署から次々に上がって来ており。

悠陽はその1つ1つに目を通しては問題が無ければサインし、問題が有れば担当部署の責任者に連絡を取って修正していった。

「失礼いたします」

そう言つて疲れが見え始めた悠陽の前に差し出されたのは、見事な造りの湯のみに入った香しい緑茶であった。

本来であれば侍女が行う筈の役目を進んで行った警護役の月詠に礼を言つて口を付ける悠陽であったが、一緒に呈された茶菓子煎餅であつた事に気づく。

「お煎餅…」

「はっ。先日、ロンデニオンからH L Vなるものが降下してきまして、積んでいた天然物の食料品が試供品と称して帝国に降ろされました。その中に殿下への献上品としてこの茶菓子と、今お飲みになっている茶の葉が送られてきました」

「そう… 宇宙で作られたお茶なの… 香りが良くて美味しいお茶…」

味を確かめながら一口づつお茶を啜り、次に湯飲みを置いて懐から和紙を取り出して八口の顔を模して海苔が付いた煎餅を和紙で挟みながら手に取る。

見た目は至つて普通の煎餅。醤油と米の香ばしい香りに鼻をくすぐられながら悠陽は小さな口で煎餅を齧る。

「美味しい…」

「はい。私も毒見で頂きましたが、中々のものでした」

さらりと物騒な事を口にする月詠に、少しだけ肩を落とし再び茶を啜る悠陽。

暖かな茶の味は、まるで悠陽を慰めるように優しく美味しかった…

「…これで金持ち達の意見も纏まったな」

ホワイトハウスの大統領執務室にてエデン大統領は呼んでいた報告書から顔を上げると正面に立つ秘書官にそう言った。

秘書官は眼鏡の奥の理知的な瞳を僅かに緩めて大統領に答える。

「はい。議会内と大手企業、資産家の過半数以上の意見はメラニー・カーマイン氏の口添えもあつて確保出来ました。軍部の方も宇宙軍司令が説得に回って頂いておりますので、今の所は予想よりも反発は少ないようです」

「そうか…」

大統領は背もたれに体を預け椅子を回すと、夕日が沈みかけた外へと視線を向けた。

夕日に照らされた大統領の姿を目を細めながら見ていた秘書官が緩やかな空気に押されてか、抱いていた疑問を大統領に投げかける。

「しかし宜しいのですか？　このような事を…」

「…君は反対かね？」

疑問に質問を返された秘書官は慌てて答える。

「いえ、そのような事はありません。　ただ…」

「いいではないか。　合衆国が損をする訳ではない。　むしろロンデニオンからもたらされる技術は計り知れない富をもたらし、新技術に置いても合衆国は一步先んじる事が出来る。　第五計画も核融合炉を始めとした新技術を取り入れることにより、より完成度の高い移民船を造ることが出来る。　移民船建造にHLVとコロニーを使えば予算も資材も減らすことが出来るし、下手に強権を発動して第五計画を進めても軍部の本格的G弾使用を早めるだけだ。　彼らは下手をすると移民船の完成を待たずに始めてしまう可能性もある。　ならば、ロンデニオンの提案を受けても損はあるまい？」

大統領の言葉に納得しながらもどこか釈然としない秘書官。　エデオンが大統領就任する以前から秘書を務める彼はそれだけではないように思えていた。

具体的には言えないが、以前のどこか疲れきり諦観染みた様子とは違うように感じられたのだ。

「コーヒーを頼めるかな？　それとフジエダが送ってきたオセンベイも一緒に」

しかしそれが悪いことのように感じられない秘書官はいつもの表情に戻ると、一礼して大統領のささやかなオーダーに答える。

「閣下。聞くところではコーヒーにオセンベイは合わないとの事。グリーンティーになされては？」

「おらおら！　しっかり走らせやがれー！！」

ロンデニオンコロニー、ファクトリー施設にある演習場内で戦車の走行音に負けない大きさの怒声が響き渡る。

地球でのお披露目まで2週間を切り、後発派遣の戦車兵達を宇喜田大尉とカービンソン大尉を始めとする61式戦車兵達が扱き上げていた。

「元氣いっぱいだね」

扱かれる者の気持ち無視するように暢気な声でシンジはそう呟くと、

土煙が舞う演習場の脇を抜けファクトリー内へ歩いていく。

ファクトリー内の一角にある全自動CAD（設計プログラム）が備えられた設計室に立ち寄ると細かな改修要望データを打ち込んでいき、全自動CADに設計を開始させる。

以前、ゼファーにMSで戦術機の武装を使えるように出来ないかと聞いたところ、この部屋と全自動CADの存在を教えられていたのだ。

全自動CADの事を知っていたシンジは、それが使えることが分かるとその場で小躍りしたという。

全自動CADとは地球連邦軍が使用していたプログラムで、元となる基礎データがあれば条件に合わせて改修設計してくれる超絶プログラムであった。

どのくらい凄いかというと、ザクのデータを元に条件を設定してガンダムの設計を半年程で完成させてしまう程の性能なのだ。

このプログラムが作り出した設計データにより、連邦は極短期間の内にガンダムやジムの様々な派生機を作り出すことが出来たのである。

無論万能ではなく、元となる基礎データ必須は勿論のこと作り出すことの出来る技術力の限界はある。エネルギーCAP技術が無ければビームライフルは造れないし、波動エンジンを作れといっても基礎データや理論が入力されていないから設計は無理だ。

逆に言えば実績可能な技術力とデータがあればその範囲内にあるものならば、何でも設計してしまうのだ。故にシンジは帝国と合衆国経由で手に入れた戦術機の手持ち武装のデータと火器官制データを入力し、それを使用できる用にMSの改修を行ったのだ。

この結果、MSは既存の装備の他に戦術機の一部武装も使えるように成り、兵器の改修や改造も出来るようになる。出来上がった設計データはファクトリーに登録され、ラインを使って生産出来るようになったのは有り難いとシンジは感謝した。

幾つかの兵器改修案の進み具合を確認して設計室を出たシンジが次に向かったのは、少し離れた場所に位置する第二港。ペガサス級等が係留されている場所である。

港内で無重力の中を移動用レールに掴まりながら進み、立ち入り許可証を持ったクルーや整備兵と時折すれ違い、挨拶を交わしながら辿り着くのは強襲揚陸艦ペガサスが係留されているドックだった。

ペガサスの前では大量のコンテナやMSが並べられており、クリップを持った整備兵と八口が協力して艦への積み込み作業が行われている。

その中に八口を従えたツナギにサングラス姿のおやっさんの姿を見

つけたシンジは、床を軽くけり近づいていく。

『ハロ！ シンジ、元気か？』

「よう、准将。何か用か？」

「こんにちわ。積み込み順調ですか？」

軽く挨拶をし運ばれていく荷物を見やると、ちょうどガンダムが一機、トレーラーに乗せられてペガサスに搬入されていた。

『順調！ 順調！』

「今のところは問題はねえな。持っていくガンダムはRX78の1号機と2号機でいいんだな？」

「ええ。現地では見栄えする2号機を使いますから1号機…プロトは予備機扱いでお願いします。あつ、あと“あの”ソードフィッシュも忘れずに」

「79は？」

「今回は止めておきます。61式を積まなきゃならないのでスペースに余裕があんまり無いんですよ。無理すれば積めるかもしれませんがペガサスの処女航海ですからね。不安要素は出来る限り減らしときたいんで」

「了解した。おい！！ MSは左舷デッキに纏めとけって言うと

「いただろつがー!」

おやっさんの怒声に「すいませーん」と返す整備兵達。ズンズンと整備兵の下へ歩き去るおやっさんを見送って、シンジは次にブリッジへと向かった。

「大気圏突入シーケンス第三段階へ移行!」

「艦外温度許容範囲内。各ブロック異常なし!」

「ミノフスキークラフトシステム起動用意…」

戦闘艦にしてはやけに広い空間のブリッジに、大気圏突入の為の手順に追われるクルー達の声が響く。

無論、実際に突入している訳ではなく。コンピューターに入力されている突入の為の手順を擬似的に行ってシミュレートしているのだ。

「熱核ロケットから熱核ジェットへ切り換える時のエンジン出力に注意しろ！」

広いブリッジ中央に位置する艦長席に座って、ペガサスの臨時艦長に就任した坂田がクルーに注意を促す。

今回の御披露目において、ペガサスに日米のクルーを半数づつ乗艦させて運用すると言う異例の処置をシンジがしたところ。イーストウッド艦長が留守役を買って出て、坂田を艦長に推薦してきたのだ。

そしてバランスを取るために、副長には自身の副官でもあるクリスの推薦もしてきた。

あまりにもあつさりと言った艦長職を譲ったイーストウッドに坂田は「それでいいのか？」と思わず尋ねたものだ。

何せロンデニオンの技術力の結晶とも言える新造艦。しかもペガサス級の一番艦、ネームシップ艦なのである。これの艦長に任じられて御披露目に出ると言う事は、かなりの名誉なのだ。

その辺を含んで尋ねたのだが、イーストウッドは坂田に近寄るとそつと耳打ちした。

「折角だから家族に会ってこい」と

その言葉に戸惑う坂田だったが、笑みを浮かべる友人の気遣いに胸中で感謝を陳べるとペガサス艦長の任を謹んで受けたのだった。

「…大気圏突入成功。ミノフスキークラフトシステム順調に稼動中。エンジンシステム切り替えに抛るトラブルは認められず。艦長？」

「よろしい。大気圏突入シミュレーション終了。各員はシミュレート結果の確認後に問題点の洗い出しを、後ほどレポートにして私に提出するように…」

艦長席の傍らに立つブロンドをアップにし眼鏡を掛けたクリスの言葉に坂田は頷くと、シユミレーションの終了を宣言して操作手順の問題点洗い出しを命じてとりあえず一息吐いた。

そんな彼を見てクリスは近くの端末から艦内のキッチンへと連絡を取ると、人数分のコーヒーを頼んでいる。

「ありがとう」

「いえ」

坂田とクリスを始めとし、帝国軍制服と米国軍制服を着た者たちがブリッジにて一緒に働く姿は異様であるのかもしれないが、友好的に接しあっている姿を見てシンジは好ましく思えた。

「お疲れ様です皆さん」

シンジの劳いの声にブリッジクルーは振り返ると、その場で立ち上がり敬礼しようとするが、「そのまま、そのまま」というシンジの言葉に軽く頭を下げるに留めた。

「准将。 どうされました？」

流石に坂田は席から立ち上がり敬礼し、用件を尋ね。 クリスはその場で敬礼した後に再び端末に近寄り、追加の飲み物を注文しているようだ。

「いえ、お披露目まで2週間を切ったので皆さんの様子見に」

「そうでしたか。 こちらの方は予定通りに訓練スケジュールは進んでおります。 3日後には予定通りに一度港を出て、コロニー近海で3日間の航海演習を行うつもりです」

『オマチドウ、オマチドウ』

会話の最中に現れたのは、キッチン担当の八口だった。 蓋付きストロー付きのカップをホルダーいっぱいに差し込んだ物を細い手で保持しながらフヨフヨと浮かぶ姿はどこか愛嬌があり、見るものの心を和ませる。

キッチンには担当の料理長が新しく入っており、それまで担当していたキッチンハロはその補佐に回ることで運営しているのです、艦内配達には艦内を熟知しているハロがよくお使いに出されている。

「ありがとう、ハロ」

『ドウイタシマシテ、クリス』

シミュレーション中には見せない微笑で礼を言うクリスにハロは近づくと、持っているホルダーを差し出した。

ホルダーに収まったコーヒー入りのカップをクルー達が礼を言いながら抜き取っていき、クリスがその内の二本を抜き取り、坂田とシンジに差し出す。

「准将、艦長。 どうぞ」

「ありがとう、アンダーソン大尉」 「すまんな大尉」

二人にカップを渡し、自分の分のカップをハロから受け取ると、クリスは配達を終えてブリッジを去るハロにもう一度礼を言った。

そのやり取りを見たシンジは心の中が温まるような気持ちを覚えて、自然と笑みが零れる。

「? …… 准将、何か?」

「いえ、仲が良いなと思ひまして」

「…あの子達は、みんな良い子ですから」

そう言つてクリスが見せた柔らかな母性を感じさせる笑みにシンジは少しだけ見とれてしまう。

それを横で見っていた坂田は、こんどイーストウッド艦長と飲むときにこの事を酒の肴にするかと内心で決めた。

それぞれがお披露目会に向けて、己が職務を果たして行く。

お披露目会まであと僅か…

地上まであと僅か…

21ター目

「進路クリアー。突入角再確認…クリアー！」

「各ブロック、問題無し！ブリッジ、防護シャッター下ろします！」

地球の重力に引かれ白い船体は徐々に沈みこみ、大気との摩擦で船体が赤みを帯びる。

ペガサスは天空から地上へと舞い降りようとしていた…

黒土の荒れた大地が殺風景な印象を持たせる富士の裾野の演習場は、仰々しい雰囲気にもまれていた。

何故ならば今この地には、軍の演習場に似つかわしくない人々が集っていたからだ。

今回のお披露目の主催者である煌武院 悠陽を始めとした日本帝国の政治と軍部の有力者に、アメリカ合衆国大統領 ジョージ・エデン他、アメリカの政界、軍の要人。果ては日米の大手企業に資産

家達まで参加しているのだから当然であろう。

そしてその中に抜け目なく紛れ込むフランスの外交官がいるのは少々場違いなのだが、煌武院 悠陽と直に交渉して許可を得ての事なので誰もその事には触れなかった。

この度のお披露目に対して精力的に政務をこなした悠陽に対する評価は上がり、これまで余りにも若い彼女に対する不振を持っていた政治家達は表にそれを現すことが少なくなり、お披露目が成功すれば彼女の影響力も強まる事から彼女に近い人々はその成功を心より願っていた。

この度のお披露目の情報を得たフランスが直接彼女との交渉を得たのも今後の展開に備えてのもので、諸外国からもその影響力の強まりを認められようとしている事は彼女の今後の活動においては追い風と成るかもしれない。

無論、他の諸外国もこのお披露目に正式に参加したかったのだが、表向きは日米共同運営のロンデニオンの新技術のお披露目という事で身内のみで行うと断られてしまった。

それで引き下がる各国でもなく、演習場外周には地球上の様々な陣営の諜報員が目を光らせ、更にそれを帝国の諜報員が監視するという状況になっている。

「失礼します。 航空宇宙軍より入電があり、ペガサスは大気圏突入に成功し太平洋側よりこちらへ……じつ、時速500kmのスピード

ドで向かっているとの事。あと5分ほどで到着の予定」

演習場内に急遽建てられた貴賓室にて悠陽やエデンを始めとする要人達に伝令を伝えるにきた兵士は、自分に電文を渡した上官が顔を引くつかせていた理由を悟った。

予めペガサスのスペックを知らされていた悠陽とエデンの側近以外の者たちもまた、告げられた内容に顔を引くつかせる。

宇宙空間ならともかく、大気圏内の重力下で巨大な戦艦が、あんな形をした戦艦がどうしてそんなスピードで飛んで移動できるのかとツッコミたい衝動に皆が駆られていた。

実はそんな集団の中で落ち着いた態度を見せる悠陽やエデン達も、微妙にコメカミの辺りをピクピクとさせて内心は同じ気持ちであった。

知らされてはいても現実として突きつけられて、「はいそうですか」と納得できる内容ではない。

「…ぶっ無事に来れそうだね、ジェネラル悠陽？」

「…そっそのようですね、エデン大統領？」

祖父と孫にも見えなくもない二人は、隣り合った席でそう呟いた…

一方そのころペガサスのブリッジ内では…

「じゅっ准将…無茶は言わないで下さい」

「カタログスペックではマッハで飛べますよ？」

「本艦はこれが処女航海なのです… 無茶はいけません」

「准将。 僭越ながら私わたくしもその意見には賛同しかねます…」

さらにトンでもない事になっていた。

ゼファーに留守を頼み、無事に大気圏突入を果たした後でシンジがさらりと口にした言葉がブリッジ内を恐怖の渦に叩き込んでいたのだ。

曰く、「音速で飛んでみましょう！」

ペガサス級の公式スペックでは、大気圏内での最高速度はマッハ1
2。

そう、マツハ12なのだ。

分かり易く言えば地球を4時間足らずで一周出来るスピード。

この空力を無視した様な形の艦がとても出せるスピードではないし、よしんば出せたとしても船体や中の乗員がとても無事では済まない。

さすがにマツハ12ものスピードはこのペガサスでも大気圏内では出せないが、このペガサスのカタログスペックではマツハ1〜2・5での音速巡航可能と明記されてはいる。しかし坂田艦長とクリス副長は必死になってシンジを止めた。

他のクルーも口にこそ出さないが、思いは一緒だった。

常識的に考えても、宇宙世紀の技術を持ってしても難しい速度なのだが、実は“この”ペガサス級ならば可能だった。

元がシンジの知識を元に開発されたものだから、音速飛行が可能なように作られている。流石にシンジもマツハ12で大気圏内を飛べると思っていなかったので、「精々がマツハ1〜2・5ぐらいであればよくね？」と言う感覚で作られていた。

一説には「これ大気圏外の間違いじゃね？」と言われるこの辺の公式設定の曖昧さが産んだ弊害ではあるが、それを理論的に無駄なく設計製作したのは高次元の御技だろう。

後に数多のペガサス級が作られるが、その艦長達は如何なる窮地に陥ろうとも大気圏突破以外で決してペガサス級を大気圏内で音速で飛ばす事はなかったという。

そして艦長と副長の必死の説得を受けたシンジはペガサスの音速巡航は取り下げた。

抜けるような青空にその姿が見え始めると演習場のそこかしこでざわめきが起り出す。

青空をバツクに翼を広げたような白い船体を浮かばせるペガサスは見る者に様々な感情を抱かせた。

驚愕、困惑、憧憬…

人々の感情の渦の中で、彼女もまた空を見上げて白い天馬を瞳に映し出す。

帝国軍部関係者に宛がわれた天幕の下。山吹色の装束を身に纏った長い黒髪の十台半ばの少女は端正な顔を上げ、天馬を見続ける。

このような時でなければ将来を期待させる美しい少女が目を細める姿に衆人の目は行くのだろうが、生憎とその場に居る者たちは空を飛ぶ天馬に魅せられていた。

いや、一人だけそんな彼女を見つめている人物が居た。

帝国軍の制服を来た40代半ば程の顔の左に大きな裂傷のある男。

制服の襟には、昇進したばかりなのか真新しい中佐の階級章を付けている。

質実剛健の言葉を思わせる厳格な顔つきを僅かに緩め、暖かい眼差しを向けるそれは、異性に向けるものではなく父が娘に向けるものに似ていた…

静かに地上へと降り立ったペガサスを見上げて悠陽はまるで白亜の城のようだと思った。

普通の縦長の艦船が横たわるのではなく、前後に突き出した四本の足でドッシリと構え、天に聳える艦橋がそう思わせたのだ。

帝国の軍楽隊の演奏に合わせて前方に突き出た左舷デッキのハッチがゆつくりと開き、帝国軍人とアメリカ軍人に両脇を固められた見慣れぬ軍服姿の人物が姿を現す。

デッキが開ききり、やや緊張した面持ちで坂田とクリスと共に貴賓席へと歩み寄るシンジ。服装は散々迷った拳句に無難だろうと何時も着ている連邦軍制服を着ていた。

「ロンデニオン管理官、フジエダ准将以下強襲揚陸艦ペガサスクル
ー 87名。 定刻通りに到着いたしました！」

悠陽とエデンの前に立ったシンジはそう報告すると、練習して多少は見れるようになった敬礼をして見せた。

22ター目(前書き)

やふゝ ちよつとバテ気味。

22ターニ目

地上に降り立つたペガサス乗組員は質素ではあるが儼かな式典を終えると、それぞれの担当兵器を艦から降ろして展覧会紛いの仕事にはいつていた。

61式戦車の前には宇喜田を始めとする戦車兵と担当の整備員が立ち、日米の戦車戦を担当する軍人達や戦車の生産を行っているメーカーの企業人達からの質問等に答え、或いは彼らを61式に乗せては簡単なデモンストレーションを行っては慣れないながらに61式を売り込んでいた。

運用試験を任されている彼らにとっては、祖国の61式導入はなんとしても実現させたいと思わせる程に惚れ込んでおり、自然と言葉に熱がこもっていく。

「不整地での最高速度は90km、こいつに追いつけるBETAは突撃級だけだ。その突撃級の硬い甲殻もこいつの155mm連装砲なら確実に貫ける。…いや、こいつに貫けねえBETAは居ねえな！」

そう言つて、傷の有る日に焼けた顔を不敵に歪めながらメーカーの担当者に笑いかける宇喜田。

その顔に少々気圧されながらも、それを聞いた関係者もまた61式のスペックには納得し、生産ライン、技術面の問題や費用に関しては後日、藤枝准将から話があるという言葉にロンデニオン責任者

たる人物にどう接するべきかを考え始める。

当の本人はというと、右手の掌を上に向けて地面近くに伸ばして片膝を着けた白黒ツートーンの巨人と、地面に水平に取り付けられたファンを箱形の車体に左右4つ取り付けられた奇妙な乗り物の間に建てられたブースの一つで正装姿のエデン大統領と悠陽殿下を始めとする要人達の相手をしていた。

「…基本スペックに関しては以上です。何かご質問は？」

RX78の基本スペックを聞いた一堂が微妙に顔を引きつらせるなか、エデンと悠陽は何時もとは違うキリツとしたシンジに「こんな顔も出来るのか」と別の意味で関心している。

「准将。いいかな？」

「はい、何でしょうか閣下？」

要人の中の一人、帝国陸軍の制服に中将の階級章を付けた初老の男性が軽く手を上げながら発言を求めてきた。

「うむ。君たちロンデニオンが作ったMSの性能は聞く限りでは素晴らしいと思う。しかし知っての通り、我が帝国…いや、人類側の主力兵器は戦術機だ。君はMSを戦術機の替わりに人類側の主力にしようという考えなのかね？」

中将の言葉に要人たちの視線が一斉にシンジへと集まる。

そんな注目の中、シンジは中将へと静かに首を横に振り否定を示した。

「いえ閣下。少なくとも今のスペックではMS単体での主力化はあり得ないと愚考いたします。それに戦術機とMSではまったくジャンルの違う兵器ですので、色々と片付けなければならぬ問題もあります。現段階でMS単体での攻勢行動は難しいと思われます。しかし61式や他の兵器群と組み合わせれば強固な防壁足りえる可能性は高いかと…」

「そうか…　しかし守るばかりでは勝てんぞ？」

「…失礼ではありますが、今の人類は守ることさえ難しいのが現状かと…」

「…確かにな。大陸では人類側は押され続けて追い落とされようとしておる」

皺の刻まれた顔を憂いに曇らせる中将はふと顔を上げると傍らにしゃがみ込む巨人の顔を見詰めた。

翌日、ロンデニオン製戦車である61式の演習が始まった。

午前中は演習場内に設置されたコースを走りながら的撃ちを行い。午後からは異例とも言える戦術機部隊との模擬戦が行われている…

今までの鬱憤を晴らすかの如く宇喜田は61式を走らせていた。不正地走行中の揺れを意にも介さずにスコープに映る人型に正確に狙いを合わせるとトリガーを引き155mm砲を轟かせた。

一機の戦術機、撃震が胴体部分に被弾して黄色いペイントに染められる。

「そんな…嘘だろ…?」

「ちい！ ちょこまかと…！ なにい!？」

被弾して呆然とする撃震の衛士。敵を討とうとしたもう一人の衛士だったが、間髪入れずに放たれた155mm弾に視界を黄色く染められる。

「はっ！ 残念だったな！ コイツは連装式だから連射出来るんだよ!」

宇喜田は吼えながら装填を完了させた155mm連装砲を別の撃震

へと向け撃ち放つ。しかし狙われた撃震は跳躍ユニットを緊急噴射させると機体にサイドステップを取らせて危ないところで難を逃れる。

「オメガ3、油断するな！ 戦車だと思って甘く見ると足元を掬われるぞ！」

回避した機は隊長機だったらしく動揺する味方機に注意を促すが、それを聞いた宇喜田は更に吼えた。

「そう言う言い方をするお前が、一番戦車を甘く見てんだよ！」

その言葉と同時に隊長機の右足に後方から放たれたペイント弾が命中し、バランスを崩した機体が傾いた所に再び後方からの砲撃が命中し背中からコックピット付近を黄色く染め上げた。

「ウイルソン！ 見事に“掬って”やったな！」

「ちよろいもんだ！」

起伏の影から砲塔を覗かせるウイルソン大尉の61式は、連装砲の先から微かに白煙を立ち上がらせていた。

宇喜田と同じく戦車が第一線から引かされた事に思うところがあるウイルソンもまた撃震を相手に暴れ狂うのだった…

「これは予想以上に凄まじいな…」

帝国軍関係者の天幕の下でモニターを見つめながら男はそう呟くと、傷のある顔を引き締めて演習を観察し思考する。

帝国軍の戦術機・撃震一個小隊とロンデニオンの新型戦車・61式一個小隊の模擬戦は多くの参列者達の予想を覆す様相を呈していた。いくら撃震が第一世代の旧式戦術機とはいえ開始5分で既に隊長機を含めた3機が撃墜判定。61式の損害は0。

とても戦術機と戦車の戦いとは思えない一方的な内容だ。

確かに投射面積では戦車の方ががあるが、戦術機にはそれを補うスピードと運動性能があった筈。第一世代の撃震でも最高速は時速400〜500kmはあるし、咄嗟の回避に置いても高い運動性とブースト機能を併用して対応出来るし、武装とて高い連射性能で制圧力の高い36mm機関砲と高性能の火器管制システムが備わっている。

なのに何故、死角に入り込んでの36mmの雨をあの巨体に似合わないスピードと機動性で易々と避け、逆に死角に入り込んだ61式の攻撃は撃震を撃破するのか？

搭乗者の腕なのか？ それとも61式の性能なのか？

男は61式の挙動を観察しながら更に深く思考の海に潜り込んだ。

この男の持った疑問の答えは両方だった。

宇喜田は帝国が大陸への本格派兵前から試験的に大陸に送られた古強者であり、派遣された土地でBETAの脅威を、戦車の強みも弱みも、そして間近に戦術機の動きを見て来たのである。

ならば最新鋭の第三世代戦術機ならばまだしも、大陸で散々見慣れたF4ファントム系列の第一世代戦術機・撃震相手なら幾らでも戦術を持っていたし、錯乱した友軍の戦術機を止めた事すらあった。

ウィルソンや他の戦車兵とてそれは同じで、その力は宇喜田に勝るとも劣らない強かな兵つわものである。

そしてそんな戦車兵達の技量を余すことなく発揮させる事が出来る陸の王者、獅子たる61式戦車とて只の戦車ではない。

二本の牙155mm連装砲は二門同時発射は勿論、交互発射も可能で装填速度の早い自動装填装置と合わせて速射砲並みの連射力を誇り、電気駆動の無限軌道キャタピラは操縦手の操作にクイックに反応し戦車としては破格の最高速度90kmオーバーを叩き出す。

火器管制システムを始めとしたハイテク機能も高く、徹底した自動化、高性能化の結果。通常3〜4人の搭乗員を必要とする戦車をたったの2名で操作可能にまでしたのだから、注ぎ込まれた技術の高さが伺える。

更に今回の模擬戦の為に急遽用意された切り札、“衛星”データリンク。

通常のデータリンクならば90式やエイブラムス戦車にも備わっているが、61式に搭載されているのは衛星データリンクシステム。

その名の通り衛星を通じての僚機とのリンクや、はるか上空に位置する衛星からの正確な位置情報の提供により、通常の戦車では考えられない程の長距離精密射撃をも可能にしていた。また自機の周囲情報も衛星から観測されリアルタイムで送られるので、死角に回りこまれようともし正確に相手の位置を把握できるのである。

ちなみに今回使用した衛星は、シンジが事前に日本帝国上空に設置するのをお披露目後の帝国への譲渡を条件に認めてもらっていた。

「このままで終わってたまるかー!!」

残った撃震が匍匐飛行で演習場内を飛び回り、手にした突撃砲から36mm弾を撒き散らす。

4両の61式戦車はある者は器用に回避行動を取り、ある者は起伏を遮蔽物として何とかそれをやり過ごしていた。

「こつも動き回られて弾を撒き散らされると厄介だな！」

「大尉ーい！ もう避けきれ、おうわあ！？」

「泣き言はいらん！ 避けるー！」

回避行動を取り続ける宇喜田の61式の直ぐ傍にペイント弾が撃ち込まれる。61式が襲い来る36mの嵐を避けるべく急激な左旋回を行いサスペンションが沈み込み車体が右に傾く。

操縦手の楠田曹長に回避行動を取らせつつも、隙有らばと砲塔を廻らせて撃震を狙うが恥も外聞も投げ捨てて全力で飛び回る撃震を捉えきれず歯噛みする宇喜田。

「こつも走り回されてはな！」

そう宇喜田が愚痴を零した瞬間、一両の61式が上方から降り注いだペイント弾に捉えられて撃破判定を受けて停止する。

61式を一両撃破した撃震はそのまま機体を横滑りさせその銃口を宇喜田の61式へと向けた。

「スモーク！ 後進！」

銃口を向けられた瞬間、宇喜田は14基に増設された砲塔側面に備えられているマルチディスプレイシャーチャーからスモーク弾を打ち上げて後退した61式と撃震の間に煙幕を張る。

「目晦ましを!？」

レーザー反射材を含んだ煙幕は撃震と衛士の目を奪い狙いを不正確にさせるが、それでも乱射される36mmは煙幕の中を後退する61式の周囲を切り裂いていく。

緊迫した状況の中で宇喜田は傍らに備え付けられたパネルを操作すると、車体前面に新設された新しい装備を起動させる。

車体前面に二つ装備された板状のそれは、車体に固定していたボルトを爆砕しながら車体前方に打ち出されると地面に転がって行った。

「…そろそろだろ？」

宇喜田が狭い砲塔内で呟いた瞬間、今まで猛威を振るっていた36mmの嵐がピタリと止んだ。

「くっ!? 弾切れ!？」

今回の模擬戦で撃震が装備していたのは120mmユニットを外した突撃砲を一丁に、長刀を一本。予備弾装は1つも装備していなかった。

相手が戦車だという事で、撃震の衛士もその上官も甘く見ていたのだ。

たかが戦車4両の相手なら突撃砲本体の装弾分2000発で十分だと…

万が一の突撃砲作動不良に備えて長刀を備えてはいるが、使うことはない。そんな思惑も相手の装備を確認した宇喜田には読み取れていた。

だからこそ負けられない！ 相手の残弾を計算した宇喜田はグリッブを握りなおし、トリガーを引く。

煙幕を切り裂き撃震に襲い掛かるのは、砲塔内からも操作可能な砲塔上部に据え付けられている13・2mm重機関銃の弾丸。

戦術機の中でも装甲の厚いF4シリーズのファントムにそれは豆鉄砲だったし、煙幕のせいで狙いが取れず数発が掠めた程度だった。

弾切れか？

撃震の衛士は拍子抜けする相手の反撃に知らず笑みを浮かべた。

衛士は撃震に突撃砲を捨てさせると背中に固定されていた長刀を握らせて煙幕の中に突入させる。

目の前の61式の主砲が弾切れであるならばチャンスだ！ 既に状況は自分たちの負けだ… 僚機は3機ともやられてしまい、突撃砲

の弾も切れた。相手は3両の戦車が残っている、せめてあと一両は！

重機関銃の軌跡を辿り煙幕の中を匍匐飛行で突き進む撃震。格下に見ていた相手に泥を付けられ追い詰められた衛士は冷静な判断を失い直進する。そして…

「なんだとー！ー!?」

衛士は絶叫する。突如足元から起った爆発により機体のバランスが崩れ、つんのめる形で地に伏せる撃震。激しく揺れるコックピット内で急いで機体を起こそうと操作するが、黄色く染められて稼働不能と判断された下半身は跳躍ユニットごと停止して動かない。

辛うじて動く上半身を両腕を支えに起こし、爆発で煙幕の薄れた前方に頭部カメラを向ける。

薄霧のような煙幕の先には61式の姿がゆらりと浮かび、剥き出しの二本の牙が火を噴いた。

「…オメガ3、大破。オメガ小隊の…敗北です…」

モニター越しのオペレーターの声が、模擬戦を見ていた全ての者の
耳に響いた…

23ター目

61式と撃震の模擬戦を見たシンジは明日のMS演習のやる気を削がれていた。

宇喜田は宣言どおりに今回の目玉であるMSのお披露目を食らう勢いの活躍を見せた。

それは嬉しい事だとシンジも思う。

しかし、自分の順番の前にあんなモノを見せられてはと尻込みもしていた。

模擬戦の間に整備兵によって行われたRX78の重力下環境調整のチェックをコックピット内で行いながらウダウダと考え込む。

既に日は沈み辺りは暗闇に包まれ、見物人達は宿泊先に戻っており昼間の騒がしさが嘘のように静まり返っている。

地上へ降りた初日の夜と同じく2日目の今日も、演習終了と同時に食事に酒に歓談にと要人に誘われたが明日の演習を理由に断り、彼は狭いコックピットで作業に没頭していた。

彼の代理に坂田艦長とクリス副長が要人達のお相手をし、本日の主役たる61式戦車兵達も宴に参加している。

ペガサスの責任者二人が居ないのは如何なものかと坂田とクリスは

「ごねたが、自分が居るからとシンジは半ば無理やり二人を送り出していた。」

「少しは楽しんでいるかねえ？」

パネルを弄り、モニターに移る機体のコンディションを確認しながら呟く。

坂田艦長とアンダーソン副長はお偉いさんの対応に追われて無理だろうが、戦車隊の皆は模擬戦後に憑物の落ちたようなスツキリとした顔をしていたから今夜の酒は美味いだろう。

明日の俺が飲む酒は、美味いか不味いか…

おう、いかんいかん。やる前からこれでどうする？ え〜とサスペンションは…

「だいたいMSのパイロットが俺一人しか居ないのがキツイよね〜これが終わったら正式にMSパイロットを募集して育成しないと

…」

「なにぶつくさ言っただけだ？ さっさと終わらせて俺たちも飯にしようや、若い奴らが腹へってへたばってんぞ？」

あゝい、おやつさん。

整備兵の皆様、苦勞を掛けてすみません。お披露目が終わったら整備班も増員するから、もうちょっとだけがんばってね？

「え〜とメインバーニアの熱核ジェット切り替え調整よし、脚部のショックアブソーバーの硬さは重力下標準値で設定して… おっけー！ 調整確認終了！ 皆さんお疲れ様〜、明日もよろしく〜！」

「お疲れさんです〜」 「お疲れっす！」 「つかれたー！」

左舷デッキのそこかしこで整備兵さんが嬉しそうに声を上げている。

時刻は夜8時をとくに過ぎていて、夕食には遅い時間だ。整備兵の皆は道具を片付けて、周囲を整理整頓すると足早に艦内食堂へと向かっていく。

俺もコックピットから降りて頭に巻いていたタオルを解き軽く手を拭くと、脱いでいた上着を左肩に引っ掛けて食堂に向かおうとしたのだが、開け放たれたハッチから誰かが上がってくる気配を感じて足を止める。

ペガサスの周囲に配置されている帝国軍の守衛の一人に先導されて、帝国軍制服を着た体格の良い男性と、山吹色の衣装を身に纏った長い黒髪の少女がこちらへと歩いて来る。

二人とも何処かで見た顔なのだが思い出せない…

男性の方は顔の左側に大きな傷跡があり、少女の方は顔の左側の髪を一房、こよりのような物で結んでいる可愛い子だ。

ただ二人に共通して言えるのは、オーラというかプレッシャーのよくな物が感じ取れる。　只者ではない。

とりあえず彼らがこちらに気づいて向かって来ている事と、少女が身に纏う衣装が悠陽殿下の護衛の月詠さんと色違いの衣装だと気づき、肩に掛けていた上着を着て来るのを待つ。

「夜分に失礼します閣下。　こちらの中佐殿と少尉殿が閣下への面会を申し込まれましたのでお連れしました」

「ご苦労様です。　立ち入り許可書の確認は済んでいますね？」

「はっ。　確認させて頂きました」

「なら問題ありません。　ご苦労様、下がっていいですよ」

「はっ。　失礼いたします」

未だに閣下と呼ばれると背中がむず痒い。 んっ？ なんでお客さん二人は目を丸くしてんの？

職務を果たし敬礼して去り行く兵隊さんを軽く手を振りながら見送り、お客さん二人に振り向くと二人とも目を丸く見開いて俺を凝視してんの… なに？ そんな目で凝視されると怖いんですけど…？

「…あの何か？」

「…はっ！？ いえ、失礼いたしました閣下！」

「しっ失礼しました！」

声掛けたら二人ともビクツと反応して慌てて敬礼してきた。何もそんなに驚かんでも… あと閣下は止めて。

とりあえず敬礼を返して…

「あゝ楽にして下さい。 えゝと…？」

「はっ。申し遅れましたが、自分は日本帝国技術廠 第壱開発局副部長を勤めております巖谷 榮二中佐であります。 彼女は…」

「初めてお目に掛かります閣下。 自分は帝国斯衛軍少尉、篁 唯依であります」

「ご存知かとも思いますが、私はロンデニオン管理官をしております

すシンジ・フジエダ准将です。 … 出来れば閣下ではなく、准将でお願いしたいのですが？」

俺のお願いに今度は、目をパチクリさせる二人… ああっ！ 思い出した！ この二人って確かサイドストーリーに出てた二人だ。不知火二型？ を作る人だ。

ああ。 ああ… 俺、サイドストーリーのエクリプス？ … いくりぶす？の事は詳しく知らんが… まあいいか。

「はっ、承知致しました准将」

「了解しました准将」

堅いね…

気を取り直して、

「え、どういった御用件で此方へ？」

「はい。 一言ご挨拶にと思ったのですが、宴の方にはお越しになられないと坂田大佐からお聞きしましたのでお忙しい中、御迷惑かとも思いましたがお伺い致した次第です」

そりゃまた…

「それはご丁寧の有難うございます。 作業の方は先ほど済みましたので大丈夫ですよ。 これから…あっ…」

会話の途中で腹が鳴ってしまい思わず苦笑い。

「…食事を摂ろうかとしたところです。夕飯は済まされました？
まだなら立ち話も何ですし御一緒に…」

再び会話の途中で小さく可愛らしいお腹の音が聞こえる。

見れば篁少尉が顔を赤くして直立不動で固まっていた。 うん、育
ち盛りだから恥ずかしい事じゃないよ。 うん。

すると今度はその隣からも豪快にお腹の虫が鳴り響く。

「…ふふっ、一緒に行きましょうか？」

「ははっ、面目ございません准将。 宴の会場から何も口にせず、
直ぐに此方へ参ったものでして… ご相伴させていただきます。
篁少尉もいいな？」

「…はい。 お供いたします…」

ダンディーに笑う巖谷中佐と表情を取り繕ってはいるが未だに顔が
赤い篁少尉と連れ立って艦内食堂へと向かう。

そういうお年頃だからしょうがないか、この位の時期が一番接しに
くいって娘さんの居る会社の上司も言ってたし。

廊下を歩きながら巖谷中佐と軽く会話してみると結構話が合うのが嬉しい。元の世界では機械好きが転じてそっち系の会社に勤めていたから戦術機開発に携わる話が聞けるのはラッキーだった。

途中で篁少尉も話に加わってきて、巖谷中佐は帝国斯衛軍が使用している国産戦術機・瑞鶴の開発にも携わっていた事も教えてくれた。

食堂に辿り着き白身魚のフライがメインの夕食を受け取り、席に着くとまずは空腹を満たすことにした。

フライうめえー

腹を満たして食後のお茶を啜りながら巖谷中佐に戦術機関連の事を色々と尋ねていると、やがて会話が本日の模擬戦へと移る。

「あの61式戦車の戦いぶりは見事でした。しかし、1つだけ分からない事があります。最後の撃震が撃破される前の煙幕内で起こった爆発… あれはいつたい？」

「あゝ。あれはリアクティブアーマーですよ」

リアクティブアーマーは簡単に言うと、外から加わった圧力に対して内側から爆発して相殺する事により本体を守る追加装甲の事だ。

宇喜田さん達が使った61式には追加で車体前部と後部に2枚ずつ貼り付けてある。

「リアクティブアーマー？　しかしあの時撃震は弾切れで61式に被弾は無かった筈では？」

「ええ被弾はしてません。　アーマーをパージして地雷代わりに使ったのです」

元は61式の対BETA戦での運用や様々な環境下での対応策を宇喜田さん達と話し合っている時に思いついたものだ。

61式は不整地でも時速90kmで走る事ができ、突撃級以外のBETAに速度で勝っていた。

この点だけでも戦車兵の皆さんは随分と喜んでいた。　なにせBETAの陸戦主力とも言つべき要撃級や戦車級の最高速度は70～80km。　対して人類側の戦車の速度は良くて70km前後。　つまり、有視界戦闘に入った戦車はBETAから追いかけると撤退することが難しいのだ。

反撃しながら移動しても、物量に物を言わせたBETAが速度に劣る戦車に追いつき撃破される。

大陸で戦車部隊が大量に撃破されたのはこれが一番の原因だと宇喜田さんは言った。　地下からの奇襲進行に脆いからと良く言われるが、奇襲なだけあってその頻度は少なく奇襲自体に脆いのは他の

兵器も一緒だとも言っていた。

本来ならその時点で戦車の改修で問題を解決する筈なのだが、各国の軍上層部は既に配備されていた戦術機の汎用性と未来性に着目し、戦車を第二線に下げる事により対応した。

戦術機と戦車、両方に力を注ぐ余裕が無かったのだろう。

話を戻すが、時速90kmの逃げ足を持っていても大量に迫ってくるBETA小型種の戦車級に齧られない為の近接防御策を考えていたときの事だ。

砲塔側面に設置されたマルチディスプレイスチャージャーを増設しSマインという空中炸裂式散弾地雷の装填と、此方の世界の近接防御策にも使われていたリアクティブアーマーを装備という事で話が纏まりそうになったのだが、ここで俺はある漫画のシーンを思い出していた。とあるMSが、装備していたリアクティブアーマーをパージして時限信管で爆発させて追いつがる敵にダメージを与えるというシーンを。

あれ？ これ使えね？

そう思った俺は皆にこの話をして意見を貰い、幾つかの修正を加えて新しいリアクティブアーマーを自動CADに設計してもらった。

アイディアの元になったMSが連邦製だったのが幸いして一日でリアクティブアーマーの設計は完成した。

時限式とセンサー式を選択できる信管を備えたそれは戦車側から任意にパージでき、パージ後は選択された信管方式に従い爆発するシロモノだった。

出来上がった実物を見た戦車兵さん達は、「追いかけてくるBAKAに“いい”土産が出来た」と物騒な笑みを称えていた。

「…なるほど。単純ではありますが、いいアイデアです」

巖谷中佐が褒めてくれた。けど、漫画からのパクリだし… あっ、他のも全部パクリか…orz 篁少尉、そんなに綺麗な瞳で感心したように俺を見ないでくれ…

「これは明日のMSのお披露目が、ますます楽しみになってきました。61式戦車でこれほどですから… なっ？ 少尉？」

「はい。若輩者ではありますが、明日は宜しくお願いいたします
准将」

ううっ…またプレッシャーが…

…んっ？明日は宜しくとは？ 聞いてみると…

「明日の模擬戦では帝国斯衛軍側からは篁少尉がお相手する事になつております」

…ああ、それでわざわざ挨拶に来たのね。 ていうか、この娘絶対に強いよ！ さっきからプレッシャー半端ないもの！

「ええつと… 篁少尉、明日はお手柔らかにね？」

「ベストを尽くします！」

違うの！本当にお手柔らかにお願いしたいの！
んうん頷いてないで、この荒ぶる娘を抑えて！

巖谷中佐！ う

24ターニング目(前書き)

遂にここまで来たか…

24ターン目

「凄い…」

今、私の目の前で白を基調にした青と赤のトリコロールカラーの派手な機体が、演習場内に設置された的をまた一つ撃ち抜いた。

ただ撃ち抜いた訳ではない。

機械とは思えない躍動感で跳ねるように移動して手にした携帯型光学兵器を標的とのすれ違いざまに撃ち放つ。

標的として用意された突撃級BETAの死体をピンク色の光弾で貫き、動きをまったく止めることなく次の標的へと向かって行く。

「どうだい、篁少尉？」

不意にヘッドセットの通信機越しに巖谷中佐の声が響いた。

他の者の耳があるので“篁少尉”と呼んでくれてはいるが、口調はプライベートの時に近いものになっている。

「火力、運動性は既存の戦術機とは比べ物にならない凄まじい機体だと思考します」

「…秘匿回線に繋ぎ直したから、いつも通りでいいよ唯依ちゃん？」

いつもならこのような事は諫めるけれど、網膜投影で映し出されるあの白い機体の動きを見ていたら中佐の…
おじ様の心遣いは有難かった。

「…少し緊張してます」

「だろうね。私もここまでとは思わなかったよ」

白い機体は空中で身を捻りながら標的へと狙いを定めて射撃すると、足の関節を曲げて衝撃を殺しながら着地し、軽く曲げた足を伸ばして再び跳躍する。

ブリストを殆ど使わずに人間と同じく関節の屈伸と重心移動だけで、機械とは思えない身軽さで動き回る機体。

強力な上に連射でき、戦術機サイズに携帯可能な光学兵器に、しなやかに動く四肢で驚異的な運動性を持つ白いMSと呼ばれる機体。

RX78-2 ガンダム

それがあの機体の名前…

「しかしあの准将が乗っているとは思えない動きっぷりだね？」

「はい…」

ガンダムに乗っている衛士は、藤枝 慎治准将。

将官が自らテストパイロットを勤めるだけでも珍しいのに、昨日初めて会ったあの人が乗っているとは思えない動きだ。

決してあの人を侮っているのではなく、あの機体の凄まじい動きとあの人のイメージが合わないのだ。

初めて会った時には見慣れぬ制服姿、タオルを腰にぶら下げて上着を肩に掛けたラフな格好で将官とは思えない姿だった。

所々はねている癖のある黒髪が無造作に伸び、緊張感のないそこそこに整った顔で、階級が低い者に対しても礼儀正しいと言うか腰が低いと言うか…

軍服を着ているが軍人らしくなく、民間人…良くて軍属の人間と言った所か…

今までに私の周りには居なかったタイプだ。

「正直、厳しいかい唯依ちゃん？」

網膜には流れるような動作で背後から取り出した光の剣で標的を切り捨てるガンダムの姿が…

「やりようはあります。近接戦に持ち込めれば…」

確かに動きは速く滑らかだ。けれど標的を切り捨てた動作に粗が

見える。

私の搭乗機・瑞鶴は旧式の部類に入るが、格闘戦を優先した機体設計のお陰で近接戦なら第2世代戦術機にも遅れは取らない自信がある。

それに格闘戦を重視する斯衛には先人から受け継がれ磨かれてきた格闘モーションプログラムが有り、瑞鶴にはそれがインストールされている。

如何に早く、効率的に確実に敵を斬るかを突き詰めたモーションプログラムを生かせばやりようは或るはずだ。

かつておじ様は瑞鶴でF15イーグルを下したのだ。私だって…

「やりようはあります…」

操縦桿を握り締める手に私は静かに力を込めた…

演習場内でぶつかり合う二つの機影。

1つは両手に刃の潰された模擬戦用の長刀を振りかざし白い機体に斬り迫る黄色い斯衛軍戦術機・瑞鶴。

もう1つは瑞鶴の猛烈な剣舞に追い詰められ、攻めあぐねる白いM S・ガンダム。

模擬戦用の装備をした二機は見物人達の当初の予想を覆す戦況を呈し、見るものに息つく暇を与えなかった。

「はああああー！！！」

瑞鶴コックピット内で未成熟な体のラインを浮き上がらせる強化服姿の唯依は、額に汗を流し前髪を張り付かせながら雄叫びを上げた。

その雄叫びに答えるように瑞鶴は右手に握った長刀を振り下ろしガンダムを追い詰める。

瑞鶴の長刀が青い胸部の装甲板を掠めて振り下ろされ、腕が伸びきって動きを止めたのを確認したガンダムが踏み込もうとするが、横一閃に振られる左手からの長刀に気づき踏み込む足を突っ張らせて上半身を仰け反らせる。

デュアルアイの目前を通り過ぎる長刀に背筋に冷たいものが走るシンジ。

「ふつううー…」

「やっぱり半端なく強いよこの娘…」

息を吐きながら瑞鶴に再び構えを取らせる唯依。額に流れる冷や汗を拭いながらばやくシンジ。

模擬戦開幕前、斯衛にしては珍しくシールドを持たせた唯依の瑞鶴を見て嫌な予感がしたシンジは、模擬戦開幕と同時にその意味を知った。

開始の合図とともに盾を構えながらガンダムへと最高速で突っ込んでくる瑞鶴に意表を突かれ、驚異的な反射神経とガンダムの運動性のお陰で辛うじて避わすも右手に持たせた突撃砲を居合い斬りのような斬撃で使用不能にされて格闘戦に引き摺りこまれてしまったのだ。

シンジとしては格下の自分に対してここまで形振り構わず来るとは予想外で、完全に意表を突かれる形となった。

それでも何とか持ち直して、ランドセル部に固定していた長刀をガンダムに握らせると反撃に転じようとする。

戦術機の最大の間：行動と行動の間に有る空白時間と入力された行動を途中キャンセル出来ない事を逆手に斬りかかるが、こちらの動きを先読みまたは制限を掛けるように行動し、二刀を瑞鶴に握らせ

る事により攻撃の隙をなくしているので付け入る隙を見出せずにはいた。

そして生身でも剣の達人である斯衛の動きを基にした斬撃モーシヨンは鋭く、ガンダムの性能を持つてしてもこの間合いでは完全に避わず事は出来ずガンダムを長刀が掠めるたびにシンジは冷や汗を流す。

しかし、一見すると唯依が主導権を握り押しているように見えるが彼女もまた内心に焦りが見え始めていた。

これ以上は無いたイミングとスピードの猛攻を耐え忍ぶガンダム。

しかもここに来て徐々に動きが良くなって行く相手に内心を抑えながら瑞鶴に剣を降らせ続ける。

その剣を避けながらシンジはガンダムの固定武装である頭部バルカンを撃ち放つが、初見で相手のシールドをそれで破壊したのを見られているために牽制にしかならず、危なげなく回避して斬りかかるうとする瑞鶴の姿をモニター越しに見てコックピット内で小さく舌打ちを鳴らした。

「はあ、はあ。バルカンの残弾が少ない…シールドはどっかに飛ばされて、後は長刀が1本のみ…」

パイロットスーツの下に大量の汗を流し、息を荒げながら汗で額に張り付く髪を不快に思いながらシンジは現状を打破すべく思考するが、付与されたニュータイプの超反射神経と先読みで長刀を振っても相手の洗練された斬撃モーシヨンは早く、良くて相打ち…

それでは駄目なのだと言を食いしばるシンジ。

未だにニュータイプ能力を上手く使いこなせない事に、初めてシンジは悔しいと感じた。

「はあ、はあ… 勝ちたい… あの娘こに俺は勝ちたい…」

メインモニターに映る唯依の黄色い瑞鶴を見据えながらシンジは思った。

自分はこの世界を本当は嘗めていたのではないかと…

MSの訓練は一応行っていたが、ガンダムの性能を妄信し過ぎていたのではないかと

与えられた力に酔って油断した結果がこの体たらく。

「勝ちたい… 負けられないんだ!!」

ガンダムのコックピット内で、白いノーマルスーツ姿のシンジはいつもの飄々とした表情をなくなり捨てて吼えた。

その瞬間ガンダムのデュアルアイが力強く瞬き、瑞鶴のコックピット内で唯依はえも知れぬプレッシャーを感じ取り肌を粟立たせる。

「なんなの!?! この!?!」

竦みそうになる心を奮い立たせるように、目の前の相手に長刀を縦に振り下ろすが…

「うそ!？」

唯依は取り繕う事無く驚きに叫んだ。

体を半身にする事で斬撃を避け、あろう事かそのまま片足で長刀を踏みつけると地面に押し付け折ってしまったのだ。

そのままガンダムはバックステップで一旦距離を取ると、手にした長刀を腰だめに居合いの様に構える。

「ばかな!！」

貴賓席に居た悠陽の護衛である月詠は驚きで思わず叫ぶ。そして護衛対象である悠陽も…いや、その模擬戦を見ていた斯衛に縁のある者は全員が驚きで目を見開いた。

なぜならば、今ガンダムが取った構えは… 斯衛の戦術機にインストールされている構えと寸分違わぬモノだったからだ。

斯衛の格闘モーションプログラムは彼らにとっての切り札であり、帝国軍にすら公開されていないシロモノだった。

勿論、シンジがハッキング等で情報を得てガンダムにインストールした訳ではない。その証拠に模擬戦当初は動きこそ早かったが、構え等に特筆すべきものは無かった。

それなのに…

その様子をモニタリングをしていた巖谷は絶句した。なぜ？ どうして？

その回答を模索して思考する彼は、やがて1つの驚愕の回答に行き当る。

巖谷は震える指でインカムのマイクを口元に寄せながら、瑞鶴のコックピットで同じように驚愕しているであろう少女・唯依に通信を送る。

「唯依ちゃん… 篁少尉、信じられない事だがあの機体は… ガンダムは君の動きを学習したんだ…」

「そんな… こんな短時間で…」

信じられないと言った表情で網膜に映し出されるガンダムを見つめる唯依。

その構えは確かに斯衛のモノ。しかし、彼女があれを見せたのは

模擬戦開幕にたったの一度だけだ。それなのにこの短時間で、しかも模擬戦の只中でモノにしたというのか？確かにそれらしい兆候はあったが…

疑問を晴らすべく唯依は瑞鶴に残った長刀で、目の前のガンダムと同じ構え…居合いの形を取らせる。

鏡合わせに同じ構えを取る両機。緊迫した空気が演習場内に満ちていく…

「篁少尉」

「はい」

そんな中、意外な事にシンジが唯依に模擬戦が始まって初めて彼女に通信を送った。

「貴女は強い。だから俺も…形振り構わず全力で行きます」

「光荣です。准将」

昨日とは違うシンジの声音に少し驚きつつも、その言葉に力強く答える唯依。

シンジはコックピット内で気休め程度に機体の反応速度を限界まで上げる調整を行うと、メインモニターに映る瑞鶴の…唯依の動きを感じ取るつと神経を集中させる。

モニターに映る瑞鶴を透かして唯依の姿が見え、その息遣いが聞こ

えてくるような錯覚を覚えながら操縦桿を握り締めるシンジ。

手の平に滲んだ汗が強化装備と肌の隙間を湿らせるの不快に感じながら唯依はガンダムの動きに集中する。

まるで相手に見透かされているような感覚を覚えながらもジリジリと摺り足をさせながら瑞鶴を間合いに進めていき、彼女は先手を取った！

「これで！！」

ガンダムの首を目掛けて左から右へと一閃される長刀。

自身の今までの生涯で最高のタイミングで放たれた一撃に彼女は勝利を確信した！

「うおおおおー！！！」

しかしシンジはその一撃に怯む事無く自ら間合いに一步踏み込む。

ガンダムは彼の思いに応えるように相手の間合いに上半身を屈めながら飛び込み、V字のブレードアンテナの先端を切り飛ばされなが

らも瑞鶴の一撃を頭上に避わして縮めた体を伸び上がらせて居合いを放つ。

斜め上に切り上げられたガンダムの一撃は攻撃を避けられ伸びきっていた瑞鶴の右腕をへし折り長刀を弾き飛ばし、ガンダムは返す刀で瑞鶴の首に長刀を突きつける。

「…参りました…」

「ありがとう篁少尉。君のお陰で俺もガンダムも大きなモノを得ることが出来た。本当にありがとう」

久しく味わっていないかった全力を尽くした後の爽快感を感じつつ唯依は素直に負けを認め、シンジは計り知れない大きなものを得させてくれた彼女に心から感謝した。

25ター目(前書き)

もうすぐお盆休み
ひゃっはー!

25 ターン目

色々と考えさせられた模擬戦を終え、今日も俺は宴の誘いを断りガンダムのコックピットに座っていた。

コンソールキーの操作に合わせてモニターを流れるデータを確認しながら、今日の模擬戦を思い返す…

負けていても不思議ではなかった…

勝ったのは運とガンダムの性能のお陰。

あの最後の一撃… ガンダムは瑞鶴の、篁少尉の動きを学習して格闘戦における効率的な動きを覚え実績した。

ガンダムに搭載されている教育型コンピューターは戦えば戦う程に、相手が強ければ強いほどに急速に成長するシロモノだ。

あの短時間で学習して反映させるとんでもない性能のソフトと、その動きを可能とする高スペックを誇る機体^{ハイド}。

本当にガンダムは凄い… それに比べて俺は…

「はあ…」

「勝ったのに辛気臭い奴だな准将？」

勝ちをしました… けれどそれはガンダムの性能のお陰であって、旧式の瑞鶴で自分の磨き上げた腕で頑張った篁少尉を目の前で見たら恥ずかしさで死にそうなんです。鬱なんですよやっさん。

「面倒臭い奴だな… そんなんで明日のアメリカさんとの模擬戦は大丈夫なのか？」

「その為にこうしてやっているんですよ。これで負けたら篁少尉に会わせる顔、ありませんから… あっ、そのアブソーバーは硬めのやつに交換してください。その方が反応が上がりますから」

篁少尉との戦いで学習したガンダムは、一皮剥けたようにその動きを変えた。隙の無い洗練された動きを得たソフトは、より高度な要求をハードに課す。

今までのセッティングでも問題は無いのだが、より早く正確に動く上限が上がったのでそれに合わせて再調整をしているのだ。

二日続けての調整作業に整備兵の皆も疲れを顔に滲ませている。MSの整備、調整が出来るように成ったといってもまだ日が浅いのでいつも以上に神経を使っているからだ。

心の中で苦労を掛ける事を整備兵に詫びつつ、早く作業を終わらせようと集中する…

日本帝国主催で行われる日米ロンの交流の宴は、主役の一人を連日欠きながらも表向きは和やかに行われていた。

日米の要人達はロンデニオンに派遣されお披露目に参加している自国の兵士達に接触し。情報を得ようと酒を勧め、利権を掴む為に自分の所の人員を潜り込ませられないかと笑顔で語りかけていた。

アメリカ軍に籍を置きながらロンデニオン管理官の代理として宴に参加するクリステイーナ・アンダーソン大尉は、昨夜と同じようにシンジへの接触を試みるアメリカ企業の重役の頼みをやんわりと受け流しつつ、人の波が途絶えたのを確認すると静かに壁際の目立たぬ場所へと避難した。

途中で調達したソフトドリンクで慣れぬ民間企業への対応で乾いてしまった喉を湿らせて一息をつくくと、少しだけ顔を俯かせてガンダムの調整作業に追われるシンジに対する恨み言を内心でこぼす。

シンジへの恨み言が3つめに差し掛かったとき、彼女は自分に射した人影で誰かが前に立っている事に気づき伏せていた視線を上げて影の主を確認する。

「閣下…！」

自分の目の前に立つのが、アメリカ全軍の最高責任者であるジョージ・エデン大統領である事に驚き、直ぐに姿勢を正して敬礼を送るクリス。

「ああ、楽しんで… 久しぶりだねクリスティーナ大尉？ 楽しんでるかな？」

「…はい。 お久しぶりです閣下…」

優しげに向けられたエデンの視線を複雑な表情で逸らすクリス。それに気づいたエデンも少しだけ悲しそうに表情を曇らせる。

「ジョンと君には苦勞を掛けるてすまないと思っている。 ロンデニオンでの任務はどうだい？ フジエダ准将とは上手くやっていけそうかな？」

心を落ち着かせたクリスはエデンを正面から見据えると何時もより硬質な感じの表情を見せた。

「お心遣い有難うございます閣下。 訓練は順調に進んでおりますし、准将は良い方なので交流には問題ありません」

「…そうか。 うん、ご苦勞大尉。 これからも祖国への献身に期待する」

「はっ！ ありがとうございます。 ご期待に沿えるようにベストを尽くします！」

クリスの肩を軽く叩き、寂しげな表情で少し肩を落としながら彼女に背を向けるエデン。

その背中に一瞬何かを言いよどむクリス。意を決したクリスは賑やかな宴の喧騒に消えそうなほどに小さな声でエデンの背中に向けて言葉を紡ぐ。

「ごめんなさい。今はまだ…」

その場を去るエデンの背中が、こころなしか先ほどより軽く感じられていた…

地球に降りて四日目。

今日も良い天気です。絶好の模擬戦日和です。

右手に突撃砲、左手にガンダムシールド。

背中には長刀を2本装

備し、腰の後ろのラッチには予備弾装までつけてひざ立ちするガンダムを見上げながら首を回してコキコキと骨を鳴らす。

そしてガンダムの対面に仁王立ちするメイドインアメリカンな機体

…

現アメリカ軍の主力戦術機であるF15・イーグルではない。

かといって旧式のF4・ファントムでもなく、各国で愛用されるF16・ファルコンや海軍機のF18・ホーネットでもない。

ましてF14・トムキャットなんてマニアックなモノでもない…

出てきたのは、黒いレーダー波吸収剤がペイントされてYF22とマーキングされている戦術機…

次期アメリカ軍主力戦術機の試作品だ。

おうふっ…

G弾推奨派はこちらを完全に潰す気です。

YF22の足元では強化装備姿の金髪オールバックなヤンキーさんが、ガムをクチャクチャ噛みながら挑発的な視線を此方に向けている。

友好度0ですね？ わかります。

そういえば初日に大統領が言ってたっけ… G弾大好き派が今回の模擬戦に立候補してヤル気まんまんだって。

人間、そう簡単に自分の信じていたモノは変えられないよね。
G弾に絡む利権とかも有りそうだし…

けど、試作機のYF22まで出す事はないでしょうG弾モエモエ派の皆さん。 まあガンダムも試作機だけ…

「お忙しいところ失礼します准将」

おや？ 巖谷中佐に… 篁少尉。

「先日は大変お世話になりました。 貴重な経験をありがとうございました！」

敬礼して真っ直ぐにこちらを見つめる少尉の目が眩し過ぎて直視で

きねえ…

「いやいや、お世話になったのはこっちの方だから。少尉のお陰で俺もガンダムも貴重な経験を積むことが出来たから、こっちがありがとだよ」

「そう言っただけで頂けると光栄です」

「よかったな、篁少尉」

ええ子やな少尉。中佐の顔が綻ぶのも分かるわ… ていうか慌て過ぎて、喋り方が素だし俺。

「はんつ！ あんな旧式のローカルな機体に勝ったところで大したデータなんて得られねーよ」

はい？ 誰です今言ったのは？

少尉に癒されていたところ、背後から声を掛けられて振り返ればYF22の下に居たヤンキーさんが相変わらずガムをクチャクチャさせて立っていた。

「止さないか中尉！ …部下が大変失礼を致しました閣下」

そのヤンキーさんの隣に立った大尉の階級章を付けた米軍人… おお、ウォーケンさんだ！ ウォーケンさんが奴を諫めて慌てて謝罪

してくる。がつ、ヤンキーは悪びれた様子も見せずに横を向いてガムをクチャクチャ…

一応、初対面だから…

「…どちら様で？」

「はっ！ アメリカ陸軍第66戦術機甲大隊に所属しておりますアルフレッド・ウォーケン大尉であります。隣にいるの私の部下で、本日の模擬戦で閣下のお相手をするガーフィールド・ノイマン中尉であります。 中尉！」

ウォーケンさん、この時期はまだ少佐じゃないんだ。

「…ノイマン中尉であります。昨日の模擬戦を見ましたけれど大丈夫なのでありますか？ “技術准将殿”？ 武器は凄いですけど、話を聞けば其処に居る随分と若くて可愛らしい？少尉殿”の操る旧式に梃子摺らされたようですが？」

ピキッ…

「止さないか中尉！」

「上官に対して少し口が過ぎるのではないかね中尉…？」

「中尉、准将は…」

ウォーケン大尉と巖谷中佐がヤンキー中尉を諫め、篁少尉が何かを言いかけるが彼は聞きゃあしない。

飾りの階級が上で上官だとか言うつもりはない。ただ最低限の礼儀を…

「はん？ その少尉相手に梃子摺るようじゃ、准将殿もガンダムとか言う戦術機もどきもたかが知れていますね？ ははははっ…は…？」

ビキッ！！

アルフレッド・ウォーケンは動けなかった…

目の前に居る年下と思われる技術准将から発せられる圧迫感に、数多の実戦を潜り抜けた自負のある自分が気圧されている…

ウォーケンは頬を伝う冷たい汗を感じながら改めて目の前の人物が何者なのかを見据えようとした。

東洋系の顔立ちに癖のある黒髪を無造作に伸ばし、背丈は170センチほど。先ほどまで温和そうな表情を見せていた顔は、今では表情が削げ落ちて無表情に自分の部下である中尉を見据えている。

先ほどまでの威勢が嘘のように無くなり、自分と同じように冷や汗を流しながら焦点の合わない瞳を宙に彷徨わせている。こころなしか体も震えているようだ。

上からの命令で参加する今回の模擬戦。当初は部隊で運用試験を行っていた新世代戦術機YF22の量産改修型を持ち出すほどの事かと思っただが、昨日の模擬戦を見れば納得もした。

ガンダムと呼ばれる機体も素晴らしかったが、相手を勤める帝国軍の機体も素晴らしかった。旧式の機体ながらもその性能を遺憾なく発揮し、人機一体となって戦う衛士は賞賛に値するものだ。

残念な事に部下のノイマン中尉はそれを見極められなかったようだが…

もともとノイマン自身も腕は多少はあれども兵士としては若く、この部隊で最新鋭機のパイロットを任されたのも彼と彼の父親がある派閥に属していたからという話を聞いた事がある。

本来であれば今回の模擬戦も、彼よりも優秀なパイロットに任せるはずがその派閥の横槍で彼に決まってしまう、一抹の不安を覚えていたのだが…

よりもよって、我が軍の階級も持つ上官に…それも将官に無礼を働くとは正気とは思えない。

中尉としては眠っていた猫の尻尾でも踏むつもりだったのだろうが、猫は猫でもトラの尾を踏んでしまったようだ。

それもとんでもないトラだったらしく、直接当てられていない私や帝国軍の二人さえ動けずに居た。

「中尉…」

「なっ、なんだよ…」

底冷えするような准将の声に敬語すら発することが出来ずにうろたえる中尉。

「確かに私やガンダムには昨日の模擬戦で不甲斐無い所が多々あったでしょう。それは認めます」

「おっ、おおっ」

もはや完璧に上官に対する口の聞き方ではないのだが、准将に気圧されて中尉を諫める事が出来ない。

「…しかし、篁少尉の昨日の戦いは立派でした。素晴らしかった。私もガンダムも多くのモノを得させて頂きました。中尉、篁少尉に対する侮りと無礼を謝罪してください」

「っ！？ 何で俺がこんな小娘に！」

「謝罪してください…」

往生際の悪い中尉を見て、これが自分の部下かと思うと涙が出てくる。

「准将、私の事なら…」

「すみません篁少尉。 ですがこれだけは譲れません。 中尉、謝罪を…」

「はん！ 知るかよ！ させたければ俺を倒してからにしな！」

ダメだコイツ…

…。 捨てゼリフ吐いて逃げましたね…

YF22の方へ走って逃げるヤンキー中尉… 上等だ！ やってやるうじゃないか！

久々にキレそうだよ… 模擬戦やるうよ？ ビキビキ！！

「部下が大変な失礼を… 本当に申し訳ありません閣下。 少尉にも不快な思いをさせて済まなかった」

ウォーケン大尉… 部下の教育は上官の勤めと言いたい所だが、あれは只の兵士じゃないな？ 大方、G弾キメエー派の息がかかった奴なんだろうな。 なら逆にあんなのを部下に持った大尉の方が被害者、とばつちりを受けた少尉もいい迷惑だ。

「いえ、大丈夫です大尉。 それよりも准将の方が…」

「重ね重ね申し訳ありません准将」

「貴方のせいではないですよ大尉。 篁少尉、私が不甲斐無ければかりに少尉にまで嫌な思いをさせてしまつて本当にすまない」

お詫び替わりにあのヤンキーボコれるようにがんばってくるよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1328u/>

マブラヴ ガノタの野望

2011年8月8日23時28分発行